WYCLIFFE COLLEGE LIBRARY
3 1761 02872 5372

The Teachings of Jesus

- Sermon on the Mount. -

by

Mrs. [illegible] [illegible]

Presented to Wycliffe
College Library by the Author.

基督教思想叢書　第一輯

第一卷	近代文明と基督教	ラインハルト・ニーブル著	第三高等學校教授 栗原基譯
第二卷	イエスの垂訓	立教大學教授	村尾昇一著
第三卷	舊約書の由來	東京女子大學教授	渡邊善太著
第四卷	新約の時代	青山學院教授	松本卓夫著
第五卷	基督教と現代社會思想	九州帝大教授	今中次麿著
第六卷	世界に於ける青年運動	青年會總主事	齋藤惣一著

（以上定價各卷一圓）

イエスの垂訓

定價一圓

昭和四年二月二十日印刷
昭和四年二月二十八日發行
昭和四年八月一日第四版發行

著者　村尾昇一

發行兼印刷者　高井能

發行所　東京市牛込區山伏町十四　イデア書院
電話牛込　三六五六番
振替東京一五四二三番

大杉印刷所

發賣所
（東京）廣文堂　東京堂　北隆館　東海堂　（大阪）柳原　福音社　（京都）博省堂　（名古屋）川瀬　星野　（久留米）金文堂　（佐賀）大坪　（鹿兒島）小原（長岡）目黒　（新潟）萬松堂　（札幌）富貴堂　（長野）西澤

り』（コリント前書三章、十一節）といつた所以であり、

イエスが、

『凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家を建てたる慧き人に擬らへん』

と仰せ給ひし所以である。

いことを見出す。しかも、神と、その子イエス・キリストを信ずるの信仰に由つて、そのことが可能であることを經驗する。そしてさうした歩みの中に、全く新らしい、そして眞實なる生命を見出す。

されば、神とキリストに關する最も慥かな證明は、科學と哲學の領域を出でて、社會學と、心理學との領域へ這入つて來た。學者の書齋と、研究室を出でて、實際に生ける人生の中に突入して來た。

これは單なる『新らしいこと』では無い。永遠なるキリストの眞理が、大戰といつたやうな大振盪に會つて、永く埋れてゐた思辨の塵から露はれ出でたのである。

まことに『キリストを神の子と信ずること』の外にキリスト教は無い。しかし、イエスの生活原理を己が生活原理とすることなくして『キリストを神の子と信ずること』は、でき無い相談である。

さればパウロが

『既に置きたる基のほかは誰も据うること能はず、この基は卽ちイエス・キリストな

キリスト教徒となることが、以前のやうに不人氣のもので無く、ある方面に於ては、キリスト教徒であるといふことが、却つて或種の利益を持ち來すといつたやうな現狀の日本に於ては、クリスチヤンに對する世間の質問も漸くその調子を變へて來る。そして、

『私はクリスチヤンに爲りたいのですが、クリスチヤンになるには、何をすればいいのですか』といつたやうなことが平常な質問となつて來る。

そして、それに對するクリスチヤンの答も亦調子を變へて來た。

以前、特に大戰以前であるならば、クリスチヤンであるといふことは、この物質的宇宙の中に、神があるといふことを信じ、又キリストが神の聖子であるといふことを信ずればいい、といつた調子であつた。

しかし、今日、世界大戰後に於ては全く異つた方面に重點が置かれる。

クリスチヤンとなるといふことは、先づ第一にキリストの途を踏むことだ。その途を踏み出さうと試みる時、我等は、あるが儘なる我等を以てしては、到底それができな

『思ひ切つて幸福さ、そして、その幸福といふのは、大資産家だとか、所謂粋な人とかいつた種類の人々の間に決して見出し得ない性質のものだよ』と彼は答へた。

『我々もさうした秘密の鍵を握り度いものだね』と友人はいつた。

『我々は頑固過ぎるのさ。そして餘り高ぶり過ぎてるのさ』といふのがその答であつた。

そしてこの友人は自ら記して、

『世界の人々は、キリストの教説を拒否したことに對して、極めて高い價を拂つてゐる。しかもキリストはその最善を盡して、我等に行くべき途を示してゐ給ふのである。そして、ただ囚はれざる精神の所有者のみが、己れの凡てをキリストに捧げ奉り、それに由つて計り知られぬ幸福を己がものとするのである』

といつてゐる。

を經驗する。

ニューヨークの貧民窟に働く一人の救世軍女士官があつた。彼女はその獻身的な奉仕によつて、さうした土地の勞働者達の間に於て多大の好評を受けることとなり、彼等の間に於ける天使として尊敬されてゐた。

しかし、救世軍に於ては、ある士官が、一任地に於て餘りに好評を博する場合には、弊害を生むことが多いのであるのに鑑み、その人を他へ轉ぜしむることとなつてゐる。そこで、この女士官も亦、他へ轉任を命ぜらるることとなつた。それに對して、この貧民窟の人々は猛烈なる留任運動を起した。そして、そのために彼等が救世軍の本營に提出した願書は、涙無くしては讀まれ無いものだといふ。

この當時、この女士官に會見したニューヨークの大新聞記者の一人が、後日その友人に遇つた時、友人は、

『その士官は幸福だつただらうね』

と訊ねた。

しかもこれ程誤まつた觀測は無い。偉人が必ずしも財産家であるので無く、取るに足らぬ小人が、却つて特殊なる才能を貨財蓄積の上に發揮することが多いのである。

（二）彼等は、金錢の蓄積といふことが、人生至上の幸福を與へるものだと考へてゐる。

しかも、ここにも大なる誤りがあるのであつて、人性の構成は、さうしたことに由つて滿足を與へられないやうに出來てゐるのである。金錢が與ふる幸福は、益々飢渇を增進せしめるそれであり、刺激より更に新たなる刺激へと、ただひたすらに漁り行く『退屈』の亡者を作り出すに過ぎないのである。

才能といふことも、地位といふことも、それがより高き目的への資料としてこそ價値はあれ、それ自身が人生努力最後の目的となる時、それは人生破壞の機緣とならないでは措かぬ。

『人そのために生命を棄つる。之より大なる愛はなし』（ヨハネ傳第十五章十三節）

愛が生命である。愛ありて人生はまことに貴い、愛ありて人は始めて『生き甲斐』

廻りに廻る礫石に砕かれて、細かに分たるれば分たるる程、その價値を增し行くものは果して何であらうか？

流るべきものの總て流れ去つた跡に、猶且殘り得る眞實の人生は、果して何ものであるのであらうか。

人の世の多くの財と、才能と、地位とは、既にさうしたものを豐富に受けて生れ來つた人々には、眞實に貴いものだとは考へられてゐない。さうした風な人々は、さうした物共が、彼等に眞實なる人生を味はしめるもので無いことを充分承知してゐるからである。

しかし、さうしたものに惠まれずして成長し、さうしたものの獲得のために努力しつゝある人、特に金錢の蓄積に努め、また或程度までの成功を收めつゝある人々には、誤まつた人生觀察が行はれる場合が多い。

（一）は、彼等が金錢蓄積を以て、人の價値に隨伴するものと考へることである。乃ち、多大の金錢を獲得したるものは、それだけ『偉い人』だと考へることである。

對する投資のやうに見え無いではない。流るる儘に、有り來りの途を進めばいいでは無いか。

そして、さうした途を取つた多くの人々の、現に與へられつゝある成功と幸福に見ても、さうした撰擇の正しいことが示されてゐるではないか。

イエスの理想主義といつた高い斷崖に家居して、その下に穫々とゆらぐ豐かなる收穫を無視するは、餘りに狹量な人生觀では無いか。

さう考へる人々が多い。

3、神の與へ給ふ判斷が眞價値を定める

しかしながら、

「神の碾臼は遲く廻轉る。しかし、その碎く粉は極めて細かである」

時の衡にかけてはいと貴しと見えるものが、永遠の計尺の前に果してその存在を保ち得るのであらうか。

『人を見たらば盗賊と思へ』『男子門を出づれば七人の敵あり』といふことに、兎にも角にも、最も危険率勘き人生観ありとするも亦それである。

ローエル歌ふていふ。

『C大将は、えらうすばしつこい人ぢや

地位か補助かを與へさへすれば、どつちの側へでも屬いてゐる。

しかし、矢張り、方針不變更が大将の行き方、

いつも唯一派にだけ眞劍に盡す、

その一派とは乃ち大将自身ぢや。』

『最小抵抗の方面への突進』それが最も健全な、最も安全な方策であるやうに見える。長いものには巻かれつゝ觸らぬ神には無き祟りを、ただ一向に避けてゐればいい。前代の人々の踏みたる途を、周圍にある人々と共に手に手を取りつゝ進めばいい。『新らしき生涯』といつたやうな、何とはなしに頼りないものへの突進は、今目の前に見えてゐる青草の地を棄ててしまはなくてはならないのであれば、當て無き事業に

2、有り來りに從ふは砂上の家

かくまでハッキリとした前車の覆轍があつても、次から次とその後を逐ふ愚か者の出で來るところに、人の世のあさましさと悲しさとがある。

神を信じ、人を信じ、神を愛し、人を愛し行くイエスの途は、世の人の撰ぶを常とするそれと、餘りにも甚だしい隔たりを持つてゐる。山上說教の中に示し給ふたやうな主義原則を行ふといふことは、それは餘りにも損失多き生涯のやうに見える。土うすき砂地、東風西風の何れにも打ち惱まさるるそれであるかにも見える生涯である。故に世の人は、もつと確實らしい、もつと報復の多かるべき途を撰ばうとする。

そして、さうした目的に、最もよく合致するらしく見えるものは『有り來り』のそれである。

ユダヤ教の戒律を、ただ一向に守ることが、最も確實なる宗教行爲であるとした、イエス當時の人々がそれであり、

善き地に善き撰擇を爲したりし幸福を身に感じつゝ、安らかに眠つてゐた彼の人の家は、溶けたる雪水の洪水に、一夜の内に洗ひ去られる。壁の裂目から、彼は漸く身を以て遁れはしやう。しかし、彼の家も、彼の田園も、悉く失はれ去つてしまふ。

されば、まことに賢き人は、この河床を撰ばない。彼の住居は土うすき岩地に立てられる。耕作の勞作に對する收穫は尠いかも知れぬ。濕氣を帶びた東風も、寒さを伴ひ來る西風も、思ひの儘に軒端を擊つであらう。しかも彼はそれに堪えて行く。そして、着々として永遠の策を講じ行くのである。砂地に立てたる人々の家が、春の雪解けに押し流されるを見つゝ、この岩の上に家を建てたる人は、己が住む地の幸ひを喜ぶのである。

ガリラヤの住人であつたイエスとその弟子達とには、かうした事件はいくたびも繰り返へさるることとして、見馴れ聞き馴れたる經驗であつた。

ガリラヤは石多き土地、少し深みのある土を求めやうとすれば、それはかうしたワデイに於てで無くてはならぬ。

ワデイの初夏は美しい。青い草の茂みに、妍を競ふて種々の花が咲く。その住家を築かうとするものには、これ程好適らしい地は他に見出せない。そこで大抵の人はそこに自分の家を建てる。そして、日が月と老ひ行くにつれて、その人の撰擇が賢いものであつたことは、實際の效果がそれを證明するやうに見える。地中海からの濕氣を帶びた空氣を運び來る西風は、兩側に聳えたつ河岸にさへぎられて、ただ程よきだけの雨を草地に降らす。

されば秋となつて實る果物にも、熟れ來る穀物にも、地の幸のみが見出される。寒い冬が來ても、烈しい風は家に吹き當らない。よき地に、賢き撰みを爲したる人の幸福は、ここにその絶頂に達したとさへも見えるのである。

しかし、春が來る。春の日が進む、河上に、河床に、兩岸に、積りに積つた冬の雪が、一夜の內に溶け去るべき日が來る。

二三、この基の上に

——イエスに由る生き方——

さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。すべて我がこれらの言をききて行はぬ者を、沙の上に家を建てたる愚かなる人に擬へん。雨ふり、流漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし（マタイ傳七章二十四—二十七節）

一、岩の上に立てた家と砂上の家

ガリラヤの高地から、ガリラヤの湖へ流れ入るいくつかのワデイがある。ワデイといふは、常には水の無い河床のことである。廣い河床の、時には一の谿谷をさへ成すそれである。

イエスに對して還り行く生命の流れが無かつたのである。故にイエスに出れる生命は彼等に失はれてゐるのである。「われ斷へて汝らを知らず」である。

然らば、イエスに對して還り行くべき生命とは何であるか。

それは、マタイ傳二十五章三十一節以下に明確に示されてゐるのであつて、飢えたる者に食はせ、渴きたる者に飮ませ、旅人を宿らせ、裸なるに衣せ、病人を見舞ひ、獄にあるものを慰問することである。

そしてそれが「父の御意を行ふこと」である。

『凡そわが弟子たる名の故に、この小さき者の一人に冷やかなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし』（マタイ傳十章四十二節）

と又教へてゐ給ふのである。

ヂーのやうに、イエスは己れに從ふものが『命がけ』なることを欲し給ふ。人生は眞劍そのものであり、半信半疑の人々を足手纏ひとしては、必ずそれが敗北に終るべきを知つてゐ給ふたからである。熱烈なるところにのみ生命が存在し得ることを熟知し給ふたからである。

3、返らぬ生命は死ぬるものである

生命は、それが熱烈であるとともに、相互的であり又循環的であることを必要とする。草木も動物も、皆その生命液の循環に由つてその生命を保持し得るものである。イエスに由れる人生々命も亦、この法則に從はなくてはならない。

「汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだし、汝の名によりて、多くの能力ある業を爲し」

これはイエスの生命が、彼に從ふものに與へられたのである。

しかしながら、彼等には「我父の御意を行ふ」ことが無かつた。卽ち、彼等には、

焦慮しつゝあることを示す。

故に、行動は、言語に盛り切れざる生命の發現であると解せられる。

2、生命は行ひに表はれる

イエスが、彼に從ふものに求め給ふは、溢るるばかりの生命である。されば、彼に向つて『主よ主よ』といふもの悉くは同一種にあらず、其處に重大なる差別の存することを指示し給ふたのである。

（一）は、イエスに對する熱意が、漸く言語上の宣言に迄達し得た人々である。

（二）は、乃ちイエスの欲し給ふ人々であつて、彼に對する熱意が、言語に發表し得る以上に豐富であり、又熱烈であるのである。

イエスが世に行ひ給ふ生活革命の運動は、氣紛れや、物見遊山ではないのであれば、その追隨者の多きを以て滿足し得ないのである。

士師記に記されたギデオンのやうに（士師記第七章）又はイタリーの英傑ガリバル

哲學者輩には「この囀づる者」と罵られたパウロが、その思想内容(智慧)に於ても、その表現法(言)に於ても、第一流者と伍して聊かも恥ぢない優れたるものでありしことを示してゐる。

しかるに彼は、次で到つたコリントに於ては「兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の證を傳ふるに言と智慧との優れたるを用ひざりき。イエス・キリスト、及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと、心を定めたればなり」といつた態度を執つてゐる。(使徒行傳十七ノ十六及びコリント前書二ノ一―二を看よ)

彼は慥かに哲學者達を説服した。しかし、彼の裡に燃え熾つてゐる眞理の焔は、さうした表現を以てしては滿足し得ない程に熱烈であり、殆んど言ふとことを知らないまでに壯大なものであることを、彼は痛感したのであると思はれる。

言極まる時、人は行ふのである。手を振り、足を動かし、各種の身振りをするは、彼の内にあるものが、言を以て充分に表現され得ず、何等か他の方法を見出さんとて

二二、まことの弟子

我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは天國に入らず、ただ天にゐます我が父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。その日おほくの者、われに對ひて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を爲ししにあらずや」と言はん。その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。（マタイ傳七章二二―二三節）

1、言極まる時、人は行動する

學都アテネの、その學府たるアレオパガスに於て、アテネ人の藝術的宗教（偶像）を出發點とし、ギリシヤ詩人の名句を引用しながら、手際見事にキリスト教の眞理を闡明したパウロの雄辯は、傳道說教の壓卷であり、ストイツクや、エピキユリアンの

彼が如何ばかり義を唱へてゐても、そして、それが爲めに、如何ばかりの努方と熱心を示さうとも、若し彼が愛に叛き、寛容に反するならば、彼の目的は、我等に食を與へんがためでは無くして、我等を彼等の食物とせんとするにある。

この標準を以て、我等の指導者を撰別せよ。その餘のことに至つては、その教說の差異は只周圍の事情に因由するのであつて、その何れもが我等を正しく且完全なる港に入らしむべき燈明である。

迷ふ場合が可成りに多い。そして、實際、羊の扮裝をしながら、實は狼である場合が多い。我等は、乳と羊毛とを與へる輩が、却つて我等の肉をその餌食とせんと計るものであることを見出す。

然らば、我等は如何なる標準に由つて、その善惡を判斷すべきであらうか。

イエスはそれに對して、

『その果によりて彼らを知るべし』

と教へ給ふた。

眞實なる教師は、神の聖靈を把持するものであらねばならぬ。神の聖靈を把持する者の結ぶ果は、

『愛、喜悅、平和、寬容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制』である。

何ものよりも先づ愛である。

彼の述ぶるところが眞であつても、若しそれが愛に於て缺けてゐるならば、彼は僞の教師である。

しかし、さうした功罪、正邪といふことは、時代を經過して見ればなる程明らかなることとして、我等の眼に映じ來るのではあるが、しかし、それ等の教説が實際に發せられてゐる時代の渦中にあつては、正確なる判斷を所期することが困難である。

イザヤの時代、特にエレミヤの時代にあつては、既に述べたやうな、『僞りの預言者』が横行した。

しかし、彼等のいふところは、イザヤ、エレミヤなどのいふところと等しく、如何にも尤もらしいのである。

いな、僞りの預言者達の方が、寧ろ眞理であるらしく思はれたのである故に、彼等は民に歡迎され、眞實の預言者は民より迫害を受けた。

今日、我等の間にも、この二種の人々があるかも知れない。

その説だけを聞いてゐれば、如何にも眞理と思はれるために、我等が、その去就に

『エルサレムは陷落し、國は滅亡する』

と預言した。そしてそれが爲めに彼は多大の迫害を蒙り、又多數の所謂『僞預言者』達は彼に反對して、エルサレムの平安なるべきを主張したのであるが、遂にエレミヤの言が眞實となり、エルサレムは陷落し、ユダの國は滅亡したのである。

その言葉のみに就て見れば、イザヤとエレミヤとは、全く相反する語を述べて居るのであるが、しかも、それは何れも、ユダを神に忠誠ならしめんがためのものであつたことに於て一致してゐるのであり、只その周圍の事情の變化が、彼等をして相異なる語を發せしむるに到つたのである。

キリストの教會に於て、種々なる教説が出で、それが爲めには多數の教派をさへ作り出すに至つたのであるが、それは皆その當時に於ける事情を背景として解釋さるべきものであつて、教説の文句にのみ囚はるれば、遂にその眞精神をさへも沒却するに至るものである。

着々として周圍の國々を征服し、遂にエルサレムを包圍するまでに至つたのであれば、ユダの民が、その神として尊崇するヤーヱ（エホバ）は、果して眞に強き神に在すや否やを疑ふに至つたのである。

イザヤの職分は、神に對する民の信仰を固めることにあつた。故に彼は、

『エルサレムは滅亡せず』と說いたのである。

然るに、その後一世紀を經て、ユダに於ける狀態は、惡より惡に進み、人々は『エルサレム不滅』の信條を振りかざして、徒らに平和を夢み、當時、アッシリヤを滅ぼして、新たに世界の勢力となりたるバビロンに對して反抗し、エヂプトと相策應して、自らの勢威を張らうとした。しかしエヂプトと結ぶことは、ユダの宗教事情を腐敗せしめることであるのみならず、之を政策上より考察するも、既に老境に入りたるエヂプトと結んで、新興の國バビロンに抗するは、甚だしき愚策たることは明白であつた。

故に、神の命に由つて立つた預言者エレミヤは、ユダの罪と、その施政家の謀策との爲めに、

ものではなく、却つて我等を其處より避けしめやうとする危險信號である。

即ち、我等は『かくする勿れ』といふ敎訓に敎へられて、右を避け、左を免れつゝ我等の生涯を進め行かねばならないのである。

從つて、我等の耳に響き來る聲は、決して同一のものでは有り得ない。あるものは、『右へ行けよ』である。あるものは『左せよ』である。あるものは『急げ』であり、あるものは『徐かに』である。

されば、若し我等が、個々の敎訓そのもののみに卽して、それが發せられたる際に於ける特殊の事情を無視するならば、我等はその實際の意味を捕捉するを得ず、自らの去就にも迷ふに至るのである。

昔し、預言者イザヤは、ユダの首都エルサレムに關して預言し、それは神自ら住ひ給ふところである故に、アツシリヤの軍兵如何に强くとも、この都を陷れることは出來ないのだと說いた。

當時、ユダに於ける人心の動搖は極めて激甚のものであり、異敎の民アツシリヤが、

二一、まことの教師

偽預言者に心せよ。羊の扮裝して來れども內は奪ひ掠むる豺狼なり。その果により彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。斯く、すべて善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡しき果をむすぶ。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投入れらる。然らば、その果により彼らを知るべし（マタイ傳七章十五―二十節）

一、種々異なる聲が我等を導びく

只一つの燈臺に差し招かれて、まつしぐらに進み行けば、それで善いといふのであれば、人生のことは割合簡單であるかも知れない。

しかし、我等の魂を導くものは、寧ろ多數の燈臺であつて、それは我等を差し招く

険しい崖を辿る山の細路にも比すべきものである。

イエスはさう教へ給ふたのである。

性的にカトリックである』といふ語のある所以である。

しかも、多數の求むる、所謂大仕掛けの宗教なるものは、却つて生命の宗教ではなく、眞に生くる途は、極めて取るに足らないことのやうに見える、神と人とに對する信にあるのである。

狹き門より入れ……

とイエスは教へ給ふのである。

死海の岸なるエリコから、首都エルサレムに登り行くべき途には脇道がある。本通りらしく見える途から急に右に折れて、小さな途を通つて行かねばならぬ。もし、大きな途を、その儘につき進んで行くならば、その人はエルサレムへは達し得ないで、市中の汚物を棄てて燒く、恐ろしいゲヘナの谷へ出ることになる。

眞の救ひが、目立たない工夫の中にあることを教へ給ふに當つて、イエスの心中には、多分この脇道のことが浮んでゐたのではないかと思はれる。

生命にいたる門がかく細いだけで無く、生命にいたる路は、冒險そのものであつて、

所有者として遇することは、冒險中の冒險である。しかも、さうした『信』なくしては、我等は眞の生を樂み得られない。先づこの冒險を試みよ。さらば人生に於ける勝利の第一歩は先づ汝のものである。

イエスは、さうした意味のことを述べられたのである。

7、生くる途は見かけ倒しでない

神に對する信と、人に對する信。冒險といへば、それは眞に冒險であるに相違ないが、同時に又、簡單といへば極めて簡單なる行き方である。

百巻の書を讀破せよとか。數年に亘る難行苦行を敢てせよとか。嚴密なる戒律の生涯を送れよとかいふのであれば、それは如何にも生命への途であらうかとも思はれる。

しかも、かく思ふ人々は世人の多數を占めてゐる。祭司宗教、戒律宗教、秘密宗教が常に世の多數を包擁するのであり、『生れながらの人（救はれてゐない人々）は、本

現はれて來ることであらう。

不幸にして我等は、相互に胸を割つて見せ合ふことができないのではあるが、しかし、幸ひにして、それに代るべき良き方法を持つてゐる。

それは、

凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ、

である。

我等が人にせられんと思ふことの中最も根本的なものは、己が純情、己が眞情の認められんことである。

されば、人の純情とその眞情とを認めよ。人を我と同じい人として信せよ。それが生くべき途である。(律法と預言者といふは、ユダヤ人の宗教全部を包括する語であつて、今日我等が『宗教』といふと同一義である。そして宗教とは『眞實に生くべき途』に外ならない)

前章に說いたやうな、危險、邪惡の人々が多い世に、他の人を己れと同じい好意の

である。乃ちキリストとその事業、正義と愛との爲めに『己が生命を賭け（ピリピ書二章三十節を見よ）』ることである。その成敗を顧慮せず、神の爲めにすることは必ずよき結果を來すものであることを信じて、勇敢に、眞と善と美との爲めに突進することである。人はその間に眞實の生命を見出すのである。

6、人をその最上價に於て受取れ

神を人として信ずるとともに、人を人として信ずることも又、眞に生くるものに缺ぐべからざる要件である。

既に前章に於て說いたやうに、人を眞實に理解するといふことは極めて困難である。唯我等は、自分の內心奥深きところに、眞實のものが潛んでゐることを知つてゐる。他人がそれを理解してさへ呉れたら、それは如何に幸ひなことであるのであらう。『この胸を割つて見せたい』それが何れの人にもある衷情であらう。そして若し人々が相互の胸を割つて見せ合ふことができたなら、如何に圓滿な、そして幸福な社會が世に

信ずるにあることを指示し給ふたのである。

あるが儘なる人間は、まことに『惡しき者』である。しかも、その惡しきものながら、彼等がその子に與ふるものは石ではなくしてパンである。蛇ではなくして魚である。必ず善き賜を與へるのである。

神を人として信せよ。神が與へ給ふものは必ず善きものであると信せよ。必要に應じて神は必ず與へ給ふのであると信せよ。求むれば與へられ、尋ぬれば見出し、門を叩かば開るることを信せよ。

勿論、之は信ずるに困難なる問題である。大なる冒險を意味する問題である。しかし、その冒險なくしては、人生の戰闘に於て眞實なる勝利を得べき封緘命令の保持者たるを得ないのである。

かくして、神が必ずよき賜を與へ給ふべしと信ずることは、既に與へられたる賜そのものを善しと見ることである。

我は如何に微さくとも、我に加ふるに神を以てせば、必ず事なるべしと信ずること

のである。

しかし、これは神を器械と同一視することである。擬人法を排した彼等は擬器械法に陷つたのである。

人と器械と何れが尊いか、三歳の童子にも分りさうな理屈である。しかもそれが宗教のこととなると、この世の智者學者と雖も、神を器械として見ることが、神を人として見ることよりも更に合理的であり、崇高なる見解であるとするのである。そして、さうした謬つた見方は、アモス、ホセアの時代に於けるイスラエルが遂に國の滅亡を來したのと同じやうに、二十世紀の國々をし世界大戰といふ怖ろしい淵に落し込んでしまつたのである。

神を人と異なるものとして信ずる道は、結局滅亡に至るべき途なのである。

5、神の與へ給ふものは皆善と信ぜよ

イエスは、かやうな誤想を背景とした人々に向つて、眞に生くる途は神を人として

イエスの當時に於けるパリサイ宗教の缺陷も、亦、神を人と異なれるもの、人が人に對しては負はするを遠慮する程なる戒律勤行を、神は人類に要求し給ふのだとする點にあつた。神は無人格無人情なる律法と化し、嚴密なる原因結果の方則に由つて働くものとなつてゐた。卽ち、神は律法に從屬するものとなり、その意味に於て神の絕對權威の否定であつた。

近代の不信者達も亦、他の方面よりして、パリサイ人と同一轍なる誤謬に陷つた。彼等は、神を人と同じきものとして見ることを擬人法（アンスロポモーフイズム）であるとして排斥する。そして、最も正しい見方は、神を宇宙に於ける嚴正なる自然法則として見ることであるとする。卽ち宇宙は一の整頓したる器械であり、神とはその器械及び器械の運轉であるとする。其處には何等自由なる意志の發動といふが如きことはなく、又攝理といふが如きものも無い。凡ては運命であり、法則であるとする

ホセアは心から彼女を愛してゐたので、今、かうした無殘な家庭生活の破綻を經驗することは、彼に取つて堪え難いことであり、己が愛するものが、さうした境涯に身を投じてゐるといふことは、思ふだけでも身慄ひすべき厭はしいことであつた。

しかも、省みると、さうした婦人をさうした風な境涯に置くといふことはイスラエル人が宗教の名に於て平然として行ひつゝあることではないか。卽ち、彼等は、人間に取つて嫌惡に堪えざることを、神には當然、否却つてその悅び給ふものに屬する事柄だと見てゐるのである。そして、それがために國内には淫風滔々として、國家滅亡への道を急ぎつゝあるのである。

かくて、ホセアは立つた。そして、神の愛が、父の子に對する愛であり、夫の妻に對する愛とその類を同じくするものであることを強調し、人が見て以て淫穢なりとすること、不誠實なりとすることは、神も亦等しく淫穢とし不誠實となし給ふのであつて、神と人とが全く類を異にするものであるとするは、根本的なる誤想に出づることを指摘したのであつた。

といふ考へから出でた誤りである。

アモスは之に反對し、神は正義の神であつて、祭禮といふが如き賂路を受け給はざることを明らかにしたのであつた。

3、ホセアの見た宗教上の惡行

ホセアの直面した問題は更に深刻であつた。

當時、イスラエルの宗教は、カナン人の宗教なるバアル禮拜の影響を受け、純潔を主義とすべき神の殿に、種々淫祠的なことが行はれるやうになつてゐた。そして『聖き女』と稱せられる娼婦の群が神殿に附屬し、これに接することが一の宗教行爲とさるる迄に到つてゐた。

ホセアは、神の默示に從つて、かうした娼婦の一人なるゴメルを娶り、一子を擧げたが、ゴメルは矢張り舊來の放逸な生活が懷かしく、再びその生活に復歸してしまつた。

それとともに上流者の下層者に對する壓迫、不正不義の横行も又盛んなる時であつた。しかも宗教上の禮拜は愈々盛んであり、宗教と道徳との間に何等の關係も無いかに見えた。

ユダヤ人の律法に從へば、金を貸してその爲の質物を取るとも、もしその質物が、借金者の衣服であるならば、それは日の暮るるとともに之を返すべきものとされてゐた。それは、この憐れむべき借金者に取つて、唯一の衣服であるとともに、彼の有する唯一の寢具であつたからである。

然るに、その貸金者が、もし、その夜神殿に參籠し、そのためその衣服が必要であるといふならば、これを返さずとも可いといふのであつた。

當時に於ける社會上の不義不正は、大底かうした思想に胚胎するものであつたのである。

しかし、さうした誤想は悉く、神を人間と全く異なつたものとするに基づく。人間の情として忍び得ざることを、神は己れに對する祭りの爲めとあれば、之を嘉し給ふ

成功ある生涯、乃ち救ひの生涯を活くべき第一の秘訣は、神を人として信ずることである。

このことは、ある人々に取つて、如何にも奇異なること、又不合理なることと感せられるかも知れない。しかも世に於ける邪悪と不幸とは、主としてこのことが了解されず、又は拒否されることに由つて起り來るのである。そして眞なる宗教家の職分は常にこの過ちを是正することにあつた。

そのことはユダヤ人の宗教史に於てもこれを覗ふことができる。

ユダヤ人の宗教思想史の上に於て、革命的な飛躍が行はれたのは、紀元前八世紀のことであるが、その運動にあづかつた最初の代表者と目すべきものは、預言者アモス、及び預言者ホセアであつた。

アモスが世に出でた時代は、イスラエルの國は國威伸張、産業振興の時であつたが、

ものは、人間たることを辭職して、器械に後退しなくてはならない。運命論者が人類を悲觀に導き、悲觀論の保持者が、社會的に放棄され終るか、又は自ら己が生命を放棄し去る事實は、皆この理由に基づくのである。

しかし、封緘命令を與へられた人々と雖も、何の指示をも受けずして出發するのではない。必ずある種の方針又は方寸を授けられて出發するのである。

人生に於ても、何等か之に類した方針、又は方寸が無くてはならぬ。その與へられたものが良く、又正しいものであるか、或はその反對であるかによつて、人は成功ある救ひの生涯を送るか、又は滅びの人として、不成功に終るかが定まるのである。

然らば、その良く、正しき方針とは何であらうか。

それは、左の二つに就て、冒險的態度を執ることである。

（一）神に對する信

（二）人に對する信

イエスはそのことを指示し給ふた。

ができる。

封緘命令といふは、ある一定の處に達し、又はある一定の時間に於て、始めて之を開封し、それによつて、それ以後に於ける行動を定むべき命令である。

寸善尺魔といふことは元來如何なることを意味するのであつたか私には明らかで無いが、この語が指示する一面は乃ち人生の眞理を道破してゐるのであつて、我等は人生全部に關する計畫圖（スペシフィケーション）を先づ以て與へられるので無く、問題に當面して始めて、右すべきか左すべきかを定むべき指針を與へられるのである。既に說いた『明日は明日みづから思ひ煩はん、一日の苦勞は一日にて足れり』といふ敎も、かうした意味を有してゐるのである。

されば人生は一の冒險事業である。そして、それが冒險であるところに重大なる意義もあり、貴重なる價値もある。

器械には何の冒險もない。それが爲すべき仕事は最初から決定してゐるのであり、その行き着くべき終點は、その發途の時から分明してゐる。だから冒險的生涯を厭ふ

二〇、生くる途

求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求むる者は得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。汝らのうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にゐます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。狹き門より入れ。滅にいたるは門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし、生命にいたる門は狹く、その路は細く、之を見出すもの少なし。（マタイ傳七ノ七―十節）

一、問題に直面せねば分らぬ人生

我等がこの世にあつて生を營む有樣は封緘命令を以て戰に出でた軍艦に比べること

しかし、我等が特に一週中の一日を撰んで、之を神を拜するに用ふべしと定めたりとせば、一切の努力を擧げて、之を聖ならしむるために盡すべきである。そして日曜日の時間は之を最も貴きものとして嚴かなる心を以て處理すべきである。

聖きものを、汚れたるものより區分すべき、正しき批判の力を用ひよ。それが、我等の裡なる惡しきものを去り聖なるものを發揮せしむる道であり、從つて、我等をして、他の人々の裡にある聖にして貴きものを、明らかに見るを得しむる道である。

イエスはそれを指示し給ふたのである。

これと同樣のことが宗教についても言ひ得られるのである。

我等は何處に於ても神を拜することができる。詩人が歌つたやうに、

『あるがままなる草叢も
神に燃えつゝある』

のである。

しかし、我等が、特に神と交はるべき場所として定め、それを會堂と稱へたりとすれば、それは、我等に許されたる一切の力と資料とを盡して、美化し、又聖化さるべきものであらねばならぬ。

賤が伏屋にも神は宿り給ふのであつて、あばら屋なるが故に神がそこを撰み給ふのでない。故に、我等は、力を盡して聖きものを聖くし、之を穢さざらんがために努力しなくてはならぬ。

又、何れの日とても、神に取つては皆同一のものであり、一の日が他の日よりも聖いといふ理由はない。聖しといへば何れの日も皆同じく聖い譯である。

しかし、ここに記されてゐる教訓が明らかに示してゐるやうに、彼はこの二者の間に程度の上に相違のあることを認め、そして、その相違に對して正しき批判を爲すことの必要を主張されたものと思はれる。

結婚は、男女の間に於ける愛を基とするのであれば、その約束を堅める品物は何ものであつてもいい譯である。

もし、二人が餘りに貧しくして、鉛以上の指環を買ひ得ぬといふのであれば、鉛の指環を以て結婚の式を行ふことは少しも差支へなきことであり、結婚の神聖さは、それに由つて少しも損はれない。

しかし、豐かなる資産を有する人々の結婚に於て、鉛を以てするも、結婚の意義變らずとて、一世の重大事を記念するに劣等の金屬を以てする人あらば、その人はその結婚を己に取りての重大事であると考へてゐないことを示す。彼等がまことに純潔なる相思の男女であり、その結婚が彼等の愛の結晶であるならば、彼等は必ず、彼等の力に適ふ最もよき指環を用ふるであらう。

我等は正しき批判を用ひて、彼等に乗せらるるを防ぐ必要がある。

イエスは、そのことを說かれたのである。

2、聖を聖とする心掛けの必要

『聖なる物』と譯された語は、『指環』と譯され得るのであり、さうした方が『眞珠』とよき對照をなすことによつて寧ろ正當な讀み方であるとも思はれる。しかし、それが『聖なる物』と譯されるやうになつたのは、その意味を取つてのことであつて、決してその目標をあやまつてはゐない。

イエスは、宗敎的なるものと、世俗的なるものとの間に截然たる區別を立てることを勸め給ふたのであらうか？

パリサイ人こそ、さうした區別の主張者であつたのであり、イエスがそれに對して反對されたるに見れば、イエスにあつては、宗敎的と、世俗的との間に本質的な區別は存在しなかつたもののやうである。

ともに直ちに之を追ひ出してしまふ。されば『犬』とは最も穢しきもの、最も悲慘なるものの代名詞である。そして人を『豚』と呼ぶことも、これに劣らぬ惡口である。犬が漁り歩くもの、豚が好んで群がるものは、この世に於ける屑、人の世の排泄物である。それと同じやうに、この世に於ける醜行、過誤、噂話等を自ら好んで漁り歩く輩がある。

さうしたものに對して、我等は嚴正なる批判を用ひねばならぬ。彼等の熱心や、雄辨に魅せられて、うつかり、人の惡行、又は缺點、或は種々なる過誤、非行について、噂話や批評の仲間とされてはならぬ。

彼等は、我等より、彼等の目的に叶ふ材料を獲ることに努力するであらう。しかも我等が、人の人格に關する尊い資料を彼等に與へ置くならば、何かの機會に於て、彼等が我等に反感を持つに至るとき、それ等は皆我等自らを攻撃非難する材料として用ひられ、我等の有する最も貴き寶なる人格を、彼等のために踏みにぢられるであらう。

一九、聖なるもの

聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐くは足にて踏みつけ。向き反りて汝らを噛みやぶらん。（マタイ傳七章六節）

一、惡しきものを惡しきものとして見分るカ

批判の力を最も正しく使用し、そして、己の中に於ける一切の不純を取り去りたりとして、しかも、世には、我等に害を與ふべき惡性の人々が實在する。イエスは、そのことに對しても猶且盲目なれと教へ給ふたのではない。

イエスは、人性をその如實の姿に於て見るその鋭い批判力によつて、人の中には、『犬』又は『豚』といふが如き稱呼を與ふべき卑劣の輩あるを明察し給ひしが故に、それに對して如何なる態度に出づべきかを、我等に教說し給ふたのである。

ユダヤ人の間に於ては、犬は仔犬の間こそ、人々がこれを飼育するが、成長すると

その中に入れ得るやうな、巨大の眼を有つものは一人もない。」

他人の缺點が眼につくは、他人のそれよりも更に大きな缺點が、我等の中にあるからである。

『疑心はその人の人格を反映する』

と、イギリスの大說教家ロバートソンはいつた。

我等は、他人の中に潛む異常なる力を認め得んがために、我等の中なる缺點排除に力を盡さなくてはならぬ。

イエスは、さうした主旨のことを說き給ふたのである。

イエスは『人』を信じ給ふた。『いと小さきもの』を尊としとし給ふた（マタイ傳二十五章を見よ）。

『此の小さき者の一人を躓かす者は、寧ろ大なる磨臼を首にかけられて、海に投け入れられんかた勝れり』（マルコ傳九ノ四二）と又戒め給ふた。

しかし、パリサイ人は、そのことを信せ得ざりしが故にイエスの敵となつたのであり、それ故にイエスは又彼等を攻撃し給ふたのである。

しかも、パリサイ人の過ちは又、我等の過ちであつて、パリサイ人と同じやうに、我等は他人の内に貴重なる可能性を見出し得ず、却つて、相手の中にある缺點が、我等の注目を惹く。それは何故であらうか。

大工の家に、大工の子として育ち、大工場に於けるその兄弟達との遊戯に、幾多の教訓を見出で給ひしイエスは、今その一を取り來つて、

『他人の眼にある木屑に氣付くは、汝の眼に梁木のある故である』

と喝破し給ふのである。（いふ迄もなく、これは誇張によれる諷刺であつて、梁木を

ぬ。かくすることが批判の正しい使ひ方である。

我等はデモクラシーが正しいのであるといふ。しかし、デモクラシーとは單に政治上のことに留るのではない。

『デモクラシーは、通常なる人々の中に異常なる可能性があり、若し、機會の扉が、充分廣く、平等に開かれるならば、思ひもかけぬ方面より、驚嘆すべきものが現はれるとの確信に基づく。

セーキスピアは、破産した肉屋と、自分の名前さへも書けぬ無學な女との間に生れた子である。

ベートーフエンは肺病の母と、酩酒を常習とする父との子である。

シユーベルトの父は土百姓、その母は下女であつた。

大科學者フアラデーは馬小屋で生れた。その父は片跛の鍛冶屋、その母は碌でなし、そして彼自らの教育はロンドンの街々に新聞を賣り行くことによつて始められた』

(フオスデイック『冒險的宗教』)

たぬ。だから、彼に無情の批判を加へまい」

それが、イエスに從ふものの執る途である。

『人を審くな、審かれざらん爲めなり』

外に表はれた言葉は同じい。しかしその表現が持つ内容は、全く相同じからざるものである。

イエスはユーモアを好み給ふた。諷刺の鋭い力を持ち給ふた。しかも、それは決して無智なる市井の一小民に向けられたので無く、パリサイ人又は學者の輩に對してのみ向けられたのである。そして我等が當時の文獻から學び得るやうに、パリサイ人の諧謔諷刺には骨を貫く鋭さがあつた。イエスは相手を充分辨へて、その批判を用ひ給ふたのである。

3、小さきものの中に偉大性を發見せよ

批判の力はまた、小さきものの中に偉大なる可能性を認むるために使はれねばなら

と命じた。

しかし彼は矢張り左手を擧げてゐる。たまり兼ねた教授は、彼の側につかつかと歩み寄つたが、

そこにこの教授は、學生の右手が存在しないことを發見した。そして、學生が、如何にも申譯なささうに、

『戰爭中に敵彈のために奪はれたものですから』

と辨解するのを聞いた。そして、消えも入りたき心に赤面した。

批判の力は、之を正しきに用ふるやう心せよ。

イエスは、さう說かれたのである。

『彼を諷刺し、彼を嘲罵すれば、毛を吹いて傷を求めるやうなものである。だから、彼に批判を加へまい』

それが、この世の哲理である。

『彼を嘲罵し、彼を諷刺すれば、彼はそれに對して、しつぺい返しを爲すべき力を持

して勉學そのものをも厭ふに至らしむるは、如何に多く繰り返さるる悲しい例であることであるか。

劣等生の過失が、過失で無いといふのでない。彼を無能なりとした教師の批判が謬つてゐるのでもない。その惡罵が、如何に對手の肺腑をつくべきかを思慮せず、その惡罵が果して劣等生を奮起せしむるや否やを考察せずして、ただ漫りにそれが發せられたるところに、批判の無用があるのである。

2、人の心を知り抜くことは困難である

世界大戰終つて間もない時のことである。スコットランドのある大學で、ある教授は、あることに關して、學生の擧手を求めた。

然るに、學生中の一人は規則に反して左手のみを擧げる。

己れに對する揶揄であると推したこの教授は、特にその學生に向つて、

「右手を擧げなさい」

元來批判は、その批判の對象に由つて、之を二つの種類に分つことができる。一は『物』に對する批判であり、他は『人』に對する批判である。

『物』に對する批判に於ては、我等は我等のことを考へればよい。乃ちそのものが、我等に有用なものであるや否やを批判すれば、それで足りるのである。

しかし『人』に對する批判に於ては、我等自らのみがその規準であつてはならぬ。我等を先づ相手の地位に置き、然る後にその批判を始めなくてはならぬ。

イエスの當時に於けるユダヤ教の一教師も、

『汝の友の地位に汝が入るまで、汝の友を批判すな』

と說いてゐる。

しかし、人の世に於て、その實行困難なることにして、この戒の如きは無い。しかも、悲しいことには、人の世に於ける悲慘の多數は、このことが實行されないために起つてゐるのである。

同情なき教師の惡罵が、劣等生をして、深刻なる悲憤を感ぜしめ、ひいては、彼を

一八、正しき批判

なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり、己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるべし。何ゆゑ兄弟の目にある木屑を見て、おのが目にある梁木を認めぬか、視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より木屑をとり除かせよと言ひ得んや。僞善者よまづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて兄弟の目より木屑を取りのぞき得ん（マタイ傳七章一章―五節）

一、批判の力は正しく用ゐなくてはならぬ

批判の力は、我等に與へられた貴い賜であつて、これを使用することは、我等の義務である。しかし、それが貴い力であるために、我等は、その使用法を正しくすべき一切の手段を講じなくてはならぬ義務を持つ。

にして意義ある信仰の生活を歩み得るのである。

9、神の國と神の義とはイエスに由つて體現される

神の國と神の義、それを求むることが眞實に生きることである。しかも神の國と神の義とは單なる理想又は原理ではなくして、一の實在的有心者なるイエスに於て體現されてあるのである。

イエスこそ神の國であり、イエスこそ神の義である。神の國とその義とを求めるとはイエスを求めることである。

神の國と、神の義とを獲るといふことは、イエスを獲るといふことである。

イエスは愛である。そして愛を以て獲らるるものである。愛が、愛を惹くのである。されば、『思ひ煩ひ』を除却されたる眞實なる生は、イエスの裡に生くる生であらねばならぬ。他の何者にも勝つて先づイエスを撰むものであらねばならぬ。

イエス我が裡に在りて、衣食は我を煩はさないである。イエスの生命我に在りて、我は最高の美に輝くのである。イエスと偕なる生活に由つて、我等は悠々自適、眞實

イエスにあつては『今』が最も重要なのである。『明日』も『今』とならざる以前に於ては眞實の價値を有するものでない。故に『今』にその注意を集中するは、一見、短見者流の如くにして、しかも眞實なる達見なのである。

『今日』のために充分なる努力を爲し、しかも猶餘りありといふ人あらば、その人にして始めて『明日』のことに關心し得るのである。しかも、『今』が要求する『苦勞』は人が之を處理し得る以上のものであつて、明日に力を頒ち得る人は世に一も無い筈である。故に『明日の計』といふが如きは、今日に對する義務を缺ぐ人々にのみ存するのであり、然らざる人々に取つては單なる『思ひ煩ひ』に過ぎないものとなる。されば『明日』をして、それが『今』となつた時始めて我等の對象たるものたらしめよ。我等の努力を集中すべきは今日であり、それが我等をして眞實なる生の努力を爲し、遂に自らを完成せしむる最も善き方途である。

イエスはかく教へ給ふたのである。

一定の時期に一定のことを成さんとする計畫ほど、人の「思ひ煩ひ」を多からしめ、それがために、その眞實なる生長の阻止を來らしむるものは無い。

このことを一面に於て例示するものに負債者と貯蓄者との場合がある。

負債者は一定の時期に一定の額を支拂はなくてはならぬ。そして若しその時期を失すれば、その抵當物を失ふか、又は支拂ふべき利子の增加を招來する。

之に反して、貯蓄者は、その獲たるところのものを蓄へ行けばいいのであつて、その間何等の拘束を受けず、安易の心を以てその業に就くことが出來る。負債者の常に戰々競々たるに比すべくもない。

從つて心勞なき努力者の事業は擧り、心勞絕ゆることなき負債者はその能率を殺がるること極めて大なるものがあるのである。

神に任する自然的なる生活を守らずして、自ら事を畫策し、神をして之を援助せしめんとするが如き生活態度は、負債者のそれに似たるものである。

故に「明日のことを思ひ煩ふな」とイエスは敎へ給ふたのである。

なる成長を爲すとき、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりし程なる美を以て、神は之を裝ほひ給ふのである。

人は百合に勝つてゐる。人の美しさは他の凡てのもの以上であらねばならぬ。他の物資を以て人の美を作らんとするが故に、眞實の美は何時までも發揮されない。そして美を求むる人々に「思ひ煩ひ」がある。自然に學べ、信仰うすきものであらざれ。神の求め給ふものを己が裡に發揮せんがために努力せよ。何を著んとて思ひ煩はずとも汝の著るものは悉く汝の美を反映するであらう。

イエスは、さうした意味のことを述べられたのである。

8、明日に對する不安は不健全である

以上說き來つたやうな人の世の思ひ煩ひは更にその時間的な方面に於て「將來に對する不安」となつて現はれる。

しかも、この「將來に對する不安」程その性質に於て不自然なるものは無い。

道德性を包藏してゐる。

しかも、自らを美くしくせんがために、人々は、そして特に女性は、如何に多くの「思ひ煩ふ」ことをしてゐるのであらうか、その外面の美を發揮せんがためには彼等は彼等に屬する他のものの總てを犧牲とし、しかも敢て辭せないではないか。

しかも、さうした「思ひ煩ひ」が如何ばかり眞實なる美に關する無智に起因してゐることであらうか。

宇宙に於て最も美なるものは自然である。いな美といふことは完全なる自然といふことではないか。最も自然なるものが、最も美しいものではないか。

故に、美しからんとするものは、自然ならんことに努めねばならぬ。自然ならんがためには、自然の源泉であり、自然の根抵である神を求めねばならぬ。神の國（神の支配）と神の義（神の主義原則）を求めなくてはならぬ。

今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草（パレスチナの地方では今日も猶枯草を集めて爐の薪としてゐる）なる百合さへも、勞せず、紡がず、自然に從つて、自然

ロンドンの一牧師は嘗て、

『ピカデリーやストランド（淺草、銀座といつたやうな、ロンドンの盛場）を彷徨ひ歩く酔漢や遊蕩兒、彼等は神を求めつゝあるのである』

と說教し、それが爲めに物議を招いたが、しかし、彼の眞意は疑ふべくもないのであつて、人が求むる樂は、神を獲ることに由つてのみ、その滿足を與へられるのである。

故にイエスは、思ひ煩ふ人々に向つて『先づ、神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし』と說かれたのである。

7、自然が最も勝れたる美である

己れの美を求めることは、樂を求めることと同じやうに人性の自然であり、それ自身決して惡しきことではない。

自らを美くし端正にするは社會人としての義務であつて、美を求める心はその中に

従つて、我等は、ある行動或はある事物について、それ自身の有する行爲の善惡といふことにのみ卽してはならない。それが我等各自に對して有する關係の如何によつて、良きものすらも、惡しきものとなるべき場合があるのである。

甘きものを以て滿たされたる胃袋は滋養物を攝取し得ず、卑俗小說の爲めに用ひらるる時間は、それだけ、修養書を讀むべき時間を蠶食することとなる。

故に、我等は、我等が求むる樂しみに就て、極めて嚴格なる撰擇を爲さなくてはならない。そして、正しい撰擇を爲すといふことは、同時に、我等の中より「思ひ煩ひ」を取り除くこととなる。

我等が樂を求めて滿足を得ないのは、例へば菓子を以てして空腹を充たし得ないのと同じやうに、我等の求むる樂みが、眞實に我等の生命に合致するもので無いからである。

人は神を求めるべく創られてある。人が樣々の樂を求めるのは、神を求めながら、しかも、それを求むる途を知らないために、種々なる側路を通るのである。

6、求むるものの選擇が必要である

生活上の不安に次で人々を惱ますものは、欲するものの得られざる惱みである。しかも、かうした惱みは、人々が己が欲するものの何ものであるかを自ら知らないのに基づく。

イエスはそのことを指摘されたのである。

樂しみを求めるといふことが悪いのではない。美しさを求めるといふことが間違つてゐるのでもない。問題は、如何なる樂を求め、如何なる美を欲するかに存するのである。乃ち、求むるものが、眞實のものなりや、又は虛僞のものなりやに由つて、その價値が決定されるのである。

人に與へられた身體は只一つであり、人に許されたる時間は只一つである。故に我等は己が身體をあるもののために使用すれば、同時にそれを他のものに使用することができない。

まことの人生を生きつつあるものは、何を喰ひ何を著るかに氣付かない輩である。何を著るべきかを思ひ煩ふものは、そのことが既に生命の不健全狀態にあることを示してゐる。

されば求むべきは神の國とその義とである。これを求むることは、そして衣食のことを顧みないのは、猪突的な暴擧であると、ある人々には見えるかも知れない。しかし、それが眞實に生活上の安定を得る途なのである。

戰陣にあつて負傷率の多きは怯者のことであつて、勇敢に進擊しつゝあるものに對する敵彈の命中率が極めて尠少である事實は、人生の戰闘にも適用される。

さうした意味のことをイエスは說き給ふたのである。

彼は衣食のことが惡であると敎へられたのでもなく、衣食が不必要であると說かれたのでもない。衣食のことに「思ひ煩ふ」ことが、決して衣食を得るの途で無いことを指摘されたのである。

せしめ、その安定を與ふるものは『信用』である。

それと同じやうに、人が人生に於て眞實の安定を得る途は愛であり、その愛は神に對する『信用』乃ち『信仰』に由つて獲られる。

5、衣食の爲たるかを忘るる努力の生活

空の鳥は何等計畫的なる勤勞をしない。ただ鳥としての機能を力の限りに發揮してゐる。そして神はその鳥を養ひ給ふのである。故に人に取つて最も必要なのは、人としての機能を力の限りに發揮することである。人としての機能は生命にあり、體にあるのであつて、それを養ひ又は保護すべき物質にあるのでない。何を喰ひ、何を著たかといふことによつて人の價値は定まらない。生きてゐるか、完全であるかに由つてそれは定まる。

食後三十分にして、己が喰ひたるものの何であつたかを忘るるは健康者の徵である。絶えず食物の種類に注目するの必要あるは不健康者のことである。

したる犠牲的な捧げ物であつた。いなそればかりでは無い。この大衆がかくも飢えるまでに至つたのは、彼等がイエスの唇より洩るる愛の語に聽き惚れて、家路に就くことを忘れてゐたからである。

そして、愛の零圍氣の中に於ては、凡てが滿腹し、その餘り屑が十二の籠に滿ちたといふのである。これは奇蹟であつて奇蹟でない。神の宇宙にあつては、愛の行はるるところ必ずそこに滿たされたる生活があるのである。

財界動搖に起因する銀行の大取付に於て、日本國民は痛切にこの教訓を得び得た筈である。

預金者が己れ一人安全ならんとして銀行に殺到すれば、健全なる銀行とても遂に倒壞しなくてはならぬ。しかも銀行の倒壞そのものは愈々預金者の生活を脅威するのである。

故に安全ならんことを欲するものは愛を持たなくてはならぬ。己れの利のみを求めず、他との協同利益を顧慮しなくてはならぬ。そして、財界に於てこの種の愛を保持

されたい）イエスは、よし嗣業を分配するとも、その分配を求むる動機が『自己中心』のものである限り、嗣業の有する目的は達せられず、眞實なる安定は得られないものであることを指摘し給ふたのである。『愼みて凡ての慳貪をふせげ、人の生命は所有の豐なるには因らぬなり』（ルカ傳第十二章十六節）と彼は教へ給ふたのである。

自己中心的な『石をパンとすること』を彼が拒み給ふたのも之と同じい理由に基づくのである。

4、愛の働くところに國民の滿足はある

されば、イエスの奇蹟が如何ばかり偉大なる力を以て爲されたとしても、若し、五千の大衆が、自ら蓄へ得らるるだけは蓄へ込むといつた利己的行動に出でたならば、如何にしても食物の不足を免るることができなかつたであらう。

しかし、其處には愛の雰圍氣が充溢れてゐた。彼等に食を與へんとの發議そのものがイエスの愛から出でたのであり、その發議に實現の可能性を與へたものが小童のな

（二）　それは飢えたる大衆を憐み、之を養ひ給ふことであつた。

このことは我等に重大なる教訓を與へる。

神の世に於ては愛が最上の力である。愛に從ひて世には生命があり、愛に反逆して生命はその源を遮斷される。生活不安の如きも、その根抵を尋ぬれば、其處に愛への反逆を見出すのである。

イエスに由つて生活上の安定を與へられやうと志した一人は、

『師よ、わが兄弟に命じて、嗣業を我に分たしめ給へ』といつた。

それに對してイエスは、

『人よ、誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ』と答へて之を拒み給ふた。

しかし、このことは、ある人々が主張するやうに、イエスが生活問題に對して無干渉主義を取られたことを意味するのでは決して無い。それに續けて與へ給ふた教訓に由つても分るやうに（この點に關しては拙著『イエスのパラブル』八二頁以下を參照

しかも後年その活動の最中に於ては、五つのパンと二つの小魚を以て五千人の大衆を養ふといふが如き奇蹟を、自ら進んで敢行し給ふた。

イエスは矛盾の人であつたであらうか、但しは最初に於けるイエスの主義は實際活動の經驗に由つて訂正されたのであらうか？

その何れでも無い。

3、己れの爲にのみ計つて生活は安定せぬ

荒野に於て自ら飢え給ひし時、絶大の力を示して石をパンに變ふることは

（一）自らの飢を癒すこと、

（二）自らの力を誇示すること、

の何れかを出でない。

之に反して、五千人を養ひ給ふに際しては、

（一）小童が自ら持てる食物の全部を提供した（ヨハネ傳六章一―十四節を看よ）

も顧みぬ」片意地なる裁判人なりと知りつゝも、猶且之に嘆願せざるを得ない憐れな寡婦がある（ルカ傳十八ノ一―八）。

若くして父を失ひ、己が勤勞を以て母と弟達とを養ひ給ひしイエスに取つて、人生は決して柔かな花床ではあり得なかつたのである。

しかも、彼の唇からは、今日我等が所謂『煽動者（アヂテーターズ）』の口より聞くが如き、激越なる富者攻撃もなく、火と劍とを以てする改革の勸告もない。

彼は生活不安の原因が、極めて深刻なるものであり、單なる社會革命を以てしては之を除却し得ざるものであることを熟知し居給ふたのである。

その公生涯の始めに於て、彼に與へられた問題は、

『汝若し神の子ならば、命じてこの石をパンとせよ』

といふのであつた。しかし、彼はさうしたことに己が力を用ふることを拒み給ふた。そして『人はパンのみにて生くるものにあらず、只神の口より出づる言による』と舊約聖書の言を引照し給ふた。

(二) 己が望むところのものを獲られざることである。

イエスはそのことを知つてゐ給ふた。

そして、それに對する解決の策を說き給ふたのである。

2、生活問題に直面されたイエス

イエスがその若き日を送り給ひしは貧しき田舍人の間に於てであつた。彼は人生が如何に苦しきものであるかを自ら經驗し給ふたのである。彼が說き給ひしパラブル(譬へ話)は彼自らの人生經驗を反映してゐるのであるが、その中には痛々しい人生々活の樣が描かれてゐる。

遠き旅路を漸く終へて夜中に訪ね來つた友のために、俄かに供ふべき食物の備へ無き儘に、その無情を知り盡してゐる隣人を叩き起して、無理にも食物の分與を請はねばならない、貧しい人がある(ルカ傳十一ノ五—八)

惡しき人の詐欺にかかつて、その尠き財產を搾取されたために、「神を畏れず、人を

から思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。（マタイ傳六章二十五―三十四節）

一、煩悶程人の精力を消耗させるものは無い

我等は、勤勞によつては左程迄に疲れないが、心配によつて我等の身心を困憊せしむる程度は我等の想像以上のものであると心理學者達は教へて呉れる。

まことに我等は働くべく造られてゐるのであり、働くことに由つて愈々益々その機能を發達せしめ得るのであるが、取越苦勞は我等の精力を消耗せしめ我等の機能を頽廢せしめるのであつて、それは恰も器械を空廻りせしむれば、その器械が消耗し破損するのと同一轍である。

故に、人生をして最も意義あるものたらしむるため、又最も能率高きものたらしめんがために必要なのは、「思ひ煩ひ」を除却することであらねばならぬ。

人の世の思ひ煩ひは凡そ二つの原因から起る。

（一）生活上の不安である。

一七、愛は撰る

この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり體は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙かに優る者ならずや。汝等の中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。又なにゆゑ衣の事を思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。さらば何を食ひ何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は、汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづ

たる人の勞力である。決して「金」そのものではない。

「金」を蓄積し、それにのみ依據することは、物々交換時代への後退である。

されば、最も心を潜むべきは、金錢の後にある人に注目することである。

人の愛を得よ、人の好意を得よ。人との良き關係を蓄積せよ。

それは靈の世界（天）に蓄財することであり、それは凡ゆる蓄財に、目を與へる事である。金錢に、眞實なる價値を與へる事である。

イエスはかく教へられたのである。

暗の中にあるものはその目さへも失つてしまふ。

もぐらもちに目がないのもそのためであり、深海の窟に住む魚に目がないのもそのためである。

我等が、イエスの光に照らされてある時、我等の魂の目は明らかである。しかし、その光を離れるならば、遂には目そのものさへも失つてしまふ。

の何れに於ても美しく且滿足なる生活であらしむることがそれである。

中に就て、將來に於ける保證といふ目的が、金錢蓄積に於ける最も強い動機であるらしい。

しかし、若し、人の將來が金錢に由つて、そして金錢のみに由つて保證されるといふならば、それは宇宙造化の最高發現たる「人」が、物質なる「金」に由つてその禍福を左右される事である。主客顚倒の甚だしいものである。

イエスはさう主張された。

金錢が世にあるのは、人がその心靈に於て發達したからである。發達が未だ充分でない時代に於ては、人と人との間に於ける物資の交換は、物々交換に由る外は無かつた。

ただ、人と人との間に於ける信用が增進するに伴れて、金錢を以て代表されたる人の努力が、物資の代物として公認されるやうになつたのである。

故に、我等に生活の安定を與へ、將來の生活を保證するものは、金錢を以て示され

故に兩者を同時に取り得ない時、我等は小兒を保ちて家の整理を捨てなくてはならぬ。

人は物よりも遙かに大切であるからである。

イエスは、人が神に對し、他人に對し、又己れに對して有すべき正しき關係を教へ給ふた。神といひ、他人といひ、己れといひ、悉く『有心者』である。そして今、彼は人と物との關係に就て說かんとし給ふのである。

物の中に於て、人の心と最も密接なる關係にあるものは「金」である。

金錢ほど、一般的にいつて、人々が希求するものは稀であるからである。

金錢が、宗教及び道德上の問題と化して來るのは、それが獲られる時よりも、寧ろそれが蓄積される時である。金錢が惡い結果を持ち來すのは、人がその蓄積に對して異常の興味を起すからである。

人が金錢を求めるのは凡そ三つの目的からである。

第一は現在に於ける生活の維持、第二に將來に於ける生活の保證、そして第三にそ

一六、人か物か

なんぢら己がために財寶を地に積むな、こゝは蟲と錆とが損ひ、盜人うがちて盜むなり。なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と錆とが損はず盜人うがちて盜まぬなり。なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。然れどなんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の內の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや、人は二人の主に兼事ふること能はず、或はこれを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふること能はず。（マタイ傳第六章十九―二十四節）

家を常に清潔に取り片付けて置くといふことは大切なことであり、又善きことである。

しかし、家の小兒をして自由に嬉戲せしむることは更に大切である。

人々がパリサイ人に對して拂つた尊敬は敬遠であつたのである。

之に反して、イエスは小兒も猶之に馴るゝ社交的なる紳士であつた。

人々が競つて彼を宴席に招いた程に、彼は評判好き伴侶であつた。

彼に取つて宗教とは「愛想」そのものであつたのである。

然も、彼が、さうした生涯に入り給ふ始めに於ては、荒野に於ける四十日四十夜の斷食があつた。彼の生涯を通じて、孤り人々を離れて祈り給ふ事が多かつた。

彼はパリサイ人の攻撃に對してこそ「喜びの福音」を強調して彼等を默せしめ給ふたのであるけれども、彼自ら、深く節制の秘義を知つてゐ給ふたのであつた。そして節制の秘義を知り給ひしが故に祈り給ふに當つては、「獨り」祈り給ふたのである。

そして、祈りより立ちて人々に接し給ふに當つては、まことに「頭に油を塗り顏を洗ひ給ふた」のである。

そして、彼に從はんとする人々に對して「汝もかくせよ」と教へ給ふのである。

宗教の目的は、人をして生命に溢れしむる事にある。その人の生活をして靈活の力に滿ちたるものたらしむるにある。之を與へ得るものは眞宗教であり、これを與へ得ざるものは、よし如何ばかり、その教義が美しくあればとて、その歴史が如何に尊いものであればとて、又、その組織が如何に整つたものであればとて、それは眞實の宗教ではあり得ないのである。

宗教を信ずるものは、之に接するものをして快感を經驗せしむるものでなくてはならない。人々が、彼と伴にある事を喜び求めるものでなくてはならない。

然し、パリサイ人は人に懼れられたのである。人々は彼等が嚴正なる君子である事を知つてゐた。又彼等が心より正直なものである事を知つてゐた。そして彼等を尊敬した。

然し、人々は彼等に近づく事を好まなかつたのである。彼等と列席するは極めてギコチない感じを與へるものであり、彼等の一人が入り來る時は、嬉々たる宴席も、直ちに白け亘るを常としたのであつた。

ぬ。

パリサイ人は、その節制の手段に於て、いさゝかも缺くるところ無き、嚴格なる宗教者であつたが、しかし、彼等が獲つゝあつたものは、その節制が與へる「報ひ」に過ぎず、そのためにその斷食が「隱れたるに見給ふ父の報ひ給ふ」ものとなり得なかつたのである。

化粧の中に於て、最も勝れたるものは「隱し化粧で」ある。人々の氣付かぬ化粧である。

宗教的節制——斷食も又「隱し化粧」であらねばならぬ。人々の氣付かざるものであらねばならぬ。手段以上、方法以上のものであらねばならぬ。「隱れたるに在す父(神)」にのみあらはれるものであらねばならぬ。

イエスはかく教へ給ふたのである。

6、宗教の目的は豐かな生命を與へることである

るが、イエスは、それに答へて、

「新婦の友、新郎と共にある時斷食するを得んや」

といはれた。イエスに在りては、神を信ずる事は喜悦そのものであつて、斷食は既にその必要時代を超越してゐる事を宣言し給ふたのである。

5、規則が無くなるにつれて規則以上のものを要してくる

街路を通る自動車の數が愈々增加するに連れて、街路を取締るべき交通規則は愈々その數を多くし、又その施行に當つても、それが益々嚴酷である事を必要とする。然かし、さうした規則が煩雜になればなるほど、規則以上の常識と、規則以上の公德心とが必要となる。

それと同じやうに、宗教的精進の心愈盛んなるに連れて、その目的を達するに必要なるべき節制手段の數は愈々增加すべきであるが、然し、さうした手段が增加するに伴れて、節制以上の靈力、神より與へられる喜び、そしてその横溢がなくてはなら

も指環耳飾りはその儘に殘り、その意義が全く變つて、單なる裝飾品となり了つたのである。

或は又、男子洋服の袖口には必ず二個のボタンがついてゐる、それは現代の人にとつて、單なる裝飾、然も餘り必要とも思へぬ裝飾としてのみ見られる外はないのであるが、然も往昔に於ては、戰時に用ふる手甲を止めるものとして、必要缺くべからざるボタンであつたのである。

既に裝飾と化し去つたものは、之を裝飾として取扱ふを最も賢なりとする。

斷食などの節制方法は、靈的進歩が未だ充分でない時に極めて必要な宗教上の勤行である。然し靈性の發達充分なるものに取つては、さうしたものは必要でないのであり、さうしたものゝ必要が强調されねばならぬのは、その人の靈性が未だ充分なる發達を遂げてゐないが爲めであるとも曰ひ得るのである。

故にイエスは、規則としての斷食を行ひ給はなかつた。そして、それが爲めに、宗教家にあるまじき事であるとして、パリサイ人等の猛烈なる攻撃を受け給ふたのであ

洗面や化粧の目的は、我々の出會ふ人々に惡感を起させない事にある。宗教的節制――斷食の目的も、我等をして、人々によき感化を與へしむるための豫備的手段たる事にある。

「悲しき面容」をする事は斷食の目的を根本より破壞する。

イエスはかく敎へ給ふたのである。

4、必要を過ぎてもなほ用ひらるるものもある

その始めに於ては必要であつたものが、その儘襲用される事に由つて、その必要が失せ、其意義が全く去つた場合に於ても、猶その存在を保つてゐる事がある。

例へば指環、耳飾り等もその一例である。

指環とか、耳飾りとかいつたものは、原始時代に於ては、魔除けのために使はれたものであつて、眞實の實用品であつたのである。然し、現代に於ては誰もそれが魔除けになると信ずるものは無く、又魔除けの必要があると信ずるものも無いのであるが、然

然し、不合理ではないが、之は止むを得ざる必要である。向上發達の道を進むに連れて、遂にはその必要なきに至る事を目的とすべきものである。消極的な必要であつて、それを增加するに由つて、愈々その價値を發揮するといつた様な、積極的な必要物ではない。

それは例へば、我等が毎朝洗面化粧を必要とするのと同様の必要である。それ自身惡い事ではないが、然し人前にて揚々として之を實行すべき必要物ではない。

故に斷食であつても、その他の節制であつても、之は縞かに行はるべきものである。人に氣付かぬ境地に於て、人に氣付かぬ方法で行はるべきものである。

然るにパリサイ人は——そして後代に於てもパリサイの亞流に屬する人々は皆同であるが——斷食が、宗教上のよき事であるとの理由を以て、それを人々の前に廣告した。

それは人々の面前で洗面し、又は化粧するの類であつて、洗面や化粧の意義が分らない人のやうに、節制の眞目的が分つてゐない事を示す。

さりながら、果樹の場合に於て見られた眞理は、其處にも應用する事が出來るのであつて、人に節制の必要が與へられてあるのは、神が人間を單なる器械人形としまいとの深い思召しあつての事と思はれるのである。

もし、我等は我等の内に與へられた慾望に從つて行動し、それ以上何の心づかひも要らない事となれば、我等の生長に對して、我等は何等努力すべき餘地を有しない事となる。さすれば我等は一種の器械と化してしまふのではないか。

これに反して、我等の生長に、我等の心づかひと努力とが必要である事は、神が我等の生長に對して我等の協力するを赦し給ふ事だと考へられる。

それと共に、かやうな協力を行ふ事によつて我等は我等自身の内にある靈的才能を愈々發達向進せしめ得るのだといふ事が出來る。

3、節制はやむを得ざる必要である

されば人に節制の必要なるは不合理な事でない。

それぱかりでは無い。果樹が人の助けなくして全き成長を爲し得ないのは、神がその造りしものゝ成長に對して、人の協力を求め給ふのだといひ得るのである。そして人の手の業の中に特更なる價値を見出し給ふと共に、人にさうした業を與へる事によつて、人が有する才能にも進歩發展の機會を與へ給ふのだとも考へられる。人は果樹の世話をする事に由つて、より良き果樹を造り出す才能を與へられるからである。

2、人の生長にも神と人との共同がいる

人に節制が必要であるのは、果樹に剪除が必要であるのと同じい。人の慾望はこれをその發露のまゝに任せては良い人を育て上げる事が出來ぬ。これに節制を與へて矯正する事が必要である。

然し、何故、神は人に矯正を要する樣な、餘計な慾望を與へ給ふたのであらうか。我々の生長發達に必要な慾望は充分に與へられ、必要で無い慾望は全く與へられないとしたら、我々は如何ばかり自由であり又幸福であらうかと思はれる。

いへば、神の智慧に缺陷があるのではあるまいか、とさへも思はれる。

しかし、よく考へて見ると、そこには神の優れた智慧が藏されあるを悟られる。神の造りしものは、その一つ一つを離して價値があるのではない。その凡てが綜合統一されて全體の意味があり、その全體に連なる事に由つて個々のもの、意味があり、又その價値がある。宇宙はギリシヤ語にてコスモスといふ。コスモスとは「整ひたるもの」との意味である。されば宇宙にあるものは、何れも相關的な位置に置かれてあるといへる。

果樹は果樹だけのために存在せぬ。果樹は人のために存在する。そして人は果樹のために存在する。果樹ありて人は食物を得、人あるが爲に果樹はその生長を全くし得る。されば果樹に剪除が必要であるのは、果樹と人との間に協力の關係を生ぜしめんがためであるといへる。自ら手塩にかけしものは、然らざるものに勝つて愛着を感せしめるものであることより考へれば、果樹に剪除の必要なる事が、人が果樹に對して有する愛を愈々增進せしめる事だともいへる。

一五。隠し化粧

なんぢら斷食するとき、僞善者のごとく、悲しき面容をなすな。彼らは、斷食することを人に顯さんとて、その顏色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顏をあらへ。これ斷食することの人に顯れずして、隱れたるに在す汝の父にあらはれん爲なり。さらば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん（マタイ傳六章十六―十八節）

一、木の生長にも人の力が必要である

果樹をその茂るがまゝに任せては、よい花も咲かず、よい果も實らない。よい果を得るためには、絶えず手入れして不必要な枝葉を剪り除ける必要がある。

これは一寸考へると、如何にも不合理な事の樣に見える。神は何故そんな不必要な枝や葉を生ひ茂らせ給ふのであらうか、それは無駄な精力の消費である、ある點から

知るが故に、之を守護するに極度の努力を拂ふものである。されば彼は、神の賜の彼を守るに充分なるべきを知りつゝも、

「我等を嘗試に遇はせず、惡（又は惡しき者）より救ひ出し給へ」

と祈るのである。

されば、眞實なる祈りは、他に對する寛容をその内容としなくてはならぬ。それは神自らが有し給ふ性質を、人の心に反映する事である。神自らが有し給ふ調子に我等自らを合調せしめることである。

インドの一キリスト教徒はアトーンメント（救はるゝ事）とはアチユーンメント（調子を合はせる事）だといつた。誠に、祈りとは神との交通であるが故に、神と同じき調子なくしては之を行ひ得ざるものである。

8、クリスチヤンは己が誇の防壁につとめる

神に合へる調子は極めてデリケートなものであるが故に、之を保護するに當つて細心の注意を要する。

從つて、イエスに從ふ人々は、自ら求めて誘惑に近づき、それに由つて自らの強きを證明し、以て他に誇らんとするが如き輕擧を愼しむのである。

彼は、彼に與へられたる特權、彼の父との親しき交はりの、餘りにも尊きものなるを

しかし與へられたるものは、それに對する感謝にふさはしい方法を以て使用されなくてはならぬ。

さればイエスも、自らを「受くる者」と等しくし、受くるもの丶貴さを教へ給ふたのである（マタイ傳二十五章三十一節以下を見られよ）

しかも、この日用の糧は、我の糧ではなくして我等の糧である。イエスに從ふものは、凡ての人の糧のために努力し、凡ての人の幸福に關心する眞實の宗教者でなくてはならぬ。

從つて、それは權利の主張ではなくして、愛の行使である。人の我等に對して有する負債を免す事である。

凡ては神の賜である。我等は凡ての事に於て凡てのものを借りつ丶あるものである。我等相互の間に於ける貸借關係（物に屬するものであつても、心に屬するものであつても）はこれを神の原簿にまで持ち行く時、悉く神が我等に對して有し給ふ債權となつてゐるのである。

靈の世界の表現として存在する。物質の世界は靈の表現としてのみその價値がある。それが正しい宗教觀への第一歩である。

されば靈の世界（天）におけるごとく、物質の世界（地）に於ても、靈の源なる神、絶對の價値に在す神の聖旨が行はれること、それが眞實なる宗教者の祈りであらねばならない。

それと共に、

「我等の日用の糧を今日も與へ給へ」と祈る事は、決して物質的な低級宗教ではない。

若し「受ける」といふ事が必然的に賤しい事であるならば「與へる」といふ事も良い事であり得ない筈である。何故ならば、與へる人はその與へることに由つて、その對手を賤しくする事となるからである。

「受ける」といふ事は極めて靈的な意義を有するものである事を我等は忘れてはならない。自分の力で儲けたものは之を己が思ふ儘に使用して差支へ無いかも知れない。

へ奉る方面より考ふる時神は王であり給ふ。

それ許りではない。イエスの示し給ひし神は、その民よりの忠誠を受け、自ら頌へ崇められゝことを以て滿足し給ふ神では無くして、絶えず活動し、絶えず建設しつゝあり給ふ神である。惡に對して絶えず戰ひつゝあり給ふ神である。されば神は組織的なるものを有し給はなくてはならぬ。彼が王であり給ひ、彼が王國を有し給ふはそのためである。

されば「御國の來らんこと」をと祈る祈りは、人類をしてその理想に達せしめ給へとの祈りである。

7、イエスの宗教は物質の重要性を否定しない

正しい宗教觀が、唯物主義であり得ないことは論ずるまでも無い、しかしそれと共に、眞宗教は物質否定主義でもあつてはならない。

眼に見ゆる物質界の背後には、眼に見えない靈の實在界がある。いな物質の世界は

街上に行き交ふ人々は、之は通行人であつて、一般的で且概念的なものである。しかし、その中に於てある一個の人を捉へ、その名を呼びかける時、乃ちその人に名を附する時、その時その人は既に通行人といつた一般的な關係から離れて、有心的な個人的な關係に入るのである。

イエスの神は、我等一人々々と直接なる利害關係を有し給ふ神である。そしてそのことは、イエス自らが神であり、そして人であり給ふことに由つて全くされたのである。「御名の崇められゝ事」は誠の宗教生活に取つては缺くべからざる重要事なのである。

6、神の父性と王權とは同じものである

神は父であり給ふ、しかも萬民の父であり給ふ。父の勢力とその感化とが小さく組織されたるものが家族であり、それが廣大なる範圍に於て組織されたるものが王國である。我等がその賜を受くる方面より考ふる時、神は我等の父であり、我等が彼に仕

しかも、その尊い神は「父」である。父とは單に子を生み出したる親種といふ意味ではない。家族を有し、家族の主宰であり、家族の間に於ける愛に專念するものをいふ。そして、その父は又、我の父ではなくして我等の父である。まことの宗教とは、神と個人との關係といつた神秘主義ではない。必ず同胞愛を基調とし、社交性を强調するものであらねばならぬ。人が神を父と爲し得る特權は、それを我等の父とし、我のものとしないことを條件とするのである。イエスはかく教へ給ふた。

5、イエスの神は我等に有心的關係を持つ神

イエスの示し給ふた神は、單なる原理とか、法則とか、乃至絶對的實在とか、眞善美とかいつた抽象的な、そして概念的な神ではない。それは有心的なものであり、直接に我等の心と干渉する神である。卽ち「名」を有し給ふ神である。

「名」とは一般的なもの、概念的なものゝ中から「パーソナル(有心的、個人的)」なものを抽出するに用ひらるるものである。

己れとの孤獨なる對座といふ、麓の道に歸らねばならぬ。そして正しい登山路に進まねばならぬ。

正しい登山路、正しい祈とは、イエスが「かく祈れ」と仰せられ、「天にいます我らの父よ」なる句を以て始まり、一般に「主の祈」といはるゝところのものである。

4、宗教の社會性と同胞性

神といふ言葉をその儘に使ふことはユダヤ人の忌むところであつた。乃ちそれは極めて尊いものであるが故に、日本語に行はるる「いみな」と等しく他の言葉を以て代へるを常としてゐた。その他の名が卽ち「天」である。故に「天」とは神のいますところ、そして、神の代名詞であつたのである。

我等の正しい宗教は、神に對する正しい敬虔の念から始まらねばならぬ。正しい祈りが「天にいます」の語を以て始まる所以である。

されば祈るところは己が部屋と限るのではない。己が心の奥底に於て祈ることが大切なのである。

3、眞の道へ出るためにたどる返り道

山へ登るものが路を踏み違へて荊棘の道に入りたりとせよ。彼が爲すべきことは塞がれたる道を遮二無二突き進む事ではなくして、もと來し麓へ引き返す事である。引き返す姿は、之を客觀的に見るときは、山へ登ることの反對である。しかしそれを主觀的に見るときは、やはり山へ登ることである。

祈りは公の席でなさるゝ場合があり、それは有益の事である。

神は全地の王に在しまして、之を讃美し、そして絶えず祈りを行ふ事は極めて大切である。

しかし、異邦人やパリサイ人は、さうした祈の途に進みながら（卽ち登山を試みながら）誤れる途に踏み込んだのである。故に彼等は引き返さねばならぬ。父なる神と

彼等の對手は神ではなくして人々である。從つて彼等の爲すところは、その形式は祈りであつても、その本質は全く外のものである。

イエスはそのことを指摘されたのであつた。

故のヴイクトリア女王は、その宰相たるグラツドストーンが女王に對して奏上する事を好まれなかつた。何故ならば、グラツドストーンは女王に對して個人的な親しみある言辭を用ひず、恰も女王が演說會の聽集でもあるかのやうに、切口上（きりかうじやう）で奏上するを常としたからである。

神は父である。父はその子が切口上を以て語るを好むものではない。故に人の儀表たり得るといつた低い「報ひ」に滿足せず、神との親密に入るといふ高い「報ひ」を求めるものは、會堂又は街頭を避けて、己が部屋に入るべきものである。

イエスはかく教へ給ふた。

己が部屋といふは、會堂及び大路の反對をいはれたのであつて、他人を對象とせず、神と己との對座を求めよとの意である。

「反復語」を爲し「言多きに由つて聽かれん」と努めたゆえんである。

然し、イエスに在つては、神は父である。サルタンではない。子が父に向つてあまりにも執拗にその求めを繰り返す時は、その子とその父との間に於ける親愛の關係に何等かの龜裂が入り來つた事を示す。祈りとは神と人との交通である。神は求めざる前に、その必要なるを知り給ふとの確信あり、さうした深い宗教經驗を有するものに取つては、異邦人的なる神觀とその發露とは、虛僞のものと映せざるを得ない。それがイエスの主張であつたのである。

2、パリサイ人の祈禱は人を相手としてゐた

イエスの弟子達はパリサイ宗より出で來つた人々であつた。パリサイ宗の人々は異邦人とは勿論異つた行き方をしてはゐたが、しかし自らの信仰を誇り、自ら人の儀表たるを以て任じてゐた彼等は、その祈りを爲すに當つては、常にその祈りを聽く人々に對して教訓を與へる事を主眼としてゐた。從つて彼等が祈りの事を行ふに當つても

王に請願を奉るのには、その晴雨を判定する事が極めて大切であるが、それが爲めには王の側近者に賴ることが最も賢明な方法である。王に直接訴へることは成否のほどが確かでないが、側近者を代理としてそのことを爲せば、彼等側近者共は、王の機嫌よき時機を見計らひ、專門家の有する特殊の技能によつて、請願の到達を計つてくれる。

神がサルタンであるとすれば、直接神に對して祈りを捧げることは、ある場合危險である。寧ろ神の側近に常侍する專門家を通してその事を爲すを賢なりとする。從つて祭司といつた特殊の階級が生れ、神との交涉一切に任ずることゝなる。

（三）　サルタンに對する請願は、單に一度之を捧げただけを以てはその目的を達し得ない。いはゆる「請願運動」を繼續し、ある意味に於て王がその煩に堪えずして之を免許するまでに至らしめねばならぬ。

神がサルタンであるならば、同じくこの種の「運動」を爲す必要がある、ガリラヤ地方に散見された異邦人の宗教が、種々なる「題目」又は「稱名」「念佛」の類を以て

（一）サルタンの賞罰は、サルタンの御機嫌如何に由るのであつて、その事柄が有する本質的な善惡に由るのでない。國のために偉功を樹てた將軍が、少しく王の忌彈に觸れたといふ理由の下に斬罪に處せられることがある一方、一個の名もなき舞妓が、その妙技を以て王を喜ばすことあれば、それがためには全領の半ばをも與へられる。故に王より善きものを獲やうとするには、偉大なる功績を擧げるといふことよりも、寧ろ王の御機嫌をとることが重要である。そして王をして最も御機嫌斜めならざらしむるものは、王の懿德とその功業を讃美することである。「王樣萬歲」を叫びつづけることである。

祈りとは、神に對する義務であり、又、神より賜を得べき方法である。もし神がサルタンと同種のものであるとすれば、祈りといふことも、神の御機嫌を斜めならざらしむる手段たることにその中心を置かねばならぬ。卽ち、絶えず頌德表を奉つらねばならぬ。かくて彼等の祈りは神を讃美する語の繰り返しとなる。

（二）サルタンの御機嫌はその日の天候と同一であつて、晴雨極めて不定である。

我らを嘗試に遇せず惡より救ひ出したまへ。（マタイ傳六章五―十三節）

一、異邦人の神はサルタンであつた

イエス及びイエスの弟子達の多數が、その出身地としてゐたガリラヤは、異邦人のガリラヤといはれてゐる程であつて、往昔から、外國文化と接觸することの多い地方であつた。

イエスの時代に於ても、ギリシヤ人及び他の東洋諸國民、ペルシヤ人とかアラビア人とかいつた類の人々がこの地方に住居し、彼等特有の宗教的勤行を行つてゐたのであつて、さうした人々の思想習慣は、イエス及びイエスの弟子達にはよく知られてゐることであつた。

さうした異邦人達が、その信ずる神に對する態度は、これを一言にしていへば、舊トルコの人民がそのサルタン（專制王）に對すると極めて相似たるものであり、從つて、その宗教的勤行乃ち祈りも、さうした神觀に準據したものであつた。

一四、祈りの範

なんぢら祈るとき、僞善者の如くあらざれ。彼らは人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ。かれらは既にその報を得たり。なんぢは祈るとき己が部屋にいり、戸を閉ぢて、隱れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隱れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。また祈るとき、異邦人のごとく徒に言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり、さらば彼らに倣ふな。汝らの父は求めぬ前になんぢらの必要なる物を知り給ふ。この故に汝らは斯く祈れ。

天にいます我らの父よ。
願くは、御名の崇められん事を。
御國の來らんことを。
御意の天のごとく地にも行はれん事を。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。

自らも氣付かず人も氣付かざるものとなる。そして神の「與ふること」も又、人類が何の注意をも拂はないほどに「隱れたる事」であるのである。

意味である。それ以上最早要求する權利を失つたといふ意味である。

しかし、イエスに從へば、慈善に由つて得らるべき報酬は、そんな小さなものであつてはならない。

慈善をなすは『天の父の全きが如く全くなる』が爲の豫行的行爲である。神の本性なる愛が、まことに我等の本性とならんが爲めに、我等の內に潜む愛の性質に、自由の發露を與へる事が慈善である。

イエスの示し給へる神は、「赦し給ふ神」である。人の罪を忘れ給ふ神である。罪を赦し、罪を忘れる事は、絶えざる「與へる事」に由つて得られる。まことの宗教とは、「與ふる神」の賜を受くる信仰である。人は神に何ものをも與へる事は出來ない。人は人に與へ得るだけである。

しかも、人に與へる事によつて、人は神と同じき性質の動作をするのである。そして、神が自らの本性の必然より、與ふることを爲し給ふやうに、人はその本性に從つて慈善を行はねばならぬ。本性に從つて行はるゝとき、それは隱れたるものとなる。

『右の手のなす事を左の手に知らすな』といはれたのである。知らすといふは、それが何か特別であつた場合の事である。故に新聞は通常有り得ない事の報道を以て滿たされる。

我等の慈善は「當り前のこと」であらねばならぬ。從つて、知らせる必要の無いものであらねばならぬ。

イエスはかく說かれたのである。

5、報ひは最大至高のものを求めねはならぬ

報ひを求める心は、それ自身、決して惡いものではない。たゞ求めるならば最上のものを求めなくてはならない。神が與へんとし給ふ賜は、これを悉く受けねばならぬ。これを拒む事は罪である。

パリサイ人は、慈善の行爲に由つて、人よりの名譽を得た時、『既に報ひを得た』のである。「報ひを得たり」といふ原語はアペコーであつて、全額領收濟になつたといふ

パリサイ人は慈善を行ふといふ事を、何か特別な、取り立てゝ曰はるべき事として居た。しかも、さうした事に由つて、彼等は、彼等が、人性自然の發露を缺いでゐる事を示してゐる。慈善を、何か特別のこと、人の前に名譽を受くべき事と考へ、また教へる事に由つて、彼等は、慈善がその本性から出たものでない事を示してゐる。神が求め給ふものは、慈善といふ行ひそのものではない。その行ひを來らせる眞實の心である。汚れない、ありの儘の純情である。

しかにるパリサイ人達は、その本性にない事を、強いて行つてゐる。だから彼等は僞善者である。僞善者とはヒユポクリタイといふのであつて、役者の事をいふ。卽ち自らの本性でない事を、自分に振り當てられた役割の必要上から勤め上げる者をいふのである。

されば、イエスは教へて、

3、パリサイ人の教へた宗教の要素

イエスの當時に於ける宗教家達――パリサイ人は、人生の目的は『義』を獲る事にあるのだといつた。義とは今日我等がいふ『救』の意味であつて、神の前に立つにふさはしい資格の事である。そして彼等は義を得るに必要なる務、卽ち『義務』として次の三つを擧げた。

（一）人に對するもの――慈善
（二）神に對するもの――祈禱
（三）己れに對するもの――斷食

この三つを嚴格に守るものは、救はれて義なるものとなるといふのであつた。

イエスはこの三個のものが宗教上の必要なる義務である事を肯定された。しかし、それと共にその實際上の行き方に於ては、イエスの宗教がパリサイ人のそれと全く異なるものである事を指示されたのであつた。

彼女は弱り行く眼を開いて、枕頭に群がる人々の顔を見廻した。彼女の眼は、彼女の殺戮者であり、嘗ては、彼女の夫でありしものゝ上に留つた。そして、彼女は靜かに唇を開いて云つた。

「さうです。神に誓つて曰ひます。あれは、私の過失から起つた事であります……」

人の本性は愛である。憎みではない。愛は自然である。しかし憎みを繼續せんが爲めには特別なる努力を必要とする。

絶交を覺悟して書いた怒りの手紙を一夜の間枕の下に敷いて寢よ。翌朝になつては、如何うしても、その手紙を發送する氣になれないのを見出すであらう。愛はそれ程恒常的であり、憎みはそれ程一時的である。

だから、愛の表現である慈善といふ事も、實は人性本來の發現であつて、慈善の行はれないといふ事が却て異例に屬するのである。

イエスはさう教へ給ふた。

妻が直ちに生不動となり、半死の狀態になつたのは言ふまでも無い。

驚いた彼は、事の重大さを知ると共に、己れも又自殺しやうとして剃刀を以て咽喉を切つた。

死に瀕した二人は、グレンフエル氏のある病院に運ばれた。

夫なる勞働者の命は、兎も角も取り留める事ができた。しかし、妻はもう絶望である。

彼女の枕頭には醫師と、牧師と、弱り切つたその夫と、そして町の警察官とがある。

警察官は彼女の耳に口を寄せていふ。

『あなたは、數分の後に、造り主なるあなたの神の御前に出でなくてはならない。だから、どうしても眞實の事をいはねばならぬ。あなたが負傷したのは過失だつたのですか、それともこの男の爲めですか』

彼は手帳を取り出して返事如何にと片唾を飲む。全室閒として聲無く、恐ろしいまでの靜かさである。

あの、親しむべき、そして愛すべきアメリカの友人達に血を流させて、アメリカの製艦業者や、製砲業者に、甘い汁を吸はせる事だと考へると、どうしても眞面目に日米開戰説などを考へる事はできない。

2、グレンフエル氏が實見した一例

さうした人種的偏見を解脫した愛の使者に、グレンフエル博士といふ醫家がある。彼は、年中氷に鎖されてゐる北極ラブラドルの海岸に、憐れなるエスキモーの間に活動し、彼等に最新式の醫療を與へてゐる。

彼を、さうした事業に獻身せしめた動機は種々あるが、その一に次のやうな挿話がある。

彼が未だ一醫學生として、ある病院に勤務してゐた時の事である。

ある勞働者は、夕方泥酔の儘その家に歸つたが、歸ると共に、その妻の迎へ方が氣に喰はぬとて、あり合ふ石油ランプを取て彼女に投げつけた。

るが、しかし白人の小兒と黑人の小兒とを共にして置けば、彼等はその人種別を忘れて——いな始めから人種別などを全く意識しないで無心に遊び戲れる。たゞ各國で行ふ、いはゆる國民教育といつたものが、その國民の心に、人種的な、あるひは國民的な偏見を植えつけたのである。

だから、日本人を怖るべき民、警戒すべき人種であると確信してゐるのは、アメリカの人々の中にあつて、あまり日本の實情を知らず、日本人を見たことも無い種類のものに多い。

また、日本人の中でも、アメリカ人は何處までも不俱戴天の仇だと思ひ込んでゐるのは、アメリカも知らず、アメリカ人と交はつたことも無い、例へば地方の青年團員、または、ジンゴー的な愛國思想を吹き込まれてばかりゐる在鄉軍人會の人々といつた筋に多い。アメリカにゐる私の友人達は、日米戰爭といふことは、彼等と私とが劍を以て殺し合ふ事になるのだといふ事を考へて、それが餘りに突拍子であり、滑稽である事に思ひ到つて、皆心から戰爭說を笑殺してゐる。私としても、日米戰爭といふ事は

一三、愛は秘す

汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。さらば施濟をなすとき、僞善者が人に崇められんとて、會堂や街にて爲す如く己が前にラッパを鳴らすな、誠に汝らに告ぐ、彼等は既にその報を得たり、汝らは施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隱れん爲なり。然らば隱れたるに見たまふ汝の父は報ひ給はん。（マタイ傳六章一——四節）

（マタイ傳六章一一四）

一、人はその本性として愛の心を持つ

人はその本性の儘である時、まことに愛すべきものであり、又相愛するものである。たゞ、人がその相手に附屬するもの、地位とか、人種とか、事業關係とかに着目するとき、始めて、憎むとか、怨むとか、嫉むとかいつた感情を起す。

白人と有色人との間に存する隔離の感情は、殆んど癒し難いまでのものとされてゐ

て世に現はれ、世を征服しつゝあるのである。

であるのであらうか。さうした立場から種々なる議論が順次に取り扱はれ、遂に『義』が行はれんが爲めには、よき『國』が建てらるべき必要がありとの結論に達する。

しかし、その國家が、眞實なる理想國であらんが爲めには、これを支配するものが理想的なる哲人であらねばならぬとの論を以てこの書が終つてゐる。

イエスの立て給ひし論も（これを一の論であると見て）プラトーンのそれと略同じき出發點を有してゐる。そして、その結論も、プラトーンのそれと相似たるものがあるのである。

『義』はパーソナリテイーに由つて、始めてその眞面目を發揮する。故に神が、宇宙のパーソナリテイーが、人類社會に働きかけ給ふ時、その時始めて理想の社會が出て來るのであり、そこに敵なき人類の社會が成立するのであるとされた。文字にあらず、制度にあらざる神の支配こそ人類を救ふものであるとされた。

プラトーンの理想は、單なる理論を以て終つてゐる。

しかし、イエスの理想は、彼自らが神そのもので在し給ふが故に、實際の運動とし

イエスはかく說かれたのであつた。

5、人格を中心として始めて正義の國は生れる

『なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし』といふは、舊約聖書の中にも現はれて居る思想である。またイエスの當時に於けるユダヤ教の師父達も、相携へて爲しつゝあつた教であるとは思はれるが、しかし、この通りの言葉を載せた文獻は我等に傳はつてゐない。

しかるに、これと並行的な句はプラトーンの中に見出される。

プラトーンの『理想國』は『義』とは何ぞやの問題を論じたものである。そして、その議論の出發點は『義』とは凡ての人にその當然受くべきものを與へることにある、といふのである。

凡ての人にその當然受くべきものを與へるといふことは『その友を援助し、その敵を害ふ』といふことであらねばならぬ。然らばそれが果して、正當なる『義』の定義

『ああエルサレム、エルサレム、牝鷄のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと爲しこと幾度ぞや』（マタイ傳二十三章三十七節）そこに愛國者の熱涙はあつた。

しかし、それは暴動的獨立運動にも出でず、幻想的熱狂の運動とも化せなかつたのである。愛國的本能はここに眞實なる醇化を與へられ『國家に忠なるとともに、それが國家に限局されない』ものとなつた。

『傳道主義』がそれである。

ユダヤ人が勝れたる民であり、神に取つての貴き種族であることには論が無い。しかしそれがさうした特殊の地位を與へられたのは、ユダヤ人に由りて、他の人々も亦神の民たらんがためである。そしてその責任を盡すことに由つて、始めてユダヤ人の優秀性はその本色を發揮するのである。

仇を愛し、責むるもののために祈り、凡ての人類を神の民とすべく努めよ。それが、眞實の愛國であり、それが眞實の愛神である。

の注意を向けないやうになつた。そして、その結果として、彼等は幻想的な國民となつた。今日我等が『默示思想』と名づくるものが彼等の間に發生し來つたことがそれである。

この『默示思想』に從へば、世の終りが今や目睫の間に迫まつてゐるのであり、その時、神の力に由つて、異教の民等は悉く打ち滅ぼされ、神の民なるユダヤ人が、この新天新地に於ける支配者となるといふのであつた。

故にそれが政治的なものであるのと、宗教的なものであるとの相異があつたとはいへ、「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」といふはユダヤ人一般の信條であつたといへる。

しかし、イエスは、それに對して、第三の方面なる『醇化』の道を取り給ふたのである。

『救はユダヤ人より出づ』(ヨハネ傳四章二十二節)と喝破し給ひしイエスであつた。彼は愛國の熱情に於て何人にも讓り給はないものがあつたのである。

第一次本能（食慾とか性慾とかいふもこの種のものに屬する）は、その發露に於て三個の階段を持つ。

（一）あるが儘なる本能が、よし暴力的であつても、その儘の姿に爆出すること。

（二）それが無理なる壓迫と閉塞を受けたる場合、一種の内訌を起し、實際を飛び越えたる一の幻想を作り出すこと。

（三）それが適當なる制禦と指導とを受け、いはゆる醇化を與へられること。

イエスの當時に於けるユダヤ人は、彼等が異教の輩として蔑視してゐるローマ人の支配下にあつたことゝて、彼等の愛國心は強い壓迫と制肘とを受けてゐた。そして、その結果として、種々變態的なる爆發を爲してゐた。

（一）相次ぐ失敗にも拘らず、戰鬪的手段に由る獨立運動が起された。そしてそれは紀元九〇年に於けるローマ軍に由るエルサレム破滅の時まで、間歇的に起り來る運動であつた。

（二）しかし、一般民衆は、さうしたことに由る愛國心の發露にさへ、今はさまで

我は大なる成長を爲したのである『勝れるもの』であり『報ひを得たる』ものである。

4、醇化したる愛國心は貴い

己れの價値を重要視しないものは、他の價値をも尊重しない。從つて愛國の至情なきものには、國際正義の眞味も亦理解されない。級中に於て他と合流せざるものは、社會上の活動に於ける失敗者である如く、國家に對する忠誠を缺くものは、世界人としての貢獻を爲すことができない。

コスモポリタニズム（無國家主義）はインターナショナリズム（國際主義）であり得ないのである。

故に偉大なる國民は必ず熾烈なる愛國心の所有者であらねばならぬ。

されば世界民族中にあつても、特に偉大なる民族であつたユダヤ人には、愛國の至情切實なるものがあつた。愛國心は彼等に取つて、心理學者のいはゆる、第一次的本能（プライマリー・インスチンクト）であつたのである。

近隣となり、我が國民となり、彼のパーソナリテイーは『我』の發達とともにその範圍を擴げて行く。

彼が成長し得たのは、彼が彼自身の『我』を擴げ進んだからである。その擴張が留まる時、彼の進歩も亦その終りを告げるのである。

『我』を世界大にまで擴げよ。いな宇宙大にまで擴げよ。神を我が神とせよ。神の利害を我が利害とせよ。さらば天日の照らす限り、そこには一人の敵人をも見出し得ないであらう。

幼兒が『我』を擴げ得たのは、他よりの愛に答へたからであつた。しかし、彼が成長するとともに、それは彼自らが手を伸べ行くことであつた。彼が能動的なる愛を及ぼし行くことであつた。

されば『己れを愛するものを愛し』『兄弟にのみ挨拶する』は『我』の擴展が未だその初歩時代にあることを示す。それが神にまで到り『天の父の完きが如く、全からん』爲めには、仇を愛し、責むるものの爲めに祈ることがあらねばならぬ。その事ある時、

嚴肅なるパーソナリテイーの所有者を見るであらう。そして、それは宇宙の心、パーソナリテイーそのものに在す神の、その子であることを見るであらう。

神には敵が無いのである。神には黨派が無いのである。日本人にも雨、支那人にも雨である。政友會にも陽、民政黨にも陽である。

人の子を神の子として之に對せよ、そこには凡て『隣』のみであつて、何等の『敵』も存在せざるを見出すであらう。そして「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎む」とき、汝は凡ての人を愛することとなるであらう。

イエスはかく說かれたのであつた。

3、「我」は次第にその範圍を擴める

人のパーソナリテイーは先づ我の意識より始まる。

無心の嬰兒がその手を以て自らの足を握りたる時、彼は彼自らの我を見出す。それは我が父母となり、我が玩具となり、我が家族となり、我が友人となり、我が

外國人に對する態度に於て見られる。

西洋人だと見れば、それが何の某であらうとも、ただ西洋人であるとの理由によつて、魔術にかかつた人のやうに之を崇拜する。これはただモガとかモボとかいつた人々のみではない。外來思想を排斥すべしなどと肩肘怒らしつゝある人々に、却つてこのことが多いのである。

そして、支那人とか朝鮮人とか見れば、それが何の某であらうとも、ただ無定見に之を輕蔑する。かうしたことが如何ばかり日本の『國難』を增進せしめつゝあることであるか。

西洋人といふ皮を取つて見よ。そこに『人』がある。支那人といふ外を除いて見よ、そこに『人の子』がある。嚴然たるパーソナリテイーがある。

政友會の某を見よ、それも人である。

民政黨の某を見よ、それも人である。

人を見よ、人を見よ、その時汝は、敵の中にも我と等しき人の子、人の親、人の兄弟

し人であればさうした譯には行かない。パーソナリテイーがあるからである。

更に又、色褪せたバラに對して、色の濃いバラが働きかけ、その褪せたる色を捨すといつたやうなことはできず、又色褪せたバラが近くにあるために色の濃いバラがその影響を受けるといつたやうなことはない。しかし人間に於ては善き人と惡しき人との間には直ちに相互感化の活動が始まる。パーソナリテイーがあるからである。

2、人格無視があらゆる罪の原因

人が尊いのは人特有のものがあるからである。人の世が正しく完つたからんが爲めに大切なのは人特有のものを尊重し、これが發展を圖ることである。

既にいつたやうに、女のことに關して人が過ちを爲すのは、女を一の人格（パーソナリテイー）として見ないからである。

人の世に於ける他の過ちも、同じ原因にその根を持つ、

パーソナリテイーの觀念が、未だ日本人の間に充分な發達を見てゐない證據の一は

は日本人が充分パーソナリテイーを體得してゐないことを示す。或は人格と譯し、人柄と譯す。ある人は心格とするを適當であるといひ、又有心といふ語を以て表はしてゐる。

（一）パーソナリテイーといふは、人が他の生物と異なつたものとして持つてゐるものであり、外界の事物に制肘されずして自己獨特のものを有することをいふ。種屬としてでなく、種類としてでなく、他の何ものを以てしても換ふべからざる嚴然たる一個の存在を持するものである。天上天下唯我獨尊といふはその一面を示してゐる。

（二）しかし、それはただ一面を示してゐるだけである。パーソナリテイーは他面に於て、自ら進んで他を感化し、又他より感化を受けることをその特質としてゐる。いな、他と交通することなくしてパーソナリテイーはパーソナリテイーとしての存在を保ち得ないのである。

卑近な例を取つて説明しやう。

一つのバラはバラではあるが、他の一輪を持ち來つても、大した變りはない。しか

一二、神格、心格、人格

——愛敵の精神に就て——

「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父はその日を惡しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取稅人も然るにあらずや、兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや、然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。（マタイ傳五章四三―四八節）

一、人格の有する二つの特質

英語にてパーソナリテイーといふ語がある、日本語に譯し難い語であり、そのこと

「汝若し預言者ならば、汝を撃つものゝ誰なるかを豫言せよ」と嘲つた。

十字架の下を往來する民は異口同音に

「汝若し、神の子ならば、十字架より下りよ」と叫んだ。

個人的なる侮辱の極點である。

しかし、イエスの答へは

「父よ、彼等を赦し給へ、父よ彼等を赦し給へ」であつた。

まことに兵卒等はイエスの下衣を籤にて分つた。しかもイエスは

「父よ彼等を赦し給へ、その爲すところを知らざればなり」と祈られたのである。

イエスは、義を世に布かんが爲めに世に來り給ふた。

しかし、彼の義は、神の義であつたのである。與へることに由つて、萬民を一つにし、愛をして最後の勝利者たらしめる義であつたのである。かくて彼は、我等の「平和」となり、眞實なる「正義」と「公平」とを世に與へ得たのであつた。

家に留まるであらう。しかし、若し、その家が、汝らを拒むならば、その祝福は汝等に還るであらう」といはれた。

與へるといふことは、己れにあるものを失ふことではない。與へることは新たなる價値を人生の上に創造することである。與へることに由つて創造されたる愛は、何處かに往いて、その祝福を與へないでは置かぬ。

故に人は、拒まれても愛せねばならぬ。愛することは、己れを生長せしめることであるからである。

9、十字架が表へる眞の正義

そして、イエスの十字架は、さうした態度、さうした方針が、宇宙の眞實とその軌を同じくするものであることを顯示するものである。

ピラトの法廷に、兵卒等は彼に荊の冠を戴せ、その面に唾した。そしてその頰を擊ちつゝ、

それが爲めに老いたる牧師は危く轢き殺されやうとし、村の駄犬は右往左往に逃げ廻るといつた騒ぎを惹き起した。

彼はやがて村の出口に達したが、そこには、今一つの立札があつて、「サンキュー（有り難う）」と書いてある。

それを見た彼はハタと胸を打たれる。悔恨の涙が眼を熱くする。

そして彼は今一度入口の立札まで引き返す。そして更めて、徐かに、この小村を乗り過ぎる。そして再ひ「サンキュー」の立札まで來た時、まことにその語を受くる資格を得たる喜びに溢れるといふのである。

愛が暴力に勝つたのである。

8、拒まれた祝福は己にかへる

イエスは、その弟子達を村々へ遣し給ふに當つて、

「家に入らば、先づ祝福を與へよ。家人が、祝福を受け入れるならば、祝福は、その

7、パンチの漫畫が教へる眞理

イギリスに「パンチ」といふ週刊雜誌がある。日本語の「ポンチ」といふは恐らくこの雜誌の名から來たと思はれるのであるが「パンチ」は極めて古い歷史を有し、高尙なる滑稽味を主とする雜誌であつて、それに現はれた漫畫はヨーロッパの政治界に影響を與へると曰はれてゐる程に有力なものである。先年十月中のある週に發行されたその「パンチ」に興味ある漫畫が載つてゐる。

若い自動車乘りが、郊外の遠乘りに出掛ける。そして、小さな村の入口に差しかゝる。

そこには村の立札があつて、

「何卒しづかに自動車を走らして下さい」と書いてある。

暴虎馮河の勢を持つたこの若者が、もとより、さうした立札なんかに從ふ筈はない、彼は却つて、スピードを增して、この小村を通り拔ける。

べき公役を言ひつかつた。ユダヤ人としては憤慨せざるを得ない、厭はしいことである。

しかし、ロマの一市民である以上、爲すべきことは、爲さねばならぬ。そして、一里を往つたならば、政府に對する義務は正しく果されたのである。

しかし、そのロマ人たる役人と、この徴發されたるユダヤ人との間に存する隔離、不快なる感情は、その儘に殘される。その不快感が取り去られない限り、この人々の間に於ける正義と公平とは、何時までも實現されないことゝなる。

之に反して、一里を行く間に、この官吏と、この人民との間に友情が釀成され、その結果として、更に一里を共に行くといふに至れば、そこに、隔離したる友情の恢復があるのであり、公役といふが如き無理なる事象よりして、人的關係の圓滿といふ美しきことが得られる。

我らは、それを追ひ求めねばならぬとイエスは說かれたのである。

貸主は

先づ第一に、事の餘りに滑稽なるを感ずるであらう。

そして、その滑稽は、人間相互の間に於ける親情を無視した結果に由るものであることが明らかとなるであらう。そして、貸主と、借手との間に於ける友情の恢復が得られるであらう。

下衣の要求に對して下衣を與へることは、司法の上の公正を得るに止る。

更に上衣を與へることは、それに由つて眞實なる『ジャスティス』すなはち人間相互の間に於ける和平を持ち來す。イエスはそのことを指摘されたのである。

6、政府の命令が容に容はぬ場合

異邦人であるローマ人が、支配者としての權力を振つてゐるために、ユダヤ人が困難を感じ、又憤怒を感じたことは、實に著しいものがあつた。

そして今、政府用の荷物を擔いで、異邦人なるローマの役人と、一里の間を共に行く

（三）　政府の徴發に由つて、自ら好まざる賦役を課せられた場合

5、司法の正義にはかくして對へよ

借金が拂へないために、遂に法廷へ引き出された場合があつたとする。貸主は、その金の代償として被告の下衣を要求する。

下衣とは、シャツ樣のものであつて、兩袖は肱まで、兩脚は脛まで達するに過ぎないものであり、上衣といふは、僧衣に似た寬濶なものであるが、パレスチナの平民は、多くはこの上下二衣をその被服として所有するに過ぎないものであつた。

されば、下衣を要求されたならば、それとゝもに、今度は贈物として上衣を與へよ、とイエスは曰はれたのである。

貸主が如何に無情であればとて、——無情なればこそ、下衣を抵當に取らうとまでいふのであるが——身に纏ふべき唯一のものなる上衣を進物として贈られ、贈り主は、裸の儘で居ねばならぬとなれば、

かうした風な仇討の習はしが、古代の民には存在した故に、それを矯正するとて「生命は生命、眼は眼、齒は齒、手は手、足は足をもて償はしむべし」といふ申命記十九章二十一節にあるやうな律法が制定され、それに由つて、受けた損害に對する報復だけが許され、それ以上に仇討をすることが禁ぜられた。

多くの人々は、今でも猶、それが正義であり、公正であると、考へてゐる。司法のことを英語で「ジャスティス」といふ。「ジャスティス」とは又正義公平を意味する言である。そして、多くの人々は、司法とは、十の罰に償するものに、十の罰を課し、十以下でも、十以上でもあらざるものを決定するために存するものであるとし、それに由つて、正義と公平が保たれると考へてゐる。

しかし、イエスは全く異なる立場を持つ。そしてそれを解說するために三つの例を擧げられたのである。

（一）　全く司法と關係なき個人問題の場合——頬を擊たれること。

（二）　裁判所に於て訴訟の結果、敗訴に處せられた場合

暴に對するに愛を以てせよ。始めの暴に由つて破られたる人と人との關係は、再び恢復の曙光を見出す。

イエスはかく教へられたのである。

4、古代人の考へた正義は仇討であつた

アダよ、チツラよ
俺の聲を聞け
レメクの妻女どもよ
俺の言ひぐさを承け
俺の傷ゆへ、俺は人を殺した
俺を撲つた故、男兒を殺した
カインは七倍の仇討をしたが
レメクのそれは七十七倍ぢや

（創世記　四ノ二十三以下）

一一、愛は與へる

「さうか、では、それが眞實なのだらう。スタントンのいふことは大抵間違ひが無いからね」

少し笑ひさへ含んでかく答へた儘、大統領は又靜かに机に歸つて書きものを始めた。

3、正義とは人と人との間に於ける圓滿である

人と人との間に於ける正義は、物と物との間に於ける正義と異なる。擊たれて侮辱を受けたることに由つて成程、正義にはマイナスが生ずる。

しかし、それだからと曰つて、更に之を擊ち返せば、擊ち返されたる者の心にも又深い痛痍が與へられるのであつて、マイナスは更にマイナスを添加する。

人の世に正義あるは、人と人との關係を正しくし、圓滿にし、親密ならしめんが爲めである。暴に報ゆるに暴を以てしては、始めの暴に由つて破られたる人の世の正義を癒合し得ない。

溢れて、大統領の下に歸つて來た。

大統領は、いさゝか驚いたやうな氣味で、

「君は、あの書狀をスタントンに渡したかね」と訊ねた。

使の高官は、たゞうなづいた許りであつた、餘りの腹だゝしさに、ものも言へないものゝやうである。

「それで、スタントンはどうしたかね……」

「書狀を破つてしまつたんです」

怒りに充ちた高官は叫ぶ。

「それぱかりでは無いんです。彼は閣下のことを馬鹿だといひました」

大統領は靜かに椅子から立ち上つた。そして、不思議さうに、朱を注いだ使者の顏を見下す。

「スタントンは、そんなことを言つたかね」

「いひましたとも、一度ならず、二度までも」

しかし、イエスは、それに對して、反對の聲を擧げられたのである。打たれたる頬の痛みは、時がこれを癒すまで待たなくてはならぬ。しかしそれとともに、時が經てば、痛みは必ず癒るのである。

だが、その侮辱に由つて與へられた心の傷みは、時が經てばとて、必ずしも癒えるものではない。いな、時が經つとともに、その痛みは愈々激しさを加へるかも知れない。その報復として相手を擊ち返したからとて、己が受けたる心の痛みには聊かの輕減も與へられぬ。

しかし、侮辱が與へる傷の深さは、これを受けるもの、心の狀態に由つて定まる。怒の心を以て之に對すれば、痛みは愈々深刻であり、且永續的である。しかし寬厚の心を以て之に對すれば、心はカスリ傷さへも受けないですむ。

2、リンカーンの取つた態度

大統領リンカーンから陸軍卿スタントンへの書狀を托された一高官は、怒氣滿面に

一一、愛は與へる

「目には目を、齒には齒を」と云へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頰をうたば、左をも向けよ。なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを强ひなば、共に二里ゆけ。なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとするものを拒むな。（マタイ傳五章三十八——四十二節）

一、正義といふことの眞實の意義

右の頰、あるひは頸の右側を、逆手で擊つといふことは、ユダヤ人の間に於ては、最も拙だしい侮辱であるとされてゐた。

そして、その侮辱に對して報復することは當然の權利であり、また、さうすることが世に正義を行はしむる方途であるとされてゐた。

聖きと高きとをいよいよ豚らかならしめ給ふたのであらうか。

決してさうで無い。

眞理に在せし彼は、道であり、又生命であり給ふのである。人の光であり給ふのである。（ヨハネ傳第十四章）

そして『汝等もし常に我が言に居らば……眞理を知らん、而して眞理は汝らに自由を得さすべし』（ヨハネ傳八章三十一節）と仰せ給ひし彼である。眞實の言をあれ程に強調し給ひし彼が、僞はりの保證を我等に與へ給ふのであらうか。

決してさうでない。さうである筈がない。

恐ろしき冒瀆の罪を構成するのである。

イエスはそれを指摘し給ふた。

（三）　然りを然りといひ、否を否といふ。これは人の難しとするところであるがために、幾多の人々は、このことを明瞭ならしめず、以て局面を糊塗しやうとする。そして、それがためにいかばかりの不都合と不便とを人生に持ち來してゐることか。

然りである。註釋を要しない。否、である。辯解を要しない。註釋が加はり、辯解が加はるのは、相手をして眞意を捕捉せしめざらんがためである。これは『惡』より出づるものに相違ない。

イエスはかく教へ給ふた。

神に在し、生命に在す『言』が肉體となりしもの、それがイエス・キリストであつた。そして恩惠と眞理にて滿てるもの、それがイエス・キリストであつた（ヨハネ傳第一章）

彼が言であり、眞理であり給ひしが故に、彼は人の世の僞り多きを指摘し、自らの

て、誓ひを果すことができなかつたとしても、神を冒瀆するの罪だけは、まかりまちがつても、免れ得ないことは無いのだといふのが彼等の考へであつた。

しかし、彼等の罪は、そこにこそ横はつてゐるのである。神を意味すべきことを——敬虔そのものの表現を、彼等は強いて神と無關係のものたらしめようとするのである。そして敬虔の心をして遂にその發露の路を閉塞さるるに至らしめるのである。

天とは何か、神の御座をいふではないか、地とは何か、そこに神がその政治を行ひ給ふべき足臺ではないか。エルサレムとは何か、何故エルサレムを指して誓ふのか、そこには神を拜み奉るべき唯一の神殿が位置してゐるからでは無いか、それは君の君にます大神の都であるでは無いか。汝の頭、それは神が汝とはかくの如きものと、その創作の腕を揮ひ給ひし、その聖心の表現では無いか。自らはその髮を白くし黑くし能はぬのに、神はその一本一本を數へ給ふでは無いか。他の人々と異なる汝の頭を與へ給ひし神なるが故に、神は汝の頭の所有者で在すではないか。

されば、神の名を用ひざりしとの辯解は、それが辯解として成立しない許りで無く、

しかもイエスは彼等に向つて、彼等が遵守しつゝあつた誡律の根本に横はつて居り、しかも彼等が氣附かぬ儘に委してある、恐ろしき罪を指摘し給ふたのである。

(一)『一切ちかふな』と彼は教へ給ふた。

果し終るべき眞心も無く、果し得べき力の豫算さへ無きものが『誓ふ』ことを爲すは以ての外である。それは、神の名を附することに由つて爲さるる一の僞瞞である。よしそれは嚴格なる誡律であるとはいへ『誓ひしが故に果さざるべからず』といふは、そもそも末である。果し得べからざることを、誓ひの言に由つて信じ易からしめんとする心の中に、根本的なる罪があるのである。カモフラージュの罪があるのである。

(二) ユダヤ人は『神の名を妄りに用ふること』を恐れに恐れた。故に彼等はその誓に於ても『神の名』そのものを用ふることを避けた。そして或は天を指し、或は地を指し、又は首都エルサレムを、或は己が頭を指して誓言を固めた。まかりまちがつ

に、先づ第一の恐れは神の名を妄りに用ふることより來る罰であつた。そして、それとともに、實際問題として、彼等の間には、その罰に相當すべき行ひの人々が極めて多いことを知つてゐた。そこで彼等は、かうしたゲレムマから遁れようとて、種々なる規則を設けたのであつた。

「人もし宮を指して誓はば事なし、宮の黄金を指して誓はば果さざるべからず」「人もし祭壇を指して誓はば事なし、その上の供物を指して誓はば果さざるべからず」などといふのがそれであつた（マタイ傳二十三章十六節以下を看よ）

しかし、彼等の中にあつても『いつはり誓ふ勿れ、なんぢの誓は主に果すべし』といつた主旨の誡律を、その根本的な精神に於て守り續ける忠實なる人々も存在してゐた。

パリサイ人の中から撰び出されたイエスの弟子達も、かうした眞實のユダヤ教徒であつたと思はれる。

そのことを爲すを常としてゐた。法廷に於て他人の爲めに證人たる場合、そのいふところの眞實なるを示さうとする場合も亦同一であつた。

故に、何れの社會に於ても、最も恐ろしき罪とされてゐる僞證のことが、ユダヤ人の間に於ても、確く禁止されてゐたが、同時にそれは、單に道德上の惡に留まるのではなく、神の嚴かなる名を『妄りに』用ふることであつて、宗教上の立場からいつても許すべからざる罪とされてゐたのである。

言を以てする約束とか、證明とかの眞實性が、まことに神聖なるものであつて、それは神の名を以てすべき程に重大なるものであるとした點に於ても、又約束を破り、僞證を爲すことが、神に對する冒瀆であるとした點に於ても、ユダヤ人は決して謬まつてはゐなかつた。

しかし、ユダヤ宗教の病弊である煩瑣主義と形式主義とは、ここにも亦その魔手を伸べて來た。

律法の精神よりもその形態の支持にヨリ多くの努力を捧げてゐた彼等であつた故

ど、その例は枚擧に遑無き程である。かやうな態度は人類の靈性に對する冒瀆であり、從つてその靈性を賦與し給ひし神自らに對する反逆である。

罪の中に於てもこのことばの濫用の如きは、特に根本的なる惡に屬するものといはねばならない。

2、ことばの濫用に對するユダヤ人の誡律

ユダヤ人の間に於ては、この種の罪に對する意識は夙くより發達してゐた。かの十誡の中に於ても、これに關聯したるものは二つも存在する。

第二誡『なんぢの神ヤーヱの名を妄りに言ふ勿れ』

第九誡『なんぢ虛僞の證を立つる勿れ。』

といふのが乃ちそれである。

ユダヤ人が、自分の言が眞實であることを證明しようとする場合、又はある契約を結んで、その契約の眞實なることを擧證しようとする場合に於ては、神の名に由つて

ものなるが故に、その使用法如何は、直ちにその人の人生に對する義務と責任とに關聯し來るのである。

言語の使用上に於ける惡は凡そ次の三つに類別することができる。

（一）餘りに多くの修飾を用ふることに由つて、その眞意を捕捉するに難からしむること。乃ち人格の正確なる表現であるべき言語を、却つて人格の正體を隱蔽すべきカモフラージュとして惡用すること。

（二）曖昧なる言辭を用ひ、首鼠兩端を持すること。卽ち他人に對する愛情の器官たるべき言語を、却つて他人を陷るべき罠として惡用すること。

（三）人類は、己の心中にある敬虔の念、卽ち宇宙に於ける價値に對する自己の批判を表現し、又その表現に由つて、敬虔の心を益々增進せしめやうとの目的から、種々宗教上の用語を生み出してゐる。しかも何れの社會に於ても見らるるやうに、かうした宗教上の用語、最も愼重に取り扱はれ無くてはならない言葉が、却つて滑稽な、又は墮落した意味に惡用される場合が多い。『南無阿彌陀佛』『アーメン』等の轉用な

無教育なるアメリカ人が、日本人を侮辱しやうとする態度に出ることは、遺憾ながら未だその終熄期が前途遼遠であるといはなくてはならない。しかし、侮辱的な態度に出でかけてゐるアメリカ人でも、こちらで使ふ英語が本格的なものであると、彼等の態度が直ちに一變するものであることは、アメリカを訪れた日本人達が、幾度びも經驗することである。

日本人が、特に東京地方の人々が、名詞の上に『お』をつけることは、外國人の間にさへも隨分な評判となつてゐる。この間、ある人々の集まつたところで、この『お』のつけ方について大分議論の花が咲いた。そして結局到達された結論は、この『お』は、それが特殊なる敬語として用ひらるる場合を除けば、大抵は、普通であるものをヨリ高尚にせんがためのものであり、從つて、普通以下に少しく下等なるものには、この『お』を二重につけるのである。『おみあし』の如きがその一例であらうといふのであつた。

かやうにまで、ことばはそれを使用する人の代表者となるべき重要なる地位にある

りを感ずるものであるが、フランス語に對しては嫌惡を覺える』といひ、その理由として『英語は罪惡のことに就ては、それをハッキリと罪惡と感ぜしめる言葉を持つてゐるが、フランス語には罪惡を罪惡で無いらしく感ぜしめるやうな巧妙な手段が講じてあるからだ』といつてゐる。

新約ギリシヤ語の大家であるA・Tロバートソン博士は、その有名なる新約ギリシヤ語大文典の序文に、次のやうな意味のことを述べてゐる。

『多くの人は、物理、化學、生物學、數學といつたやうな諸科學は生きた學問であつて、興味津々たるものがあるが、既に死語となつてゐるものの研究などは愚劣極まるものであらうと考へる。しかし、いはゆる科學といふものは、石だとか草だとか動物だとかいつたものを資材としての研究ではないか。それに反して、言語を學ぶものがその對象とし又資材とするところのものは、これ等動植鑛物よりも遙かに高等なる存在物である人類の、しかもその最も高き活動である心の働きである故に、言語學の研究は、人生に於ける事業の中最も興味津々たるものである云云』

異なるものとして所有するものがことばであることに見ても、ことばは靈的なるものであり、ヨリ高きものであることが明らかであらう。まことに言あることに由つて人には交際があり、交際あることに由つて、智識の進歩があり、愛の增進がある。宇宙の實在が『心』であり、その性格が愛であることより見て、我等はことばが實在の表現であることを肯定せずには居られないのである。

その藝術才能を、繪畫彫刻の方面に向はしめず、ひたすらに言の藝術にいそしんだユダヤ民族が、遂に世界人類の靈的教師たるに至つたのも、ことばといふものが人生の上に於て有する重要なる地位と、その價値とを證明するものだといつていい。

だから、言語といふものは、それを使用する民族の生命そのものを代表してゐるといへる。時代とともにその言語は變化して行く。しかしそれに變化を與へ、その變化を肯定し、そして、その變化したものを維持して行くのは民族全體の力である。故に國語はその國民全部をその作者とする一大藝術であるといふことができる。

アメリカの大說教家、ヘンリー・ワード・ビーチアーは『英語について非常なる誇

一〇、誓ふなかれ

——盲従の眞實性に就て——

また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と言へる事あるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髪一筋だに白くし、また黒くし能はればなり。ただ然り然り、否否といへ、之に過ぐるは惡より出づるなり（マタイ傳五章三十節—三十七節）

一、宇宙人生の根本を左右することば

ギリシヤ人は宇宙の根本に横はつてゐる眞實と原理とをことば（ロゴス）であるといつた。人の心が如實に表はれるものは、ことばであるからである。人類が他の生物と

しかし、それ以外の離縁は、その責任男子にあるといはなくてはならぬ。家庭の神聖は、さうした男子の勝手氣儘を許さぬのである。

イエスはかく道破されたのである。

それは永い闘爭であつた。

更に永く續き行く闘爭であらう。

しかしながら、イエスの途は何處までも、性の神聖を旗印として進んで行く。眞實なる性の醇化は、その聖化に至つて始めて徹底すべきであるからである。

シャムマイを師と仰ぐ學派に於ては『好ますなりたる』とは女が姦淫を行つた場合のみを意味するのだと教へ、一方、ヒレルの學派に於ては、夫は自己の好惡に由つて、妻を去らしめ得るものなりとした。

かうした爭論の間に、男子が男子特有の墮落を行ひ、女子に對する侮辱を行ひつゝ、しかも、自らの人格を破壞しつゝあることをイエスは知悉してゐ給ふたのである。

姦淫に於て捕はれたる女を前にして『なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て』と喝破し給ひし彼である。男子達が勝手氣儘に造り上げた「姦淫するなかれ」の名刀を、今又を逆まにして、彼等男子に迫り給ふたのである。

『色情を懷きて女を見るもの』それこそ眞實の姦淫である、恐ろしき罪である。彼はかく宣し給ふた。

女が姦淫したる場合は……

既に破壞されたる家庭が、形式的にのみ存在してゐたとて、何の益があらう。離緣狀のあると否とを問はず、實際の離緣は既に完成されてゐるのである。

祭司は一種の聖水を作り、これを女に飲ましめ、罪なき時は害を受けず、罪ある時は身體に異狀を來すべしと宣言する。そして、それに由つて裁きが行はれたのである。裁判として最も原始的なものであり、それが正當のものでなかつたのはいふまでも無い。

しかも、それが當然夫の權利であり又妻の義務であるとされてゐたのである。その後數世紀を經て發布された申命記法の規定は、少しく人道的となつて居るが、猶且男子の優越權は取り去られてゐない。

人妻を取りてこれを娶れる後恥づべき所のこれにあるを見て、これを好まずなりたらば、離緣狀を書きてこれが手に交たし、これをその家より出すべし（申命記二十四章一節）

といふのである。

イエスの時代に於ては、既にこの離婚の當否に就て激しい議論がユダヤ人の間に戰はされて居つた。

ユダヤ人の間に於ける婦人の地位は、日本に於けるそれと等しく餘り高いものではなかつた。

「姦淫するなかれ」とは、十誡の第六誡として重要なる律法であるとはされてゐた。しかし、その姦淫といふは、有夫の女が、他の男と通じたる場合のことを言つたのである。妻ある夫が、他の女に關係したる場合は何の罪にも問はれなかつた。アブラハムも、ダビデも、ソロモンも、妻以外の妻を有したのであるが、ユダヤ人の間にあつては『聖人』として尊崇されてゐたのである。

男子が姦淫の罪に問はるるは、ただ有夫の女と通じたる場合のみであつた。故に「姦淫するなかれ」といふは、恰も「盜むなかれ」といふ誡のやうに、男子の所有物たる女子に對する保護の規定であつたのである。

從つて、妻に對する夫の態度は、我等の想像以上のものがある。民數紀略第五章十一節以下に記されたる規定に由れば、夫がその妻の貞操に就て疑ひを持つた場合に於ては、妻は祭司に由つて罪の有無を定められねばならぬ。

んが爲めである。故に、女に對するに、醇化のそれに反するが如き態度に出づることは、生命そのものに對する反逆である。

穢れたる婦人に接することであつても、正しからざる結婚を爲すことであつても、又離婚といつたやうな、恐ろしい破壞事業であつても、それは皆生命、そして生命の源なる神への反逆である。

眼は大切である。手も貴重である。しかしながら、それは生命そのものと取り換えることができぬ。故に肉體上の不具者を敢てしても、靈性の破壞は之を防禦しなくてはならぬ。「色情を懷きて女を見」或は「妻を出す」亂行を敢てするものは、その人格的價値の喪失したること、猶かのエルサレム郊外なるベン、ヒンノムの谷（ゲヘナ）そこに棄てられたる、市民の塵芥、それと等しき種類のものといはなくてはならぬ。

イエスはかく說かれたのである。

しかし、更に、しかし、である。もし假りに、一夫一婦の主義が、原始的な動物性に出づるとするならば、氣の向いた相手の後を追ふて、勝手に花から花へ移るといふことは、更に更に原始的な動物性に基づいてゐるのでは無いだらうか。

7、謬りの原因は人格の問題

性の惡用、結婚生活の紛亂、それは皆一つの根本的な誤謬から生れて來る。女を性慾の對象として、そしてそれを女が有する第一の意義として見ることがそれである。

女は、女であることが第一なのではない。人であることが第一である。彼女が女であることは第二の問題である。

彼女は器官ではない、一の人格である。彼女を性慾の對象として、そしてその意味に於て見ることは、人としての彼女に對する重大なる侮辱である。

それとともに、女が女として與へられてゐるのは、ここに性慾醇化の作用が行はれ

有すべき至高なる愛が、ここに味識されるのである。

この愛の味識は、單に結婚の當事者たる夫とその妻とに限られるので無い。他の人々との間に於ける友情、特に夫が有する女性の友人、妻が有する男性の友人との間に於て、未婚時代に於ては可能ならざりし、極めて親密なる愛情の交換が可能となるのであり、ここに人の世の最も尊き生き甲斐が經驗されるのである。

そして、子女が生るるに至つて、性慾が與ふる最大の賜、その醇化の絶頂ともいふべきものが經驗されるのである。

しかも、かかる幸なる賜が、充分その眞價を發揮せんが爲めには、結婚が一夫一婦主義のそれであることを必要とするのである。

しかし、ある人々は主張する。

一夫一婦の主義、そしてその根本を爲す男子の『嫉妬心』は、もともと、家長制時代に於ける『女子所有』の慣習が生み出したるものであり、原始的なる一の本能を基礎とするものである。故に現代人は、それに盲從するを必要としない。

生物進化の理法を檢討し、それに用ひらるる生存競爭の跡を究むる時、我等の發見する一の原理は、『親性愛』の最も強き種屬が、遂に最後の勝利を得るといふことである。親性愛をその最高度に於て可能ならしむるものは家庭である。家庭の基礎はいふまでもなく、正しいそして恒常的な結婚であらねばならぬ。

故に、之を古にしてはプラトーン、これを近代にしてはマルクスの如きが家庭の廢止を以て人類進歩の一手段なりと主張してゐるにも拘らず、人類は家庭生活の神聖を、最も貴きものとして維持し來つてゐるのであり、その點に於て人類は決して謬つてゐないのである。

人類が有する最高の使命は愛の實現である。しかも戀愛のみを以てしてはそのことの實現が困難である。しかし結婚生活に於ては、衝動を基礎とせず、しかも、單なる『夢の實現』を基礎とせず、意志に立脚したる協同的勞作がここに實現され、人類の

如何なる人も、その心の中に、ある理想的なる相手を描いてゐる。しかしながら、この世に於ける實在の人物中にはさうした注文に合致し得るものは一も存在しない。そこで對手の中のある一部分、例へば話し振りとか、首の曲げ樣とかいつたやうなものの中に、己れの夢と合致するものがあれば、その人全部をその理想の人だと思ひ込んでしまふ。そしてそこに戀愛が生れる。

故に戀愛が、愈々結婚生活の實際に直面したる時、その對手の中に、己が理想と全く相違したるものが發見さるるに至るのは、寧ろ當然だといつていい。

故に、肉體的な性慾が、その儘では不充分であると同じやうに、戀愛的のものに留まつても亦不充分である。それは刺激を與へるかも知れない。しかし、更に重要なる靈感（インスピレーション）を與へることをしない。

この必要なる靈感を與へるものを我等は結婚といふ。結婚は性慾（肉體的の）と戀愛とを基礎とし、又素材としてゐるが、それよりも更に高度に進みたる性慾醇化の一面である。

性慾の醇化、いな性慾の聖化を外にして、人はこの問題に關して何等の口實をも持ち出し得ないのである。

5、戀愛の特質とその缺點

性慾の醇化が、藝術とか宗教とかいつた程度のものにまで進まない場合に於ても、それは猶往くべき途を持つてゐる。

性慾が有する他の一面は『親性愛』ともいふべき種類のものである。故にそれに類似したる情性の發露によつて、その脫出が遂げられることが多い。

或は教師、或は看護婦、或は種々なる慈善又は奉仕のことに從事することによつて、使用されざる性慾は、その滿足を得べき途を發見するのである。

性慾が有する今一つの方面は『對者を求むる心』である。そして、それはやがて戀愛（ロマンス）となつて發露する。

しかし戀愛は、多量の夢をその中に含んでゐる。

以て性を取扱ふ輩は、やがてその妻をも一種の器官と視る性質の所有者となり、この試驗飛行は、結婚を成功せしむるとは反對に、全くこれを破壞し去るのである。しかも、この場合に於て、その性格の破壞を與へらるるものは一人にあらずして、二人なるに於てをやである。

しかし、それに對しては、更に戰慄すべき說を爲すものがある。

かうした穢れた女達は、かうした生活を送る外に途が無いのである。いな彼等は、さうした生涯を、平常にして樂しきものであるとこそ思へ、他の肉體的な、又は心理的な苦惱が無い限り、かうした職業そのものを苦痛とは思つてゐず、彼等の側から進んで男子を誘惑するのであり、男子はただ之に應じてゐるのみであると。

子供が甘きものを好み、それを多量に欲するからとて、慾するが儘に甘きものを與へる大人あらば、彼はその子供の味方であらうか、或は又敵であるのであらうか。

墮落せる女達の故を以て、之をその境地より脫せしむることに努力せざるものは、その女達を賣るものではないか、その女達の敵であるのではないか。

である。この神秘に對する探檢は若き心を惹き付けずしては置かない。幼き日よりの疑問であつたその機能のことを悟る、そのことの悦ばしさが、若者を思ひ設けぬ深淵に落ち込ますのである。

第三の方面は、ある意味に於て、更に深刻だといへる。青春の時は反抗を悦ぶ時代であり、實驗を貴ぶ時代である。何等の理由も說明も與へられずして、單に抑壓されてゐるこの「性」の問題、それに對して獨自の立場から之が解決を試みやうとするのである。そして新らしい實驗を試みやうとする心に燃える。さうした事が彼等をして先づ第一の過ちをさせるのである。

第四の方面に至つては、實は沙汰の限りともいふべき種類のものであるが、しかもある人々には眞面目に主張されてゐる。それは乃ち、かうした性的經驗を得るといふことは、結婚に對する試驗飛行として、それ自身のよき機能を有するのだといふのである。しかしいふまでもなく、この場合は他の科學的又は實驗的なものと異り、試驗者それ自身の性格がそれに卷き込まれずしては置かないのである。かくの如き態度を

てのみいふべきであつて、何人も最初から、さうした意味で足踏みをするのではないといつた方が正しい。

恐らく今日相當に趣味性を養はれた青年を、いはゆる遊廓といつたやうなところに入り込ませ、そこに住居してゐるやうな女達に親しませるといふことは可成りに困難な事業であると思はれる。危險は却つてカッフェーなどに群がる女達、さうした性的稼業を主としたのではない方面の人々との關係にあると考へられる。もし性情の滿足だけが動機であるなら、如何に趣味的に見て下劣であつても、何の差異も無さうに思へるのであるが、さうでない點から見て、性的衝動が、さうしたことの第一原因でないことが分ると思ふ。

第二の方面はもつと肯綮にあたる種類のものである。若き人々の中には冒險を好む性質が多分にある。そして、それはそれ自身極めて善きものである。知らざる世界を究め、新らしい經驗を喜ぶ心、それありてこそ人は眞實なる人生々活を爲すことができる。かうした精神の持主に取つて、最も神秘なる「知らざる世界」は「性」の世界

りあるまい。

同じことがこの性慾抑制の問題についてもいへる。我等は全人格の破産を犠牲とすべきか、又は、ある意味に於て取るに足らない程度の健康阻害を避くべきか、その何れかを取る外はないのである。

そして、いやしくも平常の判斷力を有するものである限り、この間に於ける取捨撰擇の途は自ら明らかであるに相異無い。

4、惡所に出入する人々の動機と理由

故に、青春の血に燃ゆる人々が、ただその客氣に驅られて、花柳の巷に進むといふことの中にも、それを分析して見れば、種々なる方面を見出すことができる。

先づ第一に考へられるのは、彼等が性慾的衝動を抑へ得ず、遂にさうした巷の女に走るのだといふことである。

しかし、それはさうした場所に出這りすることが一の常習となつてゐる人々につい

は、健康上、及び精神上可成りの害悪を來すといふことは、何人にも分つてゐる。

そこで、それならば、我等は事務所へ勤務することをやめてしまふのであらうか。又、特に今日發行されるやうな書物や新聞を讀むといふことは、健康上害あることであり、人間の眼といふものは、さうした目的のために作られたものではないといふことも事實である。

しかしながら、それだからといつて、今日書籍と新聞との閱讀を直ちに廢止することを以て、人類に與へられたる使命を果すべき最上の道であると論ずる人はあるまい。

オックスフォードに殘る昔話として傳へられたところに由れば、そこの一教授は、新米の助教授に、不順の氣候に堪えつゝも猶且長壽を保ち得べき良法を教へるとて

『夕食の後は勉強をしてはならぬ。そして夕食はなるべく早く（急いでではない）喰べるやうに』

といつたといふ。

しかし、さうした生活をして、それで長生きさへすればいいといつたやうな人は餘

のものでは有り得ないのである云々。

8、ヨリ大なる惡とヨリ小なる惡

もし、エリスの說が正しいとするならば、(エリス以上の權威は容易に見當らない故に、先づ彼の說を正しとすべきであるが、)いはゆる貞潔の必要といふことは、如何なる立場に置かれるのであらうか。

(一)正當ならざる關係に於て、又は正當ならざる方法を以て、性慾を行使するといふことは、既にいつたやうに、精神上及び肉體上の害惡を來す。

(二)性慾を絶對に抑制するといふことも、精神上、及び肉體上にある種の害惡を來す。

かくて、我等は一のヂレンマに陷つてゐるのであるが、問題は我等がその害惡の中、何れを捨て、何れを餘儀ないものとして取るかといふことにある。

一日八時間も事務室に座つて居たら、又往復の滿員電車に鮨詰にされるといふこと

いな、それぱかりで無く、必要以上に性慾を抑制するといふことは、ある種の人々に取つては、肉體的に、そして心理的に、ある種の障害を與へはせぬか——現にある方面に於ては、それが害惡であるとの議論さへも行はれてゐるのだから……。

しかし、この種の問題に關する大家であり、そして純正なる醫學的な立場から論を立ててゐるハヴェロック・エリスは次のやうにいつてゐる。

性慾を嚴正に制禦しやうと努力する結果としては、發狂その他の恐るべき過害を來す危險がある、といつた前代の意見は、普通健康狀態にある人に關する限り、全く無稽の說だといつていい。

しかし、同時に、絕對的なそして長期に亘る性慾抑禦が、肉體上、及び心理上、何等の惡結果をも來らさないと考へることも又謬まつてゐる。……

要するに醫學者の間に於ける爭論の中心點は、如何なる結果が、如何なる程度に及ぼされるものであるかの點に關してゐるのであるが、しかしネーキ氏の信ずるところでは——そしてそれは正當な判斷であるが——何れにしても、さまで重大な種類

(二) 性情を節制し得ざること

の二つであつて、その何れもが、肉體的に、又は心理的に不健康の狀態に在ることを示してゐる。

性情を感ずることなしと誇る女は、聖女にあらずして一個の不具者である。又自ら制することを知らずして、性情の奔逸するに任せつゝ、己が精力の旺盛を誇る男子は、英雄にも豪傑にもあらずして憐むべき一の精神薄弱者である。

2、慾抑制より來る害惡

しかし、問題は更に進んで行く。

生米を全く噛まず、飯のみを食べてゐる人は健康であるが、性慾はこれを悉く醇化し終るならば、人類はその子孫繁榮の途を絶たるる不合理があるのであり、又實際問題として、性慾は全部これを醇化することが可能ではなく、又それが必要であるとも思はれない。

性感の有する精力（エネルギー）はその性質に於て、藝術及び宗教など、すべて創始的な人類活動に關する精力と同種同族のものであり、かうした活動を理想とする心も、同じ種類の精力から出で來るのである。

米と飯とは同種同族のものであるが、それだからといつて、いつも米の儘で喫まなくてはならないと主張する人は一人も無からう。同じやうに、性感はこれをあるが儘なる姿に於て使用せず、かうした高潔なる活動に向つての醇化に努めることを必要とするのである。

しかし、醇化しやうとしても、醇化すべき素材がなくてはならぬ。故に性情を感ずるといふことは、これを恥づべきことでなく、寧ろ貴い力が己れに與へられたものとして感謝すべきである。

されば、青春より壯年へかけての、いはゆる人生の開花時代にある人々に取つて、最も警戒すべきことは、

（一）　性情を感じ得ざること

人は飢じさを感じたからといつて、それを恥かしいことだと考へる必要はない。その飢じさがあればこそ、そして、それを正しく、また善き方向に用ふることに由つて、人はその健康を増進するからである。

性慾は、飢じさと同じやうに、人に賦與されてゐる本能であつて、それを有することが恥づべき問題でなく、それが失はれるといふことが良きことであるのでもない。性慾を正しく用ふることによつて、人は道徳上、及び靈性上の旺盛なる發展を成し得るからである。

勿論、飢じさが、これを惡用するときに、その人の健康を奪ふと同じやうに、性慾も、これを惡用するとき、その人の肉體と精神とを害なふのである。

故に、飢じさと性慾とは、同種同類のものだといひ得る。しかし、その相違してゐる點を擧げれば、飢じさは、日毎にそれを滿たして行くことに由つて、健康の増進を謀らなくてはならないが、性慾の場合に於ては、それは、その儘に使用せず、寧ろ之を醇化（サブリメート）する必要がある。ことである。

九、聖なる性

——性の醇化に就て——

「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懐きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投け入れられぬは益なり、もし右の手なんぢを躓かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡びて全身ゲヘナに往かぬは益なり。

また「妻をいだす者は離縁狀を與ふべし」と云へることあり。されど我は汝に告ぐ、淫行の故ならで、その妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり（マタイ傳五章二十七——三十二節）

一、性の衝動を有することは恥づべきでない

非を正して貰ふであらう、と。

しかしながら『法』は遂に一の無人格なる『物』たるを免がれぬ。人と人との關係を支配するものは『物』であつてはならない。『靈』によつてこそ、そして『靈』の表現たる愛に由つてこそ、人と人との關係は支配される。愛を無視して、單なる『物』に賴るとき我等は如何に無益なる苦痛を人生に與へてゐることか。不必要なる牢獄と『償ふこと』とをこの世の必要事としてゐることか。

『和睦』である。『和解』である。このことを爲して、始めて我等は神との『平和』を己がものとすることができる。

平和が天國である。そして混亂が地獄である。

イエスはかく說かれた。

我が内心に疚しきところ無ければ、怒る者をして思ひの儘に怒らしめよ。我は自らを清く保ちつゝ、神への勤行を熱心に又厳格に勤めるであらう、とある人々はいふかも知れない。

しかしながら、

『我は憐憫（愛）を好みて、祭りを好まず』との神の言は、ここにもその適用があるのである。

『汝もし、供物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟に怨まるる事あるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち、来りて、供物をささげよ』

とイエスは教へ給ふた。人と和がずして、神と和ぐことはできない。それがイエスの主義である。

更に又、ある人々はいふかも知れ無い。黒白は出る所へ出れば分ることである。彼義しきか、我誤れるか、一々それを辯明するの煩に堪え無い。司法の裁判に由つて理

のである。他の人々との間に愛の交通が失はるれば、それは當然神との間に於ける愛の交通を失ふこととなる。卽ち神の『審判』に會ふ譯である。

言葉に由る侮辱が、人格に對し、そして神に對しての冒瀆であるならば、心中に於て人を『痴者（モーレ）奴』といふは更に大なる侮辱であり、冒瀆である。神知ろしめすべき天國の第一條件を取り去ることである。それはゲヘナ（地獄）の火を往くべく、餘りにも恰當なる資格を獲ることである。

イエスはそのことを指摘された。

5、和解なきところに天國は存在しない

しかし、愛は、循環的のものである。

よし、我に他を怒るの心無くとも、他が我に怒を感ずる時、愛の循環は卽座に破れてしまふ。イエスの宣べ給ふ天國に於ては、獨善主義は、遂に善ではあり得ないのである。

古代よりの律法をイエスは悉くよきものとして納れ給ふた。しかし、殺人の罪が、人格に對し、神に對する罪である以上、よし、それが殺人といふやうな外的行動として現れ無いまでも、いな外的行動として現はれたのにも增して、その內的な、心の動きが、罪の決定を左右するものであらねばならぬ。

されば……

『すべて故なくして兄弟を怒る者』は罪人である。原行譯はこの『故なくして』を略してゐるけれども、原文批評の立場から言つても、それはその儘存置した方がいい。イエス自ら、神殿に行はるる邪惡を見ては、大いに怒を發し給ふたのであり、怒がさうした建設的な目的を有する時、それは善き効果を人生の上に與へるものであるからである。

『故なくして爲さるる怒』とは、人が單なる感情として他に對して有する怒である。個人的なる嫌惡、又は不平である。これは、この儘に委せられる時、その人自身の人格を毒するだけで無く、他の人々との間に存すべき愛の交通を全く遮斷してしまふも

（五）　不注意に又は貪慾の故に由つて爲さるる間接的殺人、

（六）　故意の殺人、

等がそれである。

右の中（一）より（三）に至るものは、それが罪とならないばかりで無く、そのあるものは、貴き德の一として凡ての人に推稱さるべきものである。

（四）より（六）に至るまでのものは、罪惡中の罪惡であり、その罪惡たる所以のものは、既にいつたやうに、

（一）人類社會に對する反逆である故に『審判』卽ち刑事裁判所の問題とならなくてはならぬ。

（二）それは又人格に對する侮辱である。人格に對する侮辱は人を『愚者』（ラカ卽ち頭の空すつぽうなる者）と呼ぶことと同種類のものであり、同じ種類の罪惡である。人類侮辱の罪は神に對する冒瀆であるが故に、町の古老達を以て成る衆議（サンヘドリム）の問題とならなくてはならぬ。

ふ者は、ゲヘナの火にあふべし」

そして、かく讀む時、我等はイエスの取り給ふた方針を、如實に悟ることができるのである。

殺人は、既に說いたやうに、凡そ次のやうに之を種別することができる。

（一）不注意に出でたのでも無く、もとより故意に出でたのでは無い殺人——牛が惡牛なりと知らぬ中に、それが他人を突き殺した場合に於ける牛の持主、の如きがそれである。

（二）社會に對する禍害を取り除く意味にて爲さるる殺人——死刑の如きがそれである。

（三）人類社會に對して爲さんとする奉仕の心が、遂に彼を殉教にまで導き行いた場合に於ける、一種の自殺、

（四）人類社會と己れとの間に存する關係のことも、他に對する自己の責任をも顧みず、ただ自己の逃避又は自己の滿足を目的として爲さるる自殺、

イエスはそのことを指摘されたのである。

4、故なき怒りは道徳上及び宗教上の罪

『愚者』と譯されたのはアラメイク語の『ラカ』であり『痴者』と譯されたのはギリシヤ語の『モーレ(汝痴者)』であつて、アラメイクの一語と轉化してゐたものである。何れも他人に對する侮辱であるのには相違ないが、その意味に於ては、餘り變つたものを認めることはできぬ。にも拘らず一は衆議に會ふだけの惡であるのに、他はゲヘナの火に燒かれるといふ怖ろしい罰を受けるといふのである。イエス自らこの二種の異つた刑罰を定められたと見るは困難である。そこで學者達は、各方面からの研究に立脚して、次のやうにこの章句を讀むべきであるとの結論に達してゐる。

『古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」また兄弟に對ひて愚者よといふ者は衆議にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。然れど我は汝らに告ぐ、すべて故なくして兄弟を怒る者は審判にあふべし。また(心の內に)汝痴者よとい

しかし、古來幾多の殉教者達は、あまりにも明白なる死の運命を、自ら進んで取つた人々ではないか。しかも民は、その人々の死そのものを罪とはせず、殺したる預言者達の墓を自ら建てつゝあるではないか。

三百年の昔、この地球は平面ではなく、球狀のものであることを飽までも主張し、遂に死刑の運命を與へられたブルノー・バウアーのために、現代のイタリー人は紀念碑を建てたではないか。

イエス・キリスト自らが、分り切つた十字架の途を、まつしぐらに進み行き給ふたではないか。

間接的な自殺も、直接的な自殺と同じやうに惡である。しかも、惡でない自殺がある。罪人を殺すといふ場合のやうに惡でない殺人がある。

されば、殺人といふことの惡は、決して外形的な肉體の問題ではなく、內面的な人格の問題であらねばならぬ。

古へ人の律法が定めた『殺人戒』は更に廣汎な應用を有するものでなくてはならぬ。

不正建築に由つて、幾多の禍害を他に蒙らしむるものが、堂々たる實業家として橫行し、惡しき食物、特に酒類の販賣に由つて他の人々の健康と幸福とを損ひつゝあるものが、一廉の紳士として取り扱はれ、しかも彼等より受くる稅金に由つて、國家の重要なる施設が爲されつゝある現代は、この點に於て、往昔の律法家達に劣ることの甚だしきを見出すのである。

3、殺人が惡であることの根本的な理由

『物』よりも尊き『人命』、それがまことの人の固き信條であらねばならぬ。しかし、その尊いといふ『人命』は、單にこの肉體的のものに留まるので無いことを記憶することも亦極めて大切である。

人命を奪ふといふことが、人に對し又神に對しての反逆であるのは、ただ他人の生命に對する危害の場合だけでは無い。己れ自らの生命に對する危害—自殺を含む—も亦同一の罪惡であらねばならぬ。

命を失ふに到らしむべき一切の不注意及び惡行もまた殺人と同じい惡であるべき筈である。

『牛もし男あるひは女を衝て死しめなば、その牛をば必ず石にて擊殺すべし、その肉は食ふべからず。但しその牛の主は罪なし、然ど牛もし、素より衝くことをなす者にして、その主これがために忠告をうけし事あるに、之を守りおかずして、遂に男あるひは女を殺すに至らしめなば、その牛は石にて擊れ、その主もまた殺さるべし』(出エヂプト記、二十一章二十八―二十九節)

といふが如きは、この原則を主張したものである。

また、これらユダヤ人の律法に多大の感化を與へたといはれてゐる、バビロン王ハムラビの法典にも、次のやうに記してある。

『もし建築師人のために家を建つることあるに、その建築を強くせず、その爲めその家の倒るることあり、その家の持主これがために死ぬることあらばその建築師は殺さるべし』

の親近者が仇討の方法に由つて、殺人者に制裁を加へるのであり、それが社會全體の關はるべきものだとはされてゐなかつた。

故に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし（あふべきものなりといつた方が意味をハッキリさせる）」といふことは、倫理の觀念に於て、また社會意識に於て、重大な進展が爲されたことを示す指標であるといはねばならない。

「殺すなかれ」とは、ユダヤ律法の中核を爲してゐた『十誡』の、その第六誡にいはれてゐることであつて、それは一の民法であるとともに、また宗教上の戒律でもあつた。人の生命を奪ふといふことは、その人の關係してゐる人類社會をして、その愛の交通を失はしむることである。これはその血緣者だけの問題ではなく、その社會を形成してゐる凡ての人に對する反逆である。

そして、それとともに、それは宇宙に於ける造化の最後的な表現として『神の像に似せ』たる人格を賦與されたる者に對する反逆なるが故に、神自らに對する罪である。

從つて、殺人の罪といふも、直接なる殺害だけに留まるので無く、人をしてその生

2、殺人の罪の取扱ひ方には種々の變遷があつた

甲の國が乙の國に對して無暴の擧に出でた時、現在に於て許されてゐる世界の狀態では、乙の國自身が、自ら劍を執つてこの無暴を膺懲する外はない。

國際聯盟が起つたのは、かうした場合に於て、その膺懲の局に當るものを、その禍害を受けた當事者とせず、もつと一般的な、世界的法廷で處罰するやうにしたい希望からである。

幸にして、個人の間に於ける道德は、國際間に於けるそれよりも遙かに進歩したものであり、その道德を基礎として立てられた法律も、國際間に於けるものよりも、個人の關係に於けるものに於て長足の進歩が遂げられてゐる。

しかし、原初時代に於ては、個人の間に於ても、國際間に於けると同じやうな制裁方法が用ひられてゐた。

殺人があれば、その殺人者は、一般的な法律に問はれるのでは無く、殺されたもの

1、天國も、地獄も何れも實在してゐる

天國もある、地獄もある。空間的でもなく、時間的でもない、强ひていへば心理的な意味に於て、天國と地獄とがある。

神在すところが天國であり、神在さざるところが地獄である。天の使の姿が見えないこの地上にも天國があり、燃ゆる硫黄の火がないからとて、嚴然たる存在としての地獄は我等の中にある。

イエスが世に來り給ふた目的は天國の建設であり、地獄の破壞である。そして、山上の說教は、さうした事實の計畫書（スペシフィケーション）だといつていい。

神は愛である、愛は神である。神在す天國とは、愛の行はるるところであり、神無き地獄とは愛の滅びたる狀態である。そしてその何れもが人格的なものであり、心理的なものである故に、人の心が永遠である限り、天國も地獄も永遠なる存在である。

八、天國と地獄と

——殺人罪の眞意義——

古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。然れど我は汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。この故に汝もし供物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟に怨まるるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに遺しおき先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、供物をささげよ。なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ。恐らく、訴ふる者なんぢを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん、誠になんぢに告ぐ、一厘も殘りなく償はずば、其處をいづること能はじ。（マタイ傳第五章二十一―二十六節）

イエスの眞面目が躍如として見えてゐる。

故にこの一句は、ある人々が想像するやうな、後世の附加では無く、イエス自らの口より出でたる眞正の語であるのに相違ない。

イエスは、律法の中にある神的要素を充分に認め給ふた。

そして、舊來の宗教を全く取り除けよとは仰せ給はなかつた。

あるが儘なる器をあるが儘に殘し置きながら、猶その中に全く新らしき眞理を盛り給ふべき自信を有し給ふたからである。

名工の業は、技巧を超越する。しかし技巧を否定するもので無い。

イエスの途は、倫理と勤行とを超越する。しかし、それを否定するもので無い。いな、パリサイ人の義よりも、更に勝れた義を有するもののみが、神の國に、その民として入るべき光榮を持ち得るのである。

に、この質問は必ず、ユダヤ人の口から出づるところのものであつた。

イエスは、それに對して答へ給はなくてはならぬ。いな斷乎として答へ給ふたのである。

『誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一劃も廢ることなく、悉く全うせらるべし』

『誠に』とは『アーメン』である。これはユダヤ教の中にあつて、何人も使用しなかつた表現法であり、しかもそれがイエスに於ては屢々繰り返へされてゐるのに見れば、この語はイエス自らの認印だといつていいのである。

『天地の過ぎ往かぬうちに』は、一の誇張法であり、それも亦イエスが好んで用ゐ給ふた表現法の一である。

『一點一劃も』といふは、ヘブル語の中にある一番小さい字（ワウとヨーヅ）のことであり、この二字は時として全く省略されてゐても、その語を構成する上に差支へが無い程のものである。かうしたことを握へて、それを巧みに用ひ給ふあたりにも亦、

茶道にせよ、華道にせよ、その流の正式なる特殊の器具を以てせざれば、優れたる業を爲し得ざるは未だ名人といふを得ず、まことにその道の堂奥に達したる者は、日用の器具を用ひて、しかも類稀なる優秀の業を爲し得るのだといはれる。古き建物を取り去つて、全く新らしきを建つることは、建築家といはるる程の者は、何人にてもそれを爲し得べき筈である。ただ、古きを古きが儘に維存しつゝ、それを全く新らしきものに脫化するは、名工にして始めて爲し得る離れ業である。

イエスは、新らしき宗教の宣傳者として世に出で給ふた。

無宗教の國へ、新たに宗教を宣べ給ふたので無い。明けても暮れても、宗教のことに沒頭しつゝあつたユダヤ人に對して、新らしき宗教を宣言し給ふたのである。

律法に對する彼の態度如何？

新らしき教への宣べらるるや否や『國體に對する態度は』と訊かるるある國のやう

ばならぬ。眞實の意味に於て神のトーラーであらねばならぬ。

しかし、律法の書として完成されてゐる成文律は、進轉し止まぬ人生、急激に複雜化し行く人の世の生活に對して、餘りにも賴り無い水先案内である。ユダヤ人が種々の細則を設けて日もこれ足らざる有樣であつたのは、彼等も亦、あるが儘なる律法のみを以てしては充分なるを得ないことを意識してゐたためであると思はれる。

然るに今、神自らが、人の世に人の生活を爲し給ふのである。神の意志はイエスに於て體現されてゐるのである。

律法は、この『來るべき人』の到來を豫示する陰影のそれであつたのである。彼來つて、單なる繪圖であつた律法は『活けるもの』となり、單なる設計圖でありし律法が、彼來りしによつて、實在の建築となつたのである。

『律法又は預言者を毀つためにあらず、之を完ふせんがため』にこそ、彼は世に來り給ふたのである。

すの風が起り來つた。凡ての詩がダビデ王に、凡ての箴言がソロモン王に、又無名の預言がイザヤに歸せられるといつたやうな風が起つたのである。從つて、愈々これらの律法が、一つの整つた成文法典となるに至つた時、それがモーセの律法と呼ばれるやうになつたのに何の不思議も無い。

そして、さうした事柄を叙述するに際して、傳説にふさはしい描寫法を用ひ、モーセが神より直接にその律法を與へられたといふ話ができ上つたのである。いな、さうした話の方が、原始ユダヤ人に取つて、律法の起源とその價値を悟るに最も都合のいいものであつたのである。

以上説くところを以て明らかであるやうに、律法は神より來つたのである。ただ、それは石の上に書きつけられたのでなく、ユダヤ人の國民的經驗を通して、彼等の良心の上に印刻されたのである。されば律法を、神の言でありとし、モーセより出でたるものでありとすることは、原則に於て、少しも間違つたことではない。

ただ、律法は、それが眞實のものであらん爲めには、絶えず神よりの指示を受けね

4、ユダヤ人の律法はモーセに出でた

然らば、これ等凡ての律法がモーセを通して與へられたといふ意味はどうであらうか。

ユダヤ人の諸法令は、その時代々々の要求に應じて出來上つて來たものであるのには相違ないが、しかし、既にいつたやうに、それは常に前例を尊重し、前例に示された原則の時代的應用なりと考へられてゐたのである。

然るにモーセは、ユダヤ開國の祖ともいふべきものであれば、彼の與へた政治上、宗教上、倫理上の指示は、實際に於て、國民としてのユダヤ人にその生活原理を與へたものだといへる。

故に次第に進展して行く幾多の法制がモーセに出づるものであるとの口傳を持つやうになつたのは、寧ろ當然のことであるとさへ言ひ得られるのである。

殊に、俘囚時代以後に於ては、古代偉人の名を冠したるものに特別なる權威を見出

彼等及びそれ以後の預言者達に由つて示された宗教上のトーラーは、やがて又成文律として集錄され、ここにレビ記、出エヂプト記、民數紀略等にある諸法令が完成したのである。それは凡そ紀元前四百年頃のことであつたやうであり、一般にこれを祭司的律令と呼んである。

ここで特に注意して置きたいことは、ユダヤ人の間に於ては、例へば日本の憲法その他の諸法令のやうに、ある特別なる法律制定委員が任命され、その勞作に由つて法典ができ上るといふやうなことは全く無かつたといふ事實である。

例へば申命記法が發布された當時のことなどは、極めて興味あるものといはねばならぬ。聖書の記事に由れば、それは神殿の修理中に偶然發見されたものであるといふのである。學者達の說に由れば、これは預言者達の一群に由つて造り上げられ、そして時期の來るまで神殿の中に隱し置かれたものであるとされてゐる。

その他の法典もみな、これと相似たものであつて、祭司又は預言者が神託なりとして發表したるものを基礎としてのみ、イスラエルのトーラーは出來上つたのである。

王の顧問であり、民の指導者である人々といふにまで至つた。

殊に紀元前八世紀以後に於ては、アモス、ホセア、イザヤ、ミカなどの大預言者が出現し、優秀なる社會的原則と、靈的宗教とを宣傳したために、ここにユダヤ人の宗教を一新し、世界的なる眞理の寄與をすることになつた。

かうした預言者達が、神の言葉なりとして述べたところのものも亦、トーラーと呼ばれたのである。

やがて紀元前六百二十一年、ヨシアと名づくる英王の下に一大宗教改革が行はれ、大預言者達に由つて說かれた教訓を原則とし、古來の習慣法を統合した一法令が發布された、今日我等が申命記と稱してゐるものがそれである。

その後、國民はバビロンに囚はれ行くこととなり、獨立的な國民生活も、宗教生活も皆不可能な狀態に墮したのではあつたが、しかもエレミヤ、エゼキエルなどの豫言者出でて、新らしい時代に適應し、猶且神の眞理を健實に守り行くべき途を示したのであつた。

い。

さて、かうしたトーラーが與へられた後に於て、それと相似たやうな場合が起つた時は、このトーラーが一つの判決例となり、それに準據して決定が與へられ、かくして一の習慣法ができ上るのである。そして、かうした習慣法は、一種の口傳となり、民の間に於ける不文律といつたやうなものになるのである。

かやうにして、次第にその法制を進展させて行つたヘブル人の間に、祭司以外の宗教家として、預言者といはれるものが出現して來た。

この預言者といふものも、始めの間は、他の民族に於ける、千里眼とか占者とかいつたものと餘り異つたものでなく、一種の神憑といつた狀態の下に、神託を告げ知らするものであつた。

他の民族に於ては、これ等の輩は次第にその聲望を失ひ、哲學者などの教師が之に代るやうになつたのであるが、ヘブル人の間に於ては全く性質を異にした發達を遂げた。彼等の與ふる神託は時代の移るとともにその重要性を加へ來り、豫言者といふは、

3、ユダヤ人の律法は神より出でたるものである

律法といふは、原語にてトーラーといふ。トーラーといふ名詞は『指示する』といふ意を有する動詞から來るのであり、又その動詞の源に遡れば、それは『投げる』といふ意味の言葉である。

そして投げるといふことは、この場合に於ては、神籤を投げるといふ意味に使はれてゐるのである。

往昔ヘブル人の間に、社會生活上の紛爭又は疑義があれば、人々は、神の代表者たる祭司に行きてその指示を仰いだ。祭司はその指示に要する神の聖意を知るために、神籤を投げて、これを占つたのである。

かくして、ある特殊な問題についての判決的指示がトーラーと呼ばれるやうになつたのである。そして、かやうなトーラーは民事のことだけに限られたのでなく、祭祀のこと及び祭司自らのことに就ても、それが與へられたのであることはいふまでもな

等の律法を與へられたのであり、特にその宗教及び道德の本源を爲すべき『十誡』は神が自ら石に記して、モーセに與へ給ふたといふのである。

しかし、律法そのものの中に含まれてゐる諸法制を見れば、それは明らかに、モーセの時代よりは遙か後世のものを多分に含んでゐるのである。

法律といふものは、それを必要とすべき社會狀態が起つた後に始めて制定される。されば律法の中に含まれてゐるやうな、都市生活を行ひつゝある農耕民族、又は商業民族の間に行はれるやうな諸法制が、遊牧時代の文化を有するに過ぎなかつたヘブル民族に必要であつた筈はなく、從つて、これ等が、その當時に於て制定された筈も無いのである。

然らば、律法が神より出で、又モーセより來つたといふのは全然虛構のことであつたのであらうか、決してさうでは無い。

るものと化せしむるに至り、力と生命とを人に與ふべき宗教が、人に束縛を與へるものとなり、宗教が人を救はず、却つて人に救はれるといつたやうな、矛盾した現象を呈するやうになつたのである。

しかし、律法そのものを神の言葉だと彼等が信じてゐたことは、果して謬りであつたのであらうか。決してさうでない。

勿論、彼等がその律法神聖説の論據として、律法そのものの中に織り込んだ傳説は、我等がそれを文字通りに受取ることのできるものでも無く、またその必要のあるものでもない。

その傳説といふのはかうである。

ユダヤ人に國民的發祥を與へ、西暦紀元前二十世紀のころ、エヂプト人の下に、奴隷としての艱苦を嘗めてゐたヘブル人（ユダヤ人の祖先）に解放を與へ、エヂプトよりの脱出を敢てせしめ、遂にパレスチナ定住に至るべき指導を與へた、彼等の偉人モーセは、その脱出の中途、アラビヤ沙漠の一端なるシナイ山に於て、神の口からこれ

ビ記、民數紀略、申命記）のことをいふのであり、時としては、その語が、舊約全書全體に用ひられることがあつた。

律法――そしてそれは、モーセの五書、又はモーセの律法といはれてゐた――は、それを讀んで見れば分るやうに、その中に種々なる法制が含まれてゐるのは素よりのことであるが、しかしそれだけが中心となつてゐるのではなく、歷史あり、傳說あり、詩歌あり祈禱あり、そして宗教上の祭祀及び宗官に關する法規までも含まれてゐるのである。

そしてユダヤ人は、これは神の律法であり、之を守ることが、人の神に對する義務であると考へてゐた。

イエスの當時にあつては、聖書に示されてゐる諸法令を、實際生活に適用すべき便宜のために、種々補助的な又說明的な細則が設けられ、それも亦律法の一部として遵守されてゐた。

かうした細則を、聖書と同じ地位に置いたことが、やがてユダヤ教をして煩雜極ま

律法も大切である、戒律も重要である。しかし、律法と戒律を超越して、イエスの人格そのものより來る力を受ける時、人は眞實に『救』はれる。まことなる道徳完成者となる。

かくしてイエスに於て總ては完成せられるのである。

そして、建築成りたる後の足場のやうに、總ては毀ち去られるのである。

2、ユダヤ人は律法の民であつた

ユダヤ人は律法の民だといはれてゐる。律法を有するといふことが彼等の誇りであつたのであり、律法そのものが彼等の生活を支配してゐた。律法とは、彼等の宗教そのものであつたのである。

いふまでも無く、ここでいふ律法といふは、彼等が普通の意味での法律を有したといふことではない。

律法といふは、多くの場合舊約全書の最初にある五書（創世記、出エジプト記、レ

高きに登るものは、ただ高きを望むに努めなくてはならぬ。下に落つることの恐ろしさに心を向ければ、彼は眼暗み、千仞の下にその身を墮すこととならう。

しかし、そのことは、藝術家に、その細かな專門技術（テクニク）が不必要であるといふことでもなく、人生を活きるのに、倫理や戒律が不必要であるといふことでもない。

專門技術は、名工の天才に指揮される必要があるのである。そしてその時に於て技術はその本色を發揮するのであり、それなくしては、如何に整ひたる技術も、全く無價値のものとなるのである。

同じやうに、人の道德も勤行も、それが、いと高き天才的人格の靈感に觸れる時、それはその本來の特色を充分發揮するのであり、それなくしては、如何ばかり整つた倫理も戒律も、たゞ人をして、自らの罪に懊惱せしめるよすがとなるに過ぎない。

イエスは人生藝術に於ける最高の名工であつた。彼の『天才』に觸れて、一切の宗教と道德とは始めて、その正當なる光明の下に置かれる。

を滿庭に搖り落して景致を添へ、これこそまことに清掃の意義にかなつたものだといつた若僧が、やがて茶道の名手、千の利休となつたのだといはれてゐる。雪舟にしても、左甚五郎にしても、凡そ名手、名工といはるる人には在來の格法（コンヴェンション）を打ち破つて、そこに無技巧の中に技巧をあらはすことが多かつた。

人生といふ一大藝術の中にも、これと同じやうな、天才と凡才との區別がある。整つた規律、堅固な戒律、さうしたものを注意深く守ることによつて、人としての完き性格と生活とを得やうとする心、それは何時の時代にも、何れの民にもある。しかし、さうした倫理と道德に由つて、また、さうした戒律と勤行によつて人は決して救はれない。

それは平凡なる藝術家が、その藝術の法則に囚はれて、平凡無價値の作物を出すのと同じ結果となるのである。

律法と戒律とに賴るものは、その注意を特に『失敗せざらんこと』に向ける。そしてその結果は必ず失敗に終るのである。

七、これを完うする者

――律法と精神との問題――

われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、悉とく全うせらるべし。この故にもし、此等のいと小き誡命の一つをやぶり、且その如く人に教ふる者は、天國にて最小さき者と稱へられ、之を行ひ、かつ人に教ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者、パリサイ人に勝らずば、天國に入ること能はず（マタイ傳五章十七――二十節）

1、天才的名工の道は凡俗と異なる

師僧から、來客ある故に庭園を清掃せよと命ぜられ、折柄の晩秋を幸ひに庭樹の葉

單なる『宗教賛成者』にイエスの眞意が了解し難いのも、かうした理由に基づいてをる。

他のものが光の爲めに存在するのでなく、光が他のものの爲めに存在するのである。キリストの教會が、それ自身のために存在する時、それはユダヤ教への歸還であり、又はローマ教會への墮落である。

教會がそれ自體に於て如何ばかり整つてゐても、もしその存在が、この世の進歩と人類の福祉とに何の關渉をも有しないものであるならば、それは、宗教的同好者の美しい團體ではあり得ても、イエス・キリストに由る眞實の教會ではあり得ないのである。教會が如何に社會の視聽を惹くべき發達を成したかといふことにイエスの關心があるのでない。教會が如何に世を明るくしたか、といふことが彼にあつて最も重大なことである。

生ける人生と沒交涉なる宗教！

パリサイ宗は眞にこの種の宗教であつた。

そして、如何なる罪人にも寛容であつたイエスが、パリサイ人に對してはあらゆる惡罵を浴せ給ふたのである。

といはれたといふことである。その時、このキリスト教の指導者は何と答へられたか、それは我等に傳はつてゐない。

しかし、この神道家は、ものの見事にキリスト教の本體を摑み損つてゐるのである。イエスに由る最も高き德の所有者は、その存在を認めることの最も困難なる人である。見出さんとして見出し得ざるところに、眞實の聖者は隱れてゐるのである。

4、イエスの敎會は世の光である

個人としてのクリスチヤンが、右の如くであるとともに、團體としてのキリスト教會も亦、それ自身のために存在してはいけない。それがイエスの主張であつた。

『汝等は世の光なり』

光は、光自身のために存在するときその存在の意義を全く失ふといふべきである。光は他のものを照すために存在しなくてはならない。これを升の下に入れて保護するは、却てその効果を失はしむる所以である。

鹽は、自らの原形を保存しやうとする時、何の用をも爲さなくなる。鹽が眞實なる効力を發揮し得るのは、その原形を失つた上でのことである、何處に鹽があるのか分らないやうになつた時である。されば鹽は鹽自身のために存在しない。他のものに味を付けんがために存在するのである。

キリストに由れる德は、それ自身のために存在しない。他のものを生かさんがためにあるのである。その德の存在を見出すことが困難であるべき時に、その効果の最も多きものである。

『人の子の世に來りしは、事へられんがためにあらず、即つて事ふることをなし、且多くの人のためにその生命を與へんがためなり』それが、イエス自らの主義であつた。彼の弟子たるものも又さうした態度を取らなくてはならぬ。

ある神道の大家が、キリスト教のある指導者に向つて、

『この人ならば、誠にキリスト教の作り上げた人格者であるといふ模範人物を擧げて見て下さい』

き作用を有するとの理由に由つて、至るところの民に由つて、一種神聖なるものとして取り扱はれてゐる。日本に於てさうであるやうに古のギリシヤに於てもさうであつた。

ユダヤ人の間に於ても、

『汝、素祭（完全なる犧牲）を獻ぐるには、凡て鹽をもて之に味つくべし、汝の神の契約の鹽を汝の素祭に缺くこと勿れ、汝禮物をなすには、凡て鹽をそなふべし』（レビ記二章十三節）

といふ祭祀令があつた程に鹽は重要視されてゐた。

故に『汝等は地の鹽なり』との語を聞いた弟子達には、それが、特殊なる道徳的性格を意味するものであることは直ちに理解されたのに相違ない。

しかし、イエスは更に、その眞義を徹底させやうとて、

『鹽もし效力を失はば、何をもてか之に鹽すべき』と、當時使はれてゐた諺を引用し給ふた。

などは今一つの例である。

彼等に於ては、この世の政治が如何に悪からうと、この世の社會組織が如何に誤まつてゐやうとも、それを改革するといふやうなことは『この世』に屬する世俗的なことである。

ただ、さうした悪い世の結果として、貧に惱むとか、病に苦しむとかいふ人のあつた時、それに對して救ひを施せばいいのである。彼等はさういつた態度を取つてゐる。

3、イエスに從ふものは地の鹽である

しかし、イエスは、それとは全く異つた方針を持してゐ給ふた。

その弟子達に向つて『幸福』なるべき性格を指摘し給ふた直後に於て、

『汝等は地の鹽なり』

と仰せ給ふたのである。

鹽は、それが日用缺くべからざる食事の要素であることと、それが腐敗を留める强

2、パリサイ人の流れを出で兼ねるクリスチヤン

パリサイ教から全く分離した筈であるキリスト教徒の中にすら、かうした風は全く影をひそめた譯ではない。

パリサイといふは『他より隔離されたもの』との意味を有するのであつて、キリスト教の中に出で來つた『清教徒（ピユーリタン、純粹のもの）』と共通的な内容を持つてゐる。そして、不思議にも、その共通性といふことは、名稱の上だけのことで無くして、實際の表現にさへもそれは見られるのである。

キリストの途といふものを、人々の間に尊敬され、人々の注目を惹くやうな聖者を作り出すためのものだと考へるやうなこともその一つである。

我々はこの世に於ては只旅人である。だから、例へば、外國を旅行してゐるものが、その國の政治には全く關係しないやうに、この世の進歩だとか、文化だとかいつたやうなことには、我等が心を用ふべきでない。といつたやうな態度の人々があること、

彼等とて、他の人々の利害關係といふやうなことに全く無關心であつたのでない。又他の人々に對してよき感化を與へることを不可とした譯でもない。ただ所謂『地の人（アム・ハ・アーレツ）』と彼等が稱した、かの世俗の人々が、もし道德宗教上の教誡と、感化とを受けやうと思ふならば、彼等は彼等の側から、パリサイの聖者達の膝下に赴かねばならぬ。聖者達が、自ら身を挺して罪人のために計るといふやうなことは思ひもよらぬことであつた。

それとともに、パリサイの人々は、今迄幾たびか試みた政治的術策の失敗に懲りて、最早や、この世を、この世にある政治的、又は社會的手段によつて改革することを全く斷念してゐた。そして彼等は自らを潔くすることに全部の力を用ひた。

この世のことは全く問題外のことであつて、神がそれを滅ぼし給ふ日を待つの外はない。さういつた態度の彼等であつた。

を殊更強く感じる結果、彼等は自分達の行爲、德行そのものを、非常に重大視するやうになる。すなはち彼等は自分が他とは異つた聖者となるといふことに、寧ろ注意を拂ひ過ぎるのである。

その結果として、彼等の優れた人格、善き德行などは、只彼等自身に特別なる價値をつけるだけであつて、それが他の人々に役立つといふやうなことは一向考へないやうになる。

（二）それとともに、彼等の間に起つて來る今一つの傾向は、彼等自身の宗教的理想を、ただ彼等の間だけのことに限り、外なる人生の歸趨には全く無關心となるといつたやうなことである。

イエスの弟子達が屬してゐたパリサイの教徒は、この種の人々であつた。彼等は、自分達の嚴格な宗教的行爲に就て、強い自負を持つてゐた。彼等自身、それが如何ばかりの苦心と努力とに由つて達成されたものであるかを餘りにも良く知つてゐたからである。

六、他のための德

汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき、後は用なし、外に捨てられて人に蹈まるるのみ。汝らは世の光なり、山の上にある町は隱るることなし。また人は燈火をともして升の下におかず、燈臺の上におく。斯て燈火は家にある凡ての物を照すなり。斯のごとく汝らの光を人の前にかゞやかせ。これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり。（マタイ傳第五章十三―十六節）

一、パリサイ人の持つ二つの缺點

小さな宗教信徒の群が、多數の異教徒に圍繞されて生活してゐる時、彼等の間に起つて來る二つの傾向がある。

（一）その一は、自分達の特殊な行爲について、他人が注目をしてゐるといふこと

しかし、メタノイアは神の法則である。神の國、ユダヤ人の一員として彼等が夢寐にも忘れ得ない神の國は、彼等イエスのメタノイアに從ふ輩のものとして、彼等の前に置かれてある。

芽出度いではないか、

イエスはかく仰せられたのである。

つたのである（以上三項、シェパード著『堪忍袋の緒を切らしたる牧師』六一――六四頁より）

8、まことにめでたきキリストの道

國家的變革によつて達成さるると考へられた神の國が、人心の變革によつて來り、神の働き給ふた結果を單に受動的に受け取ればいいのだと考へられた默示思想から、神の助けによれる人格的完成へ、

そして、成文的規律への器械的服從に由るものと考へられた『救』から、イエス御自身との親炙によつて得らるる『福音』へ

それは餘りにも急激なる轉換であつた。餘りにも目覺しいメタノイアであつた。

弟子達の前途には宗教家達よりの迫害が待ち設けてゐる。『傳統』との妥協を爲して、よき評判と、よき地位とを得つゝあつた『僞りの豫言者』の多い中に、絕えず眞理への追求を爲しつゝあつた眞實の豫言者達のやうに、彼等も亦迫害を受けるであらう。

神の手中にありて作り上げられ得るものに對する限り無き樂觀との結合である』とリボンの監督バーロース博士もいつてゐられる。

人が自ら何をすべきかを知り、しかも、殆んどそれを爲すこと能はざる狀態にある時、イエス・キリストの宗教は之に應ずべき力を與へるものである……キリストは人が實行し得ざる忠告を人に與へて、人を嘲笑し給ふが如き方でない、……キリスト教の開祖が、その唇より發せられるものは『善き忠告』に留まつたのでなく、まことに『善き報らせ（福音）』であつたのである。

（三）更に又、キリスト教の有する最大の勢力は、それが全體の力を受くる源なるキリスト自身にある。他の宗教に存在せずしてキリスト教にのみあるものは何であるか、それはイエス・キリストである。……彼は殆んど世界的なる承認によつて孤り高く立ち給ふ。彼の宗教は語の宗教ではなくして行動の宗教である……キリスト教は完成されたるある行爲から始まつたのである。……イエスはその爲し給ふた教訓の標準に達せやうと努力し給ふたのではない。彼が生活し給ふたこと、それ自身が彼の垂訓であ

律を、人類の上に布き及ぼさうとするものでも無い。

キリスト教の開祖は、八福の教訓の中に於て、我等通常人が認めて以て賞讃すべきものなりとする道徳性の所有者こそ、最も幸福な人であると說かれた。

キリストの考へられた良き人、最善の人といふのは、我等が考へるそれと全く同一のものである。

キリスト教が我等の現狀、我等の必要に最もよく應じ得る理由の一は、それが我等自身、かくあれかしと念ずる最高なるものに、我等を押し進めて行かうとするものであるからである。キリスト教が我等に要求するものは、我等が最も自然ならんことである。我等がたゞ、我等の有する最高理想に忠實ならんことである。

(二)それとともに、キリスト教はそれが通常の人に『理想に達する力』を與へ得るか否かに由つて、その眞價を定められるべきものである。もし、イエス・キリストが人の性格を作り得給はないならば、彼は何ものをも作り得給はないのである。

『キリスト教は、無援(神よりの)の狀態にある人に對する徹底的なる悲觀と、人が

かうした、正しきと謬りとの相紛糾した理想の所有者としての國民の中に、イエスの弟子達は育つたのであつた。

7、イエスの達が有する特異點

しかも、イエスが天國（神の國）へ入るべきものの資格として指摘し給ふたものはかうした理想と全く異つてゐた。

（一）キリスト教は、通常の、そして生活苦に押し惱まされてゐる人々をその對象とした。正しく理解されたるキリスト教は、問題を惹起する作用を爲すもので無く、寧ろ、問題の解決をその職分とするものである。

キリスト教は、通常人が有する價値標準と、全然類を異にした道德標準を提供しやうとするもので無い。或は又、道德の問題に關して、一種奇異變妙な考を有する珍稀な神であつて、例へば見世物小屋の藝人がその動物達を取扱ふ時にするやうな、可愛さうな藝當をさせるといつたやうな態度を、その信奉者に對して有するものの道德

かうした神への信仰と愛國心との相錯綜した結果として、ユダヤ人の間に生れ來つたものは、默示思想といはれるところのものである。それに由れば、今あるが如き文化は間もなく破滅して、神自らが支配し給ふ理想的なる國家が形づくられるといふのであつた。この國家こそは乃ち神の國（又は天國）である。かく理想社會は神を中心とせざるべからざるを說いたことに於て、ユダヤ人は偉大なる眞理の發見者であると言ひ得るのである。

しかし、彼等はその中に二つの謬つた思想を織り交ぜてゐた。

（一）彼等がその敵としてゐる國々に對する復讐心と、神に由れるこの理想國家の實現とを混淆し、神の國は敵國の無殘なる敗滅と、ユダヤ人の輝かしい支配とを意味するものとして考へられるやうになつた。

（二）これは神自身の爲し給ふことと考へたことは正しいのであつたが、しかし、それから轉じて、かうした理想國家の實現は、國民の心の變化に由るものであるといふことを考へないでゐた。

に散布され、その自由自主の日に養成された理想を傳へたために、それ等各地に於ける思想發達の上に貢獻したることは極めて著しかつたのであつて、文藝復興（ルネサンス）が彼等の功によることは普く知られてゐる。しかし、さうした國家の解體と共に、彼等の進歩も亦停止してしまつた。

かうしたギリシヤ人と同じやうに、理想的なる人生々活は、理想的なる國家組織を必要とするとの見解を持してゐたのは、ギリシヤと同じやうに小さな國家の所有者であつたユダヤ人であつた。彼等は善又は義といつたことに就て、ギリシヤ人とは聊か異つた見解を持してゐたのであつたが、神を信ずる國民であつた彼等は、神の意志が個人に於て實現されるのは、神の意志が國家に於て實現された上のことであるとの思想確固として拔くべからざるものがあつた。

それとともに、強大な諸帝國の間に介在し、幾度びも被征服者としての艱苦を味ひ來つた彼等は、國の獨立といふことに就て、我等が想像し得る以上に强烈なる熱心を持つてゐた。

てゐるからである。フロレンスの人々は、改革者サヴオナロラに追從した。しかし彼等が、サヴオナロラの欲するものは眞の實行であることを發見した時、彼等は彼を焚殺したのである』とイング僧正はいつてゐる。サヴオナロラがその主と仰いだイエス・キリストに於ても、同じことが曰はれ得ることは記すまでも無い。

しかも、これあるが爲めに、キリストに隨く人々は永遠の生命を享けるのである。

6、ユダヤ人が持つて居た神の國の思想

既に說いたことのあるやうに『義』の觀念が極めて高い發達を遂げたのは古代ギリシヤに於てであり、その點に於て世界がギリシヤに負ふところのものは頗る多いのである。しかし、ギリシヤの民は、その德性を實行せんがためには、必ず城市(ポリス)を有することを必要とした。若し彼がその城市を失ひ、蠻人の中に投げ出さるるといふやうなことがあれば、彼はその道德を實行し得ないものだとさへ考へられてゐた。されば、ギリシヤの諸都市が蠻人の爲めに破壞された時、ギリシヤ人は歐洲の各地

「あなたの室には既に一人のジウが入つて居るからです」と。そして貴婦人の後方なる壁に掛かつた肖像畫を指した。そこにはイエス・キリストが——彼も生粋のユダヤ人であつた——が悲しげにこの光景を見下して居給ふのであつた。

イエスに由る愛といふものが、何か書物や説教壇の上に留まることであるならば、何人も双手を擧げてそれに賛成するのである。しかしそれが日常生活に於て、その職業に於て、その人生理想に於て着々として實行されて行かねばならないとなる時、そして、それは時に社會的な好位置をも、甘い收入をも棒に振らねばならないこととなる時、キリストに由れる愛は著しく不評判となるのである。理想主義だとか、若い人の寢言だとか、實行不可能な夢想だとか、そして進んでは良俗の壞亂者だとか、危險思想だとかいつた所まで進むのである。

「靈的なる理想は、それがこの世に由つて取り入れられる時、その形を變せられずには居らない。この世は極めて狡智である。理想主義と戲れ、理想主義を愛顧するに努める。理想主義が有する刺を抜き去るのには、それが最良の方法であることを知つ

ことは、彼女に取つての大なる悦びであり、又誇りでもあつた。

ところで、彼女の家には毎週支那人の洗濯屋が訪れて來るのであるが、彼女はこの洗濯屋が直接に彼女に口を利くことを許さない。彼女は位高き淑女である。彼は卑しく穢はしき外國人の洗濯屋である。人あつて彼女に彼を「愛せよ」といふものあらば、彼女はその不合理にあきれて大いに怒つたことであらう。しかも彼女の傳道獻金は着々として支那人を天國へ送りつゝある。彼女は天國に入るの日、果して幸福であるのであらうか。——さういつてある皮肉なる雜誌記者は評してゐる。

支那人とともに、アメリカ人に憎惡され排斥さるるものは、ユダヤ人（ジウと蔑稱される）である。

ある時ユダヤ人なる一青年は、ある所用のために、一人の貴婦人を訪れた。彼が許可を得ずしてその應接間に入つたことは、彼女の怒を買はずしては置かなかつた。

「ジウの身として、この室へ入ることは失禮でせう」と彼女はたしなめた。

それに對して青年は昂然としていつた。

に、この心の持主は他より責められるのである。

しかし、既に說いたやうに、この心こそは神の心に統合するものなるが故に、神の支配(天國)は、かうした人々の中に行はれるのである。

5、キリストの愛を理解することの困難

『このガリラヤ人(イエス)は、我等の小さき心に取つて、餘りにも偉大すぎるものであつた』とエチ・ヂ・ウェルズは曰つた。

この世に於て、イエス程の人氣者は無い。

そして、この世に於て、イエスとその靈程に強き迫害を受けるものは無い。

イエスの述べ給ふ『愛』はそれ程に人々を惹き付けるのであり、その同じ『愛』が、それ程に人々から喜ばれないのである。

アメリカのある町に、外國傳道に熱心なる、一人の老婦人があつた。彼女が特に愛顧にした傳道地は支那であつて、支那人のために祈り、支那人のために傳道費を出す

故に、それを意識すると意識せざるとに拘らず、舊きに執着して新らしきを厭ふ態度は、その根本に恐ろしき罪を抱いてゐるのである。

罪より救はれ得る第一歩を、イエスは『悔ひ改め』だといはれた。『悔ひ改め』とは『メタノイア』の譯語である。『メタノイア』とは『心を更へる』といふことである。『改釋』『新らしき心的態度』『新工夫』等の語を以て譯するを適切とするものである。

これは絶えず新らしきを求める心である。『義』に對する新らしき解釋を求め續ける心である。

神の宇宙と人生とが、今あるまでに進歩し來つたのは、『義』と信ずることを勇敢に行つた人々に由るよりも、寧ろ何が義であるかを勇敢に探索した人々の功に由るのである。メタノイアの人々の功に由るのである。

メタノイアの心は、イエス自らの心である。愛と進歩との渾然として成れる完璧の心である。そして、それは、貧しき心、悲しむ心、柔和、義への飢渇、憐憫、清き心平和ならしむる心の凡てを包括したるものである。そして、この心が感ずる『義』の故

『ここは神學者達が、四百年の長きに亘つて討論した處です』といふ。

旅人はそれに答へて、

『そして結局、何の結論に達したのか』と皮肉つたといふ話がある。

これに反して、先年物故したオックスフォードの若い神學者エメットは、まことにキリストの精神に滿ちた潔き心の神學者として、全世界より哀悼されたのであつたが、彼に就てリリー・ドーガル女史の記すところに由れば

『彼は常に、相異なる議論の所持者達の會議に列し、そして甲の所論を乙へ、乙の所論を甲へ理解せしめんがために、絶えず說明の勞を取る仲介役であつた』といふのである。

4、日々に新たなる心の更改

神が我等に求め給ふものに服がはざること、それを罪といふ。

神が我等に求め給ふところのものは『愛』の完成へ向つての絶え間無き進展である。

あつた。ガリレオを引き、ルーテルの場合に照して見るまでも無いほどに、それは明白のことである。

（二）神は愛である。神の進歩は『愛』の完成をその目標とする。故に二つの『義』が相互的に牴觸し來る時、我等の選むべきは『愛』に出れる義であらねばならぬ。

ここに『義』を主張する一人があるとする。そして他の人々と『義』の意義に關して相討論する場合があつたとする。さうした場合に於て、彼は只自己の側に有利なる方面にのみその注意を集中して、他を全く顧みず、相手の論點は只それを否定せんがために聽くといつたやうな有樣であれば、彼はもし事情が許せば、他人の所有物をも敢て奪取するに至るべき筋合の人である。（ストリーター博士編『祈禱に就て』第一五〇頁）

しかし、『愛は寛容にして慈悲あり』（コリント前書十三章四節）。愛あるものは絶えず新らしい光を求める。己れにあるものを變更し行くべき準備を有する。既に獲たるものを固執しない。愛は神より出づる。故に彼は神に從ふものである。

フランスなるソルボーンの寺院を、案内者は誇らしげに旅人に示して行く。そして

かうした結論が、謬つた神觀であるといふことは、今の我等には、明白すぎる程に明白なのであるが、しかも、さうした風な神の見方こそ、まことに正しい見方であると考へる人の跡は全く根絶したとは言ひ得られない。

その結果として、傳統の『義』と、眞實なる『義』との間に鬪爭が釀し出される。そして、かうした場合に於て常に迫害者の側に立つものは『傳統』的のそれである。

この間に立つて、我等は何れの側に我等の采配を揚ぐべきであらうか。如何なる標準を以て、我等の去就を定むべきであらうか？

それを定めるためには、次のやうなことを考へなくてはならない。

(一)神は永遠なる進歩である。神そのものの本質に變化がある譯ではない。しかし人類に關係し來る範圍に於て、卽ちその啓示の方面に於て、神は永遠なる進歩である。故に、神の眞理を明確に把握し得るものは、進歩の流れに自らを投ずる人々であるそして、かうした人々あるに由つて、神の福祉は人類の中に持ち來らされる。發明家達がさうした人々であつた。眞理の發見者、人類社會の革命者達は皆さうした人々で

かつたために、父が用ふる鞭が却つて有用であり、それを用ひなければ、兒童を訓練なき儘に放置するの外無しといつたやうな事情であつた。

ところで、さうした時代に有用であつた教育法が、やがて永久的な眞理にその根據を有するものであると考へらるるやうになり、轉じて、神が人を教育し給ふにも同樣なる方法を取り給ふであらうといつたやうな思想を造り出すやうになつた。

(三)更に又、中世紀の宣教者達が無學文盲な民等にその道を傳へるのに當つては、教へらるるものの自然な理解に任すといふことよりも、何か取り極めた具體的な成文を造つて、それを詰め込むといふことが、さうした種類の民を救ふ上に於て、極めて效果のあるものであつた。ところが、それが、やがて永遠の眞理であるとされ、神は非常に複雜な神學、勤行規則などの制定者だと考へられるやうになり、それに反くものは、神から恐ろしい罰を受けるのだと思はれるやうになつた。

3、限り無き進歩と永遠なる愛が神である

をしたであらう、或は又、犬にも似たる泳ぎ方をしたことであらう。

しかしながら、若し彼が、その犬猿に類した行動が、彼の生命を救ひ得たとの理由から、さうした行動を日常生活の規範とするに至つたならば、彼は人たるの高き位を辭して、四足獸の低きに墮したといふべきである。

このことが不合理であることは、何人にも明白である。それだのにも拘らず、同じことが精神の世界に行はれる時、ことはそれほど簡明には理解されてゐない。

(一)往古に於ては、一種族又は一國民が、その存在を維持せんが爲めには、他のより豐かなる種族又は國民に對して挑戰し、之を征服するの外に途がなかつた。故に往古の民に於ては同胞相協力して戰ひに出づるといふことは、彼が爲し得る最上のことであつた。そこで彼はこれを『義』そのものであると感じ、人生に於ける最高理想は英雄勇士となることであると感ずるに至つた。そして神とは、萬軍の統率者であり、之を導きて、敵軍の敗滅を來らしめ給ふものであると思ふに至つた。

(二)又、古代に於ては、兒童の心理に關する研究が猶未だ充分な發達を遂げてゐな

の人々に與へらるゝ名を豫言者といひ、この人々に與へらるゝ『傳統』の壓力を、我等は『迫害』と呼ぶのである。

然らば『傳統』は、自らそれが傳統であることを意識しつゝ、しかも、それにも拘らず、飽までも、伸び來る生命を壓へやうとするのであらうか。決してさうでは無い。『汝らを殺す者みな自ら神に事ふると思ふとき來らん』(ヨハネ傳十六章二節)とイエスが教へ給ひしやうに、彼等迫害者も亦、自らの行爲を正義に出づるものと考へてゐるのである。

2、迫害者は如何にして生ずるか。

ある特殊なる場合、そして單に過渡的な事情の下に於て、人の生命に有用であつた經驗を、永遠的に至高のものなりとする心、それが、多くの人の心に蟠まる性質である。

泥沼にすべり落ちた人が、そこより己が身を救ひ出す爲めには、或は猿に似たる姿

やうとしたものと餘りに異つてゐる。妥協と、事大主義と、安全第一主義と、日和見主義とが、大なる手を擴げて、彼等の來るを待ち設けてゐるのである。

かくして彼等の中のあるものは、そして多數は、この世が提供して呉れる安樂な收入と、己れに與へられたる社會的地位と、良心を刺激せざる程度に於てその耳に快き、既成のドグマとの中に沒入して、いつの間にか彼等も亦『傳統』の壁を愈々厚くするに貢獻して行く。

五百歲を生きたと傳へられる一比丘が、その倦怠に滿ちた五百年の間に於て、いと面白い經驗として學び得たことは『嫁が姑となり、嫁が姑となり行くこと』であつたといふ傳說がある。

まことに、この世にあつて、最も惱ましきことの一は、若き人の『神に由る不滿』が、何時の間にか、人の世の藻屑を以て滿足せしめられてゐることである。

そして、只惠まれたる少數が、さうした中に於ても、猶眞實を求めて突進し來つたがために、人類には進步があるのであり、人の世には望みがあるのである。この少數

この心は、我等の裡に、極めて幼い時から既にその發芽を持つてゐるものである。與へられたる遊戯場の垣を超えて、知らぬ世を窺き込まうとする心の裡に、既にそれは見えてゐる。

幼兒が少年となり、少年が青年となるにつれて、この心は『若き人の反抗（レボルト・オヴ・ゼ・ユース）』となつて表はれて來る。世界大戰後、世界にみなぎる『青年運動』は、この心の具體化に外ならない。

彼等は、彼等に與へられたる儘なる世相に、堪え難い不滿を感ずるのである。それだけ彼等の裡には純情が充ち、彼等の心には熱情が燃えてゐるのである。

彼等は眞劍である、彼等は寛容である、彼等は如何なる困難をも犯して、人生の最高なるものを摑まうとする。そして限りなき理想主義を以て、その生涯の新しいページを繰る。

しかし、彼等の前には嚴めしい『傳統』がその堅固なる城壁を築き上げてゐるのを彼等は見出すのである。彼等がこの世から要求されるものは、彼等がこの世に提供し

五、日々に新たに

——追害の心理に就て——

幸福なるかな、義のために責められたる者、天國はその人のものなり。我がために人、なんぢらを罵り、また責め、詐はりて各樣の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき（マタイ傳五章十—十二節）

1、神に到らしむる不滿の心

神に由る不滿（ディバイン・ディスコンテント）といふ言葉がある。あるが儘なる我の姿と、あるが儘なるこの世とに慊らずして、より善き我と、より正しき世とを造り上げやうとの希ひに燃ゆる心、それは神より出づるものであり、また神に到るべき途でもある。

おめでたう！

イエスの聲は、眞實に滿ちた響きを以て、彼等の耳朶を擊つたのに相違無い。

の（それが『平和ならしむる者』の直譯である）が神の子なりとされたのは、語呂の上からも亦、自然に感せられる曰ひ方であつた。

弟子達は、既に示した例に於ても明らかであるやうに、いく度びもイエスの本意を誤解した。

しかし、その生涯の凡てを通して明らかに示し給ひしやうに、彼は眞實なる神の子であり、平和の創主であり給ふた。後年使徒パウロが『彼は我らの平和にして己が肉により樣々の誡命の規より成る律法を廢して二つのものを一つとなし、怨なる隔ての中籬を毀ち給へり、これは二つのものを己れに於て一つの新らしき人に造りて平和をなし、十字架によりて怨を滅ぼし、また之によりて二つのものを一つの體となして神と和がしめん爲なり、かつ來りて、遠かりし汝等にも平和を宣べ、近きものにも平和を宣べ給へり』と評してゐる、その貴き使命の爲めに來り給へる彼イエスを、その師と仰ぐ彼等であれば、彼等が望みに望んでゐる神の子たる特權の、その條件たる平和の性を、己がものとすべき機會が目前に來つてゐる。

11、平和の造成者は神の子達である

幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と稱へられん。

ユダヤ人の間に於て『子』といふ語は種々の意味を持つてゐた。イスラエル人といふことを『イスラエルの子』といひ、人類といふことを『人の子』といつた。彼は死ぬべきものなり、と日本語に譯されてゐる語は、彼は『死の子』なりとの原語を持つてゐる。或は智慧は智慧の子に正しとせらるといひ、或は光の子といふ。子といふはその性質を持つたものとの意に用ひられたことは明らかである。

されば、神の子とは、神の性質を有するものをいふ。

神はその本質に於て建設者で在し、平和をその主義とし給ふ。

されば平和の爲めに盡すものは、神の性質に合致するものである。神の子である。

ユダヤ人の間には、神といふ語をその儘用ふるを避け、『天』といふ語をその代用としてゐたが、『天』の外に又『平和』の語を用ふることも多かつた。されば平和を作るも

であつたのである。

しかし、それとともに彼等は又情熱の民であつた。されば政治上の壓迫、特にローマ帝國の好意に由つてユダヤの王となつてゐるヘロデの惡政に對しては、心からなる憤懣を覺え、又ヘロデが異教文化に心醉し、ユダヤ人傳統の宗教を無視する傾向あり又王に追隨する徒の次第に增加し行くを見ては、悲憤その極に達し、幾度びか、革命的手段に出でやうとし、しかも力足らずして失敗を繰り返へしてゐた。この種の人々を『熱心黨』といふ。

熱心黨の人々とその至誠愛國の情に於ては同一でありながら、しかも政治的な革命手段を選ばず、常に教育的な平和手段によつて、その目的を達しやうと努めてゐたのが、パリサイ宗の人々であつた。

されば、そのパリサイ宗の出身である弟子達には、平和ならしむる者、と呼びかけられることが、さまで的外れのことゝは感ぜられなかつた譯である。

潤し、まことの福祉は我等に來るのであると、我等が信ずる所以である。

戰爭が力を示すのでない、平和が力を示すのである。建つるに要する力は破壞に要する力の數倍であるべき筈であるからである。神は最も大なる力である。故に神は平和の神であり給はなくてはならぬ。

10、平和はユダヤ人の間に於ける合言葉であつた。

平和、それは、イエスの弟子達に取つて、親しみ深い語であつた。

ギリシア人に取つて平和(エレーネー)とは、單に戰爭無き場合をいふ消極的のものに過ぎなかつた。しかし、ユダヤ人に於ける平和(シャローム)は、積極的のものであつて、繁榮を意味し、和樂を意味し、健康を意味するものであつたのである。それは彼等の間に於ける挨拶の語に用ひられ、『お早う』といふかはりに彼等は『平和汝等にあれ(シャローム・ヘレケム)』といふを常とする。

されば、彼等の間に於ては、平和こそ人生に於ける最大の祝福であり又最大の理想

古代の人は神を戰爭の神と見た。嵐の中に、洪水の中に、そして地震の中に、彼等は神の力、いな神自らの表現を見た。

しかし、神の聖靈の敎養によりて、更に進みたる開眼を與へられた我等は、破壞の中に神を見ず、却て建設の中に神の姿を見るのである。

人の手に切り荒らされたる山肌に、風雨と戰ひつゝ、しかも猶萠え出づる靑草は、痛める自然を建設し行かんとし給ふ神の御業の表白ではないか。

戰の場に加はりて行く傷跡を、徐々に、しかしながら着々と醫し行く力の中に、我等は神の聖手を感ずるのである。

無智と亂雜とを智能と秩序とへ、そして、打ち壞されたる人格を又も建て行かんとする敎養訓育の業の中に、我等は神の姿を見る。

相分れたる國々の中に、次第に加はり行かんとする相互理解の中に、我等は神の力の活動を見る。

階級鬪爭の痛快なるに由らず、傳道の愚かなるに由つて、神の恩寵は人類の中に浸

喧囂せるものの如何に痛快なる啖呵を切るかを見よ、そして之を引き分けんとするものの、如何に卑下せるものの如きかを見よ。

故に人は戦争論に耳を傾けるのである。そして平和論の不徹底を笑ふのである。

街に暴れ狂ふ狂犬を撲殺するは勇ましい(既に説いたやうに)しかし、研究室に狂犬病の原理を究むるは餘りに間遠いことのやうであり、又狂犬に直面するを怖るるものの申譯的事業であるかにさへ見える。

されば宗教のことに於てさへ、そして基督教會と稱せらるるものの間に於てさへ、時にこの戦争的精神の發露を見る。

昭和二年八月、スイスの國ロザンヌに、相分れて居るキリスト教の諸教派は再び一致すべき可能性を議するとて、一の世界的會議を催した。しかも、その贏ち獲たる成果は、各自が他と相容れざる諸點を更に強調することであつた。そして、それを強調するの甚だしきものが、卽ち己が屬する教派に忠誠であり、從つて(變妙なる論理ではあるが)眞理に忠實なるものとされたのである。

イエスの心に取つて、事は批評を加へるべく餘りに小さきものであつた。爲すべき事の多く、そして、その一つ一つが速かに爲すことを必要とする世に、かばかりの些事に煩はさるべき心の餘裕を彼は持ち合せ給はぬのである。されば、

『遂に相共に他の村に往き給ふ』

（ブルース・バートン著『知られぬ人』五―七頁）

9、平和は建設であり、神の道である。

火を以て燒くは痛快である。しかしそれは何ものをも建設しない。

戰爭論者は何れの日に於ても强い、彼は眞理に忠實なるものの如くに見える。勇氣凛々たるものの如くに見える。しかし、戰爭に由つて戰爭は熄まず、戰爭に由つて何ものも建設されない。それは只破壞であり、浪費である。

しかも平和論程、女々しくあり、實利的であり、怯懦者のことであるらしきものはない。

靜かに着衣をかかげて、歩き出し給ふた。怒りに充ちた彼の弟子達は詮方なげに彼に從つて行く。

彼御自身に於ける失望が、如何ばかり深いものであつたかは想像するに難く無い。彼は弟子達とともに三年の長きを働き給ふたのであつた。しかし彼等は、彼の心に描き給ふ眞實の心を悟り得ないのである。彼に殘されたる日は短い。しかも彼等の、彼の持ち給ふべき日を空しくすることが如何に多いのであつたことか。……彼は人の世を救ふために來り給ふた。しかも彼等は、彼が個人的なる怒を發して、村を燒き拂ひ給はんことを要求する。

日に灼かれた道を彼等はイエスに隨いて行く。彼の沈默は彼等を怖れさせる。また遺り損つたとの感が、彼等の心の底にある。

『遂に相共に他の村に往き給ふ』と聖書は記してゐる（ルカ傳九章五十六節）——そして、それ以上何ものをも記してゐない。

何の討論も無い。何の怨嗟もない、何等無益な會話もない。

「天から火を呼び降して、焼き盡してしまはふではありませんか」

他の者共もこの提議には大賛成であつた。

天火を呼び降す！　それはいい思ひ付きだ。その失禮さがどんなものかを思ひ知らせてやるがいい。我々がそんな待遇を受けるやうな、つまらない人間共で無いことを思ひ知らせてやるがいい。

さあ、先生！　火を……

時として、何も言はないことが、何かを言ふよりも更に強い響きを與へるものだ。議論をするといふことは、自分を相手と同樣の位地に持ち下すものだ。沈默してゐる方が、彼等をして速かに己が愚を悟らしむる方法である。さすれば彼等は己が早計を恥ぢるだらう、そしてこちらが何を考へてゐるかを計り兼ねて恐れるであらう。

イエスはその唇を噛みしめ給ふた。美しい彼の顔にも、積日の勞苦の跡は讀まれたそしてやがて來るべき日の怖ろしい暗雲が、彼の心を重くしてゐる。彼はその夜の休息を心から欲してゐ給ふたのだ。しかし彼は何事をも仰せ給はぬ。

彼等の顔は朱をそゝいでゐる。彼等の聲は怒氣に滿ちてゐる。そして群に近くなるとともにその歩調を早めて來た。そして先を爭つて、この不快な報を告げやうとする。息せき切つて彼等のいふところはかうである。村の人々は彼等を泊めるを拒んだのである。そして外の村へ行つたらと失禮な忠告をしたのである。

使のものの激怒は、直ちに待つてゐた人々にまで傳染した。信じ難いまでに意外な報告でそれがあつたからである。この田舍の小村が、その分際を忘れて、彼等の主イエス・キリストを拒み奉るとは。彼は既に有名な御方であらせられる。病ひあるものを醫し、貧しきものを慰め給ふたことは數へ知られぬ程である。首都に於ては、熱心な群集が彼の後をつけ奉つたではないか、そして、それが爲めには、彼の弟子である彼等自らさへも、可成り重大な人物として、人々から見上げられるやうになつたではないか。しかも、この見るに足らない一寒村が、その宿りを拒むなどとは、

「主よ、赦し難い小村です」

彼等の一人は叫ぶ

しかし、日の老い行くままに、心遣ひの增し行くままに、時々に刻々に人の度量は狹められて行く。

小人は短氣となり、只偉人のみがその心の手綱を外さない。

それは、午後の陽の、漸く更けたる頃であつた、所はガリラヤ。

十二人許りの一群は、既に朝から塵つぽい道を歩き續けて來たので、汗と疲れにへトへトとなつてゐた。されば、やがて通りかかる小山から見下す彼方に一の小村が見え始めた時、それは彼等の心に喜悅を與へるものでなくてはならなかつた。

彼等の長は、既に一日の行程が終るべき時だと認めたので、群の中から二人を撰び出して、宿りを求むべくかの小村へと先發させ、殘りのものは道の傍に一休みして、その報告を待つこととなつた。

やがて、二人のものが歸り來るのが見える。しかし遙か此方から既に認め得らるる程に彼等が昂奮してゐるのに見れば、何事か不快なことがあつたのに相違ないことが認められる。

とを得る。

『我を見る者は、我を遣はし給ひしものを見るなり』（ヨハネ傳十二章四十五節）と仰せ給ひしイエス自らと、彼等は寢食を共にしつゝあるからである。

『彼は罪を犯さず、その口に虚僞なく』（ペテロ前書二章二十二節）とペテロが記したるイエスに親炙して、その清き力の下に、清き心を與へらるる彼等であつたからである。

幸福なるかな！　イエスは決して無意味の語を發し給ふたので無い。

8、天よりの火か、平和の手段か

それは午後の陽のやうやく更けたる頃であつた。

人物の大小を見定めるには、かうした時間に、その人の取る態度を見るが最もいい。

朝の中であれば、心氣は澄んで居り、神經は安靜の姿にある故に、人はその度量を大きく持つことができる。

とは『神を見る』といふことだと註釋してゐた。イスラエルとはユダヤ人の祖先ヤコブに神が與へ給ふた名であるとされてゐる。しかも、その時、ヤコブは神と格闘したのであり、まことに神を見たのである（創世記三十二章二十八節）

そして、弟子達が神へ奉仕の讃美歌として日毎に口にしつつあつた詩篇の一句（三十七篇一節）は

『神はイスラエルに向ひ心の清きものに向ひてまことに惠あり』といつてゐるのであつて、イスラエルと心の清きものとは同意の語として取られてゐるのである。（ヘブル詩に於て對句ある時、後者は前者の說明と解すべきであるとされてゐる）。

ナタナエルは虛僞なき者（心の清き者）なりしが故に、眞のイスラエル（神を見る者）であつたのである。

他の弟子達とて、その種類と程度にこそ差異はありたれ、皆ナタナエルの經驗を己が經驗とした輩であつたのに相異ない。

しかし、今、彼等は、更に眞實な、更に恒常的な意味に於て、神を見る者となるこ

『汝等は我が世を滅ぼす爲めに來りしか、岩窟へ歸れ』と叫んだ。

といふのである。地の人を汚らはしとした彼等が、却つて神の聖旨に適はぬものとなつたことを諷したのである。

今、この山上にイエスの語を聞いた弟子達も、かうした主旨の教訓（この例話は彼等よりも後代に出來たものであるが、その精神は既に存在してゐたと思はれる）に全く無智ではなかつたであらう。

心の清き者！　イエスの口から出たこの語は、彼等の裡に既に醞釀されながら、何等纏まつた形を持ち得なかつた新らしい魂の動きに、ハッキリとした目鼻を與へるものであつた。

彼等の一人にはナタナエルがあつた。

彼がイエスの許に來つた時、イエスは彼を指して（ヨハネ傳一章四十八）

『視よ、これ眞にイスラエル人なり。その裏に虛僞なし』といひ給ふた。

當時ユダヤ人の間に強い感化を有したアレキサンドリアのフィロは『イスラエル』

勝れた學者であり、神祕の宗教家として知られてゐたシメオンは、ローマ帝ハドリアンの諱忌に觸れたので、帝の眼を脫れるために己が一子を携へてある岩窟に隱れたりすると、不思議にも窟間近に水が湧き出で、又カロブ（いたごまめ）の木が生へ出でて彼等の生活を可能ならしめた。

二人は裸になつて砂中に身體を埋め、一日中聖書の研究に從事した。そして晨夜の時だけ衣服を着け、終ればそれを脫いでその獲むのを避けた。

かくすること十二年、天使が彼等に現はれて、ハドリアン帝の死去を報じたので、父と子とは窟を出でて野良の方へ歩いて行つた。

見ると農夫達が、或は耕し、或は種蒔きをしつゝ忙しく働いてゐる。

シメオンはいふ。

『見よ、何んと、この者共は、永遠に關はることを忘れて、この地のことにのみ忙しく働いてゐる』といつた。

すると俄かに天よりの聲があつて、

ても父また母に對ひて、我が負ふ所のものは供物となりたりと言はば、父また母を敬ふに及ばず」と言ふ。斯くその言傳によりて神の言を空しうす。……」

斯くて群衆を呼び寄せて言ひたまふ、

『聽きて悟れ。口に入るものは人を汚さず、されど口より出づるものは、これを汚すなり』（マタイ傳十五章十、十一節）

パリサイ人の清きを重んずるはよし、しかしながら、その清きは外面の清きにあらずして心の清きにあらねばならぬ。イエスはさう說き給ふた。そしてその教へに從ひたりしが故に、弟子達は手を洗はなかつたのである。

7、心の清きものとしてのイエスの弟子達

しかし、パリサイ人とても、心の清きことが、外の清きよりも大切であることを全く知らなかつたのではない。

彼等の間にかうした話が傳へられてゐる。

からな。そして王様――國中第一のものに毎日接觸することに由つて、自分達もだんだん偉くなつて行くのぢや。私は神の像に似せて創られてゐる。神の像である私の身體を清めて置くのは、私の勤行ではないか」

と教へたといふ話がある。

彼の場合は、行爲の中にある教訓にその眞實を置いたものであり、一般に行はれることでは無かつたやうであるが、イエスに關する記事を見ると、當時のパリサイ人は、食事の前に必ず水を以て手を清め、市場に於ける俗人との接觸から來る汚れを清めるのを常としてゐたもののやうである。

彼等は自らそれを行つたのみならず、それを行ひ給はぬイエスを攻撃した。

『なにゆゑ汝の弟子は、古への人の言傳を犯すか、食事のときに手を洗はぬなり』

と彼等はいふ。イエスはそれに答へていひ給ふ。

『何故汝らは、また汝らの言傳によりて神の誡命を犯すか。卽ち神は「父母を敬へ」と言ひ「父また母を詈る者は必ず殺さるべし」と言ひたまへり。然るに汝らは「誰に

つたが、彼等は舊約聖書に定められた『清きこと』の外、更に他の方法さえも加へて、自らの清きを守るに努めてゐた。

パリサイ宗一方の頭領たるヒレルは、或日その弟子達と歩いてゐたが、やがて彼等を去らうとするので、弟子の一人は、

『先生何れへ行かるるか』

と尋ねた。

『教の上の勤行に行くのぢや』

『何の勤行でございます』

『湯屋へ行つて浴みするのぢや』

『それが勤行でございますか』

『さうぢや』と答へたヒレルは更に語をついで、

『王様達の像が劇場や廣場に立つてゐるだらう。そして、その保存のために任命された人々は、それを清め、それを磨くであらう。そのために彼等は生活してゐるのだ

穢れる。

そして穢れより離隔すること、水にて洗ふこと、又は種々なる祭祀的方法に由つて、人はその穢れを取り去られ得るのだと信ぜられてゐた。

かうした『穢れ』の思想は、神が特に『聖なるもの』に在すとの思想より出發したるものであり、それは神を怖るべきものなりとする觀念を含んでゐるのは事實である。

しかし、かやうにして、人生々活そのものが、神と人との交通に直接の交渉を有するものなりと考へ、宗教を單なる觀念の遊戯に墮せしめなかつた邊にユダヤ教の強味はあつた。とはいへ、さうした高い宗教的意義が實際に體得されたのは少數の有識者に留まり、一般民に取つては單なる形式的のこととなり、祭祀的に清まつたものは、その道德性の如何に拘らず、神に屬する民として厚顏無恥なるを得たのであつた。

6、パリサイ人の勤行に用ひられた清め

パリサイ人は、かうした民の中にあつて、その宗教的識見が特に卓越したものであ

彼等にとつて『清き』といふは、穢れなきといつた消極的な意味のものであつた。ある種の『タブー』に觸れることに由つて人は穢されるのであり、その穢れを取り去られない限り、人は神の正當なる民たるべき條件を失ふといふのであつた。

(一)男女の性的關係は人を穢すものであつた。『男もし女と寢て……二人ともに水に身を滌ぐべし、その身は晩まで汚るるなり』(レビ記十五章十八節)といふのである。

(二)出産に由つてその母は汚れる。男兒の場合は四十日、女兒の場合はその倍數の間、彼女は神に屬するものに觸れてはならない。

(三)死者に觸れたる者は、その日の晩まで汚れる。そしてその衣服を洗ひ又身を洗ふことを必要とする。

(四)月經の如き又は癩病の如き所謂『流出』あるものも汚れる。そして癩病の如きに觸れたる者も穢れる。

(五)ある種の動物を喰つたもの、(レビ記十一章申命記十四章に詳しい)及び偶像を拜みたるもの、死者との交通を行ひたるもの、異教の宗教的勤行に從つたものなども

る人なるかな、此の死の體より我を救はん者は誰ぞ』とパウロは叫んでゐる。

生半可は何事に於ても不都合である。しかし、人の靈性に取つては、それは死を來らすべき導因とさへもなるのである。

我等の中なる『第二の我』を殺せ、かくして我等は生き得るのである。第二の我を殺すとは、第一の人、我等の信仰心に極度の熱を加へることである。かくして我等は生きる。生命は神である。されば熱意に由れる清き心の所有者は、神自らを見、神を經驗し得るのである。

5、ユダヤ人は最も清きを貴ぶ民であつた

ユダヤ人であり、そしてパリサイ派の人々であつた弟子達には『清き』といふことは、日常瞻に銘じて忘れ得ない重要な言葉であつた。彼等が神を禮拜し得るのは彼等が『清き』場合だけであることを、彼等はよく承知してゐたからである。

『激發せざる心は、清き心にあらず』（ノー・ハート・イズ・ピュア・ザット・イズ・ナット・パッショネート）（バーリー著『牢獄よりの哲學』一三六頁）といはれてある。人の心には二つの力が働く。一は彼の裡なる理想の力であり、今一つは、冷靜にして計算的なる第二の我である。第一の我は思ひ切つたる慈善的行爲に出でやうとする。第二の我が常に『やり過ぎるな』と言つて我を抱き止める。

澁谷川に一人の幼女が落ちた、崖は一丈の高さである。崖の上には忽ち人集りができた。しかも誰とてこの幼女を救はうとするものがない。ただ十二才の一少年あり、身を投じて彼女を救つた。

岸上に群がつた大人達の心に同情心が無いのではない。救はねばならぬといふ義務の心が無かつたのでもない。只彼等の中に『第二の我』がある。そして『お前がやらなくたつて』とか、『人眼もあるのにこの川の中で濡れるのは』といつたやうなことを言つて彼等を引き留めてゐたのである。

『然らば、善をなさんと欲する我に悪ありとの法を、われ見出せり……噫われ惱め

『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物なり、汝は神のことを思はず、反つて人のことを思ふ』との叱責を受けた程のそゝつかし屋であつた。（マタイ傳十六章を見よ）イエスの最後が押し迫つた前夕の晩餐に、感激の極に達したペテロは

『假令みな汝に就きて躓くとも、我はいつまでも躓かじ』と聲明したが、翌朝鷄鳴かざる前に、三度までもイエスを知らずと強言した。

かくまでに動搖激しい性格の持主を、何故イエスは愛し給ふたか。そして數ある弟子達が、當然の指導者として彼を仰ぐに至つたものであらうか。

それはペテロに於て特に目立つた特質であつた熱意の故である。彼の失敗も、彼の成功も、皆この熱意の故であつた。

『主よ然り、わが汝を愛する事は汝知り給ふ』（ヨハネ傳二十一章十五―十七節）とイエスに向つて聲明した程、自らの心は愛に燃えて居たのである。愛に燃ゆる心の持主なりしが故に、さ程に心の清き者なりしが故に、彼は何人よりも先に、イエスの裡なる神を見ることを得たのである。

心の清いことは、しかしながら、單に穢れ無いといつたやうな消極的なものに留まつてはならない。

磨かれた鋼の純眞さには、やがて曇りのかかるべき日があらう。しかし灼熱された鐵棒には、降りかゝる塵の凡てが焼き清められてしまふ。

積極的なる清き心は、熱心のそれであらねばならぬ。

ペテロは、イエスの弟子中に於ける第一人者であつた。しかし、さうした地位にあつた彼としては、殆んど信じられないまでに、彼の性格は動搖的なものであつた。

『なんぢは、キリスト、活ける神の子なり』といふ、信仰と勇氣との告白を爲して『バルヨナ、シモン、汝は幸福なり。汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり、我また汝に告ぐ汝はペテロ(磐)なり、我この磐の上に我が教會を建てん』との賞辭を與へられた同じ日に、

育を困難とする程に、生命は秘義の多量を包藏してゐる。しかも母は、よしそれが如何に無學のものであつても、いかばかり徹底した無産者であつても、この神秘なる育兒のことを、頑學富豪に勝る手腕と能率とを以て成し遂げて行く。

母の心には何の偏見をも藏せざるが故に、彼は生命の蘊奥に參するを得たのである。

眞理といひ、眞實といひ、實相といふ、それはその究極に於て、神そのものであらねばならぬ。されば、偏見なきもの、心の清きものこそ、眞に神に直參し奉るべき特權の所有者なのである。

偏見なき心は小兒の心である。さればイエスも

『まことに汝らに告ぐ、もし汝ら飜へりて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ、……彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顏を常に見るなり』（マタイ傳十八ノ二―十節）

といはれたのである。

前以て斷定することである、事實を事實として見ず、前以て、その事實に對する、ある決定的態度を取ることである。

偏見を有する時、人は科學的眞理を見出し得ない。アリストテレースの一切の書物を究めても、地球が太陽の周圍を廻るといつた記事は無い故に、地動說は眞理でないといつたローマの僧官達は、著しい偏見の持主であつた。

偏見を有する時、人は人の眞實を捉ふることができない。人をその階級に於て見、人をその職業に於て見ることにのみ慣れて、その階級を脫し、その職業を離れて人を見ることを爲し得ない心の持主には人の有する眞實は解らない。

有名なるアメリカの大說敎家、ヘンリー・ワード・ビーチャーは、その顏を泥塗れにしてゐる新聞賣子を見て、『彼の中に天使の姿がある』といつた。

偏見なきビーチャーの心は、皮相を貫いて、魂の眞核を握み得たのである。

偏見なき心は生命の實相を摑む。

生命を育くむ道は難解である。一切の醫術と金錢とを以てしても、猶且充分なる哺

かくして、怖れを突破して、孤獨にその眞實なる機能を發揮せしむる時、その時、人は『神を見る』のである。

孤り、ホレブの山にその羊を導いて行つたモーセは燃る棘の中に神を見たといふ。死海を見下すテコアの斜地に、牧夫としての孤獨を樂しみつゝあつたアモスに、偉大なる預言者たるべき召命が來た。

曠野に於ける四十日四十夜の孤獨は、イエス自らが、その公生涯を始め給ふに備ふべき、極めて重要なる時期として必要であつたのである。

『汝等靜まりて我の神たるを知れ』

孤獨の中に澄み清まつた心こそは、そして、その心のみが、神を見ることを得るのである。

3、清き心とは赤子の如き心をいふ

『清き心』とは又、偏見なき心をいふ。偏見は乃ち英語のプレヂュディスであつて、

である。神より來れる貴い賜の一つである。

『宗教とは、人が、己れの孤獨に於て爲す行爲である……孤獨を有たざるものは、宗教を持ち得ない』

ハーバード大學哲學教授、ホワイトヘッド博士の、この語は、眞理を穿つたものである。

しかし、神の賜なる歌舞音曲を惡用して、罪を犯すべき機關としてゐるやうに、神より與へられし陶醉の機能にアルコールに由る僞瞞的滿足を與へてゐるやうに、神に直面すべき唯一の機會たる孤獨を、世の人々は或は忌避し、或は他のものを以て紛らはすのである。

『心の清きこと』それは人が、その第一義に立ち歸ることである。一切の野心、一切の慾望、一切の騷擾の中に、嚴肅に『己』を直視し、己が歸趨を深く考察し、玉としてにあらず、政治家としてにあらず、事業家としてにあらず、藝術家としてにあらず、只一個の魂として、獨りとなることである。

を投ずるものが多いといふ。

近代都市の生活に於て、女中難が重大な問題となつてゐるといふやうなことも、單に女子の職業的機會が增加したとか、彼等の見識が高まつたとかいふことの外に、アパートメントなどの獨室に、商人達の聲さへも聞かずして暮す寂寥に、年若い女子達が堪え兼ねる爲めだといはれてゐる。

墓場を占むる餘りにも烈しい淋しさの故に、遂に自殺を遂げた墓守がある。いな、墓守だけではない。雜踏した街衢の中に、華やかな社交界の裡に、相許すべき魂を持たぬ寂寥から、幾多の男女は自殺の途へ走る。自殺の途へ走らないまでも、無目的な事業熱の中に狂奔して、ただ、ひたすらに自らを忘れやうとし、生きながらに自殺を遂げつゝあるものの數が多い。

2、孤獨の感は神に見ゆる第一步

かくまでに人々が恐怖する『孤獨』は、しかしながら、その本源を神に發するもの

四、神に見ゆる神の子達

——いはゆる「八つの幸福」について(三)——

幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。
幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。
（マタイ傳五章八、九節）

1、孤獨に對する恐れは何人にもある

人は孤獨を怖れる。

都會地に繁榮する所謂狹斜の巷へ向つて、恰も昆虫が灯に飛び入るやうに若人たちがその身を投じて行くのも、特に都會地が與ふる孤獨の感と、その怖ろしさから免れやうとする焦慮の結果である。

歐米諸國に於ても、同じ理由によつて、その結婚を急ぎ、より恐ろしい地獄へ自ら

相愛すべし。』（ヨハネ第一書四ノ七―十）

神を取り入れたる立體的人生、そこに永遠の生命はあり、まことに幸福なるべき人の世の生活がある。

人生といひ、生活といひ、生命といふ。それは英語が『ライフ』なる一語を以て總括してゐるやうに、その本質に於て相同じいものである。

そしてこの『ライフ』こそ、キリスト世に來り給ひしことによつて、その全面目を人類の中に發揮し得るのである。さればこそ、彼は、凡て彼に從ふものの先達なる弟子達に

おめでたう！

を發し給ふたのであつた。

生命の源は神にある。そして神はヘセドである。

眼を回らして天地宇宙を見よ、神は限りなき『與ふる者』ではないか。

そして、クリスチヤンの信ずるところに由れば

神は『その獨子を與へ給ふ程に』世を愛し給ふものである。

生命を得んとするものは、神の性質に則らなくてはならぬ。故に、眞實なる人たらんとし、又眞實なる社會と人生とを望むものは、『ヘセド』の所有者とならなくてはならぬ。

愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は神より生れ、神を知るなり。愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。

神の愛、われらに顯れたり。神はその生み給へる獨子を世に遣はし、我等をして、彼によりて、生命を得しめ給ふに因る。愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣はして我らの罪のために、宥めの供物をなし給ひしこれなり。愛する者よ、斯のごとく、神われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに

しかし、私がこの夕、この事務室を訪れた時、銀行の門は既に閉められてゐた。事務員も給仕も、エレヴエーターの掛りさへも退去して、只夜番の男だけがゐた。

いや夜番だけでない、夜番とともに重役の數人がゐた。重役室には、何時の時間になつても燈がついてゐる。それが重役の責任であり、それが重役の成功の秘訣である。

8、生命の源は神、神に從ふは生命の道

既にいつたやうに『憐憫』とは團體的精神のことである。自分自身のことのみを計らず、他人との共同事業に潜心することである。自ら最大の努力をするとともに他に寛容なることである。

しかも、かかる精神を持つことは、自らが『憐憫』を受けることである。

『受くるよりも與ふるは幸なり』『己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎むせのは之を保ちて永遠の生命に至るべし』

とイエスは教へられた。

私共は、私共の責任だけは充分果してゐたのに相違ない。汽車の到着前に起床し、服装を整へ、十時少し前に汽車が停車場に入るや、直ちに事務に着手し得るやうになつてゐた。

しかもこの人、何等格別に責任のない人が、私共よりも、更に更に多くを爲してゐたのである。

私は、やがて開さうな朝の食卓についた時

『あれだから偉い。あすこにヒユース氏の眞面目がある』と考へた。

私は、午後六時以後にモルガン（世界一の金融會社）商會の事務室へ行つたことが度々ある。

私は、かうした大銀行の光景を自ら心に描いたことがある。重役達は十一時頃、特製の自動車で乘りつけ、そして何萬ドルといつた交渉に一寸した印を押しただけで三時頃には歸つてしまふ。さういつた畫を描いてゐた。

は同行三人、汽車がニューヨークへ着くのは午前九時三十分なので、その間の閑な樂しい朝をしみじみ味はつて置きたいと考へてゐた。

寢臺車から出たのが八時十五分、髭を剃つて、着物を着て、そして起床後三十分、私共は食堂車の方へ足を運んだ。

途中にある貸切車の扉が半ば開いてゐたので、見るともなしに、その中を見た。室内の寢床は既にその主が數時間前に、それを出でたことを示してキチンと片付いてゐる。窓際には一個の卓が置かれてあり、そのテーブルに向つて、今や自分の仕事に沒頭してゐる一人の人を見出した。それは新聞の挿圖によつて既に私共に親しい顔となつてゐる人であつた。

彼は曾てニューヨーク州知事であり大審院長であり、又大統領の候補者であつた。そして當時は辯護士としてその年收は十萬ドルを下らないといはれてゐた。

私共の一行は若い者ばかり、彼は中年を超してゐた。我等は貧しい無名の者共、彼は富み且有名であつた。

ではない。しかし、それは第一の問題ではなかつた。

我々の目的はアメリカ中の何れの家族でも一臺は持つことの出來るやうな安價な自働車を造り出すことにあつた。

そして、その爲めに、我々は朝も午も夜も働いた。遂には身體中の筋肉が疲れ切り、神經などは全く衰弱し切つてしまつて、自働車と云ふ名を聞くさへ氣分が悪いやうな狀態になつてゐた。

ある夜のこと、殆んどやり切れなくなつた時、自分は働いてゐる者共にいつた、

『しかし、安心し給へ。我々程の目に會はない奴は、この事業を我々から奪ふことができないのだと思へば、まあ、あきらめられる』と、

そして、今日まで、誰もそれだけの苦勞をしやうといふものが、我々以外に無い譯だ。』

私は（バートン氏）シカゴからニューヨークに向けて最大特急に乘つてゐた。私共

分達の仲間で、さうしたことを問題にした人は一人も無い。

我々の目の前には會社の事業を世界的にするといふ幻があつた。その會社を世界に於ける最上の、最も有用な保險會社にしやうといふ志だけがあつた。そして我々はその志を遂げた。そして我々は自らが富めるものとなつた。』

世界一の自働車王、ヘンリー・フオードの談話、

『金を儲けやうとて人生をあくせくする人物は、大した金儲をしないものだ。勿論一寸した金儲けはする。何萬とか何十萬とかいつた位のことは。しかし、そんな連中は決して大資産を築き上げるものでない。

しかし若し、何かより善いものを造り上げ、より廉く賣り捌かうと決心し、その爲めに全努力を拂ふ人があれば、その人は金の中に埋まつてしまふであらう。

我々が始めてフオード自働車を造り上げた時、我々の心の中にあつたものは金ではない。勿論成功すれば、それが利益になるといふことが、我々の頭の中に無かつたの

家の搾取を指摘して、抗爭を最もよき手段なりといふ。教師信ずべからずとして學生は怠業し、學生努めずとして教師不熱心となる。社會生活に於ける誠實の缺乏は、何人も悲歎することにてありながら、何人も之を如何とも爲し得ない。

しかし、アメリカに聞えた有數の雜誌記者、ブルース・バートン氏が語るところを聞いて見よ。

かうした困難から脫け出づべき道は自ら明らかにならう。

モルガン會社の重役として、その成功を謳はれてゐるパーキンス氏の談話、

『若い人達が自分のところへ來て、よい地位や、高給のために世話をして呉れと賴むのに自分はあきれてゐる。

かうした態度は、彼等が、成功の第一條件を理解してゐないことを示す。

自分は隨分長い間ニューヨーク生命保險會社に勤めてゐたが、その間に自分の給料や自分の待遇が如何かといふことを問ふて見たことは無い。あの會社を造り上げた自

『義に飢ゑ渇く』といふことが『心の貧しき』といふことを更に強くしたものであつたやうに『憐憫ある』とは『柔和なる』ことの更に深く進みたるものである。

それは豫言者ホセアに由つて特に強調されたるものであつて、神自らの性質が『ヘセド』であり給ふのである。罪ある民を飽までも愛し、己れに逆らふものを飽までも赦し、彼等を救はんが爲めに自ら苦難を敢てし給ふ、それがホセアの神であり、その神は自らヘセドを有し給ふのみでなく、民の中にもヘセドあらんことを望み給ふたのである。

『イスラエルの子孫よエホバの言を聽け、エホバこの地に住める者と爭辨給ふ、そはこの地には誠實なく愛情（ヘセド）なく、神を知る事なければなり』（ホセア書四ノ一）

7、人生に於て成功する最高の途としてのあはれみ

資本家は勞働者信ずべからざるが故に之を壓迫するの外なしといひ、勞働者は資本

『憐憫』と譯された語は、『義』が有する、かうした方面を代表するのである。『憐憫（エレオス）』といふは舊約聖書にて『ヘセド』といふ。そしてこの『ヘセド』こそ、舊約宗教の思想中にあつて最も爆破的なものであり、革命的なものであり、そして内容豊富なものである。

それは優者が劣者に對して有するものでもあり、同時に劣者が優者に對して有するものでもある。しかし、特に同等者が相互間に於て有する協同的精神、團體的精神である。

それは單なる感情ではない。そして感情から出でたる行動だけでもない。それは靈魂が有する本質的な性格であつて、これを有するものの本性に根深く植ゑつけられた靈的なる勢力である。

それは、特にあはれと思召して、他に情をかけるといつたやうなもので無く、對手の人格的價値を何處までも認識し、そして、その認識に立脚して相互的に心からなる信頼と親愛とを感ずるものである。

神の義が、努力に由つて爲さるる德行ではなくして、それ無くしては心足らはぬ熱望となつたのである。イエスに從ふことによつて、彼等は、飢ゑ渴く如くに義を慕ふものとなつた。そして、その熱望が滿さるべきものであることも、彼等は既にイエスとの交友に於て經驗してゐる。

幸福なるかな！

イエスのその言葉を聞いた彼等には、それを自分達のものとして受取るべき心の準備は既に充分具はつてゐたのである。

6、あはれみといふことの社會的意義

ユダヤ人に於ける『義』が、アリストテレースのそれより更に進展して、神をその因子として取り入れたといふことは、アリストテレースの强調した、社會的方面を無視することでなかつたのはいふまでも無い。いな神を取り入れることに由つて、人に對する愛の責任は、愈々その重大さを加へるのである。

相違ないが、しかし、そのために飢ゑ渇いてゐたのでない。否實際に於て、彼等は宗教上に於て『フェド・アップ』の狀態にあつたのであつて、そこに彼等の危險があり、イエスの攻撃が、主として彼等に向けられた理由があつた。

彼等は、何故にさうした失策に陷つたのであらうか。

それは彼等が、律法といふが如き法則を嚴守し、宗教とは、有心者に對する傾倒（デヴオーション）であることを忘れた點に在する。

『義』が法則となれば、それは人を拘束するものとなる。しかし、それが有心者相互の間に於ける『義』となれば、それは愛となる。かくして『義』とは、愛そのものなる神と有心的に一致結合することとなるのである。

イエスは自らを神の子とすることにより、神と人との有心的接觸を可能ならしめ給ふた。イエスの弟子達は彼に從ひ奉ることに由つて、既に全く新らしい宗教經驗をしてゐる。それはイエスと交はらんとし、それによつて神と交通せんとする、心よりの熱望が彼等に湧き來つたことである。

は眞實の心と、隣人に對する愛であることが强調された。

5、法制に對する義と人格に對する義

しかるに、何時の間にか、この愛と眞實といふことも、それは神に對する一の義務であるとの理由によつて、一種外面的なものとして行はれるやうになつた。その結果は『義』を、飢ゑ渇く如くに慕ふといつたやうな感激性無く、單に積み上げる德性と見るといつた樣な態度で、宗教上の勤行が守られてゐた。それがパリサイといはるるユダヤ教中の熱心派であつた。

今、イエスの前に、この語を聞いてゐる弟子達は、大抵パリサイ派の感化を受けて育つた人々であつた。彼等は神に忠實であつた。神の律法として聖書に記されたもの、又その聖書の解釋だとて、教師達が教へて與れるものを嚴重に守つてゐた。彼等はそれを『善きもの』と信じたりしが故に之を行つてゐたのであつて、それを欲したりしが故ではなかつた。卽ち甘き砂糖をよきものなりとの理由を以て嘗めつゝあつたのに

「義は、實際完全なる德性である。しかしながら、それは單一的なものではなく、却つて各自の隣人に對して行使さるべきものである。」（倫理學五ノ二）

と彼はいつてゐる。

しかし、ユダヤ人達の思想は、更に進んだものであつて、それは立體的のものであるといふことができる。即ち個人のみならず、また社會關係に留まらず、神をも包含してゐる。それは前二者の思想をすべて包攝するだけでなく、その神觀の發達とともに無限にその範圍を擴大し行く可能性を持つたものであつた。

しかし、發達の力を持つてゐるといふことは、それが充分發達しない時代をも持つてゐたといふことを示す。

ユダヤ人に取つて「義」（ツエデク）は神に對することではあつたが、しかも、その最初に於ては、神に對して犧牲を捧げるとか、祭禮をするとかいつたやうな、何かの行事によつて達成されるものと考へられてゐた。

しかし、崇高なる豫言者達が彼等の間に出づるに及んで、神が求め給ふものなる「義」

4、「義」といふことの意義には變遷があつた

ギリシヤ人に取つて「義（デイカオスネー）」といふのは、もともと宗教的意味を含まず、ただ人間の間にのみ關係したものであつた。

プラトーに於ける「善」は、個々人自らに關するものであつて、之は直線的だと言ひ得る。

「義」とは……人が自らの働きに對して爲す外部的なる行爲に關はるものにあらずして、彼の内的行爲にして、彼自身、及び彼自身の利害に關係あるものに關はり、以て彼の内に存する各種の成素を適實に統一し、謙抑にして調整ある人たらしむるにある」（理想國四四三）と彼はいつてゐる。

更にアリストテレースに至つては、「義」は平面的に解釋されてゐるのであつて、それは單に個々人各自に存在するだけで無く、他の人に對しても行使さるべきものとなつてゐる。

彼は『人』である。それでいいのである。しかし、彼を『人』といふならば、彼以外の人には今少しく異つた稱呼を用ひねばならぬ。イエスを直視した人は必ずさうした結論に達するのである。

しかし、この『人』なるイエスが又神であつて、靈として我等の裡に宿り得るとしたならば、それは我等の慾望に對して限り無き滿足を與へるもので無くてはならぬ。そしてクリスチヤンとは、イエスが、かくして人の心の裡に住み給ふを信じ、且之を經驗したるものをいふのである。

イエス來りしことによつて、この世に於ける最大の創造は可能となつた。最も激しい創造慾は滿足を與へらるべき機會を持つ、そして創造者のみに許さるる眞實の幸福が、イエスの徒に與へられる。

『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢ゑず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなからん』（ヨハネ傳六ノ三十五）とは永遠の眞理である。

の裡なる眞率なる創造慾は、イエスにその逃げ口を見出さない限り、人自らの内に蝕ばんで、遂にその生命をも絶つてしまう。

イエスが神である、といふほ餘りに獨斷的であつて、直ちに受け納れることのできない命題だといふのか、それならばそれでいい。

イエスを『人』として直視して貰へばいいのである。彼を直視し、彼に觸れ、彼を經驗するまでは、彼が神であるとか、人であるとかいふことは、單なる水掛け論に終るべき事柄だからである。

イエスを直視する時、必ず起り來る經驗が二つある。

(一)彼が眞實なる理想人であることである。若し世の人がイエスの如き性格の所有者であるとき、世は如何に幸福であらうかとの考へが起る、そして、自らも亦、かくの如き人たらんとする慾望が勃然として起つて來る。

(二)しかし、それとともに、直ちに起り來る經驗は、この世の人々とても、又我自らとても、如何に奮勵努力したりとて、彼の如き性格の所有者たり得ざることである。

似たる性格を得んとて、飢渇に似たる熱意を有つものの意である。『心の貧しき者』といはれたりしものの、更に熱烈化されし姿である。

3、飢渇に對する生命としてのイエス・キリスト

かうした慾求に對して、イエス自らが與へられたのである。

イエス無くして、人生は何の目的を有するのか分らない。

人類の一切の活動と社會生活と、それは一體何のためであるのか。

火花のやうに、ある人々の中に燃え上つて來る創作慾、それは一體何に向つて進むのか。

『神』が最高の人格（有心者）であることは分つてゐる。しかし、それは如何にして我々に連絡して來るのか、『神』と『人』と、それは餘りにも甚だしい差別の證跡ではないか、餘りにも遠い隔離の表現ではないか。

神にして人、人にして神なりしキリスト・イエスなくして人生は不可解である。人

それに達するまでの中間的標柱となつてゐる。

よき發動機の創造は、よき飛行機のためであり、よき飛行術の創造は人類の間に於ける交通の發達に資するものであるといつたやうに、一つものは更に他のものを援けてゐる。

かうした階段を通つて行く時、最後に到達する最大創造は、よき人心の創造、理想的人類の創造といふことであらねばならぬ。

ところで、創造の第一歩は、創造慾の發動である。創造慾の發動は、より高き理想との接觸によつて與へらる。よき人格への創造慾は、よりよき人格への渇仰に由つて動く、よりよき人格——最高の人格は『神』の外にはない。されば、神を求むる心に由つてのみ、最大なる創造が爲される。

神を仰ぎ、神に適はしきものとなり、神と人との間に常住不斷の生命的交通の存する狀態を示すに、聖書は『義』といふ語を用ひる。

從つて『義に飢え渇く者』とは最大なる創造慾に驅らるるものとの意である。神に

幸福といふのは、例へば汗のやうなものであつて、人が營むある種の活動の隨伴物——一種の餘澤である。汗は運動によつて人に與へられる、幸福は創造を行ふことによつて得られる、創造なくして幸福を獲やうとするは、恰も發汗劑を服んで汗を出さうとするが如きものであつて、それは身體に病氣のある場合であるか、さうでなかつたら、その身體を傷ふべき場合である。

2、最も大なる創造はよき人格を作ること

創造といふことには、種々な方面がある。物質的なものがあり、精神的なものがある。その何れであつても、それに力を傾けつゝあるものに、必ず豐かな幸福感が與へられる。

しかし、凡ての創造に對して、それが果して如何なる意義と職分を有するかを檢討して見れば、それは、アリストテレースがいつたやうに、ある一つの最大創造（アリストテレースは最大目的といつた）を目標としてゐるものである。そして他のものは、

けて見るがいい。享樂と贅澤とに、憂き身をやつして見るがいい。そこには限り無い『物憂さ』があるであらう。フランス人はそれを『アヌイ』といひ、英米人はそれを『ボア』といひ、世界大戰中に於ける聯合軍の兵士達は、それを『フェド・アップ』だといつた。

『フェド・アップ』といふは、羊羹に、砂糖をかけて喰ふ感じである。砂糖が惡いのではない。甘くないのではない。ただ、羊羹にそれを掛けるとなつては、これを喰ふものが辟易せずにはゐられないのである。幾日も幾日も戰爭らしい戰爭はなく、戰線の後で、毎日オイチニと廻れ右とをやらされてゐる時、兵士達は『フェド・アップ』の感を起さずにはゐられなかつたのである、しかも、兵士達の間に、この『フェド・アップ』が起つたが最後、如何なる名士官も、これを率ひて勝利の戰を戰ふことはできなかつた。

凡てが無目的であつて、只『幸福』さへ得ればいいといつたやうな生活態度には、如何ばかり多額の價が拂はれたからとて、『幸福』の側から御免を蒙つてしまふ。

三、人生を立體として

——いはゆる八つの幸福について(二)——

幸福なるかな、義に飢え渇く者。その人は飽くことを得ん。
幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。(マタイ傳五章六、七節)

1、きことの幸福は創り出すことに因つて得られる

眞實に幸福な人は、創造を行つてゐる人である。創造あるところ必ず幸福あり、創造なきところ、如何なる方法を以てしても幸福は有り得ない。

一つの蒔繪箱を作るために十年の歳月を費し、それがためには、貧窮のドン底につき落されても、その塗師は幸福である。彼は大地を踏みしめて立つた眞人である。創り出すことをせず。只消費に由つて幸福を獲得しやうと努めるものには、ただ幸福の眞似事のみが與へられる。美しい邸宅に住んで見るがいい。價高い衣服を身につ

そして己が裡なる靈の衝動が指ざす儘にイエスに從ひ來つたのである。

そして今彼等は、すさまじい語を聞いた。イエスに從ふ『柔和なる』彼等こそ、かの約束の全地を嗣ぐものであるといふのである。

彼等には驚愕に價する語であつたであらう。

しかし、二千年を隔てた我等には、それは餘りにも眞實な語であつた。

帝國は滅び、偶像は破壞されつゝある世に、キリストの國のみは世界の隅にまでも今擴がりつゝあるからである。

キ一ノ十一）と神仰せ給ふのであり、しかもユダヤ人は特に恵まれたる神の民だといふのであつた。

かうした信仰を持つたユダヤ人の前には、しかし、餘りにも毒だしい幻滅があつた。國は失はれ、民は他國の支配下にある。神が古への父祖達に與へ給ふた約束は今何處へ行つたのであらうか。

さうした心の持主達が、今イエスの弟子として、その御言を聞いてゐるのである。彼等は、イエスに先だちて、その道備へをしたヨハネの語を忘れたのではない。『汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言はんと思ふな。我なんぢらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり……凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし』（マタイ傳三ノ九――十）と彼は教へた。過去が如何といふのでない、將來が凡ての價値を定めるのである。それがヨハネの主張であつた。

『悔改めねばならぬ』――心の態度を換えねばならぬ。それを弟子達は知つてゐた。

世にキリストの徒滿つることによつて、人類はまことに永遠の存在者たるを得るに到るのである。

『地を嗣ぐもの』それは彼等の外にはない。

11、地を嗣ぐものとしてのクリスチヤン

ユダヤ人に取つて、最も貴い遺産として感せられたものは、その先祖アブラハムが神より與へられた約束であつた。それはエヂプトの河ナイルより、メソポタミヤなるユフラテ河まで、ユダヤ人に與へらるべしといふのであつた（創世記十五ノ十八）。後の詩人達もこのことを歌つて

『その政治（まつりごと）は海より海にいたり、河より地のはてにおよぶべし』（詩篇七十二ノ八）

といつたのであつたが、ユダヤ人の世界的智識が漸くその限界を擴め行くとともに、彼等は、彼等の承け繼ぐべき國は全世界全地であると考ふるに至つたのである。

『日の出づるところより、日の入るところまでの國々の中に我名は大ならん』（マラ

『王侯に對するも王侯を恐れず。乞食に對するも、乞食彼を憚らざるもの』であらねばならぬ。そして、この資格こそ乃ち『柔和なるもの』の特質なのである。

イエスは父なる神の御許に歸り給ふべき日の愈々近づき、

『父が萬物をおのが手にゆだね給ひしことと、己の神より出でて神に到ることを知り』給ふたその時、

『夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手布をとりて腰にまとひ、ついで盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏ひたる手布にて之を拭ひはじめ給ふ』(ヨハネ傳十三ノ三―五)たのである。

これはことさらに爲されたる演出ではない。眞情の流露より爲されたる愛の行ひである。

されば彼自ら仰せられたやうに、彼こそ『柔和にして心卑き』(マタイ傳十一ノ二九)方でおはしたのであり、彼に從ふものは靈魂に息みを得るのである。

キリスト教は愛と赦しの宗教であり、キリスト教徒とは『柔和なるもの』である。

善き分子が、その愛と奉仕とを以て悪しき分子を感化することに由つて、そして、その方法に由つてのみ、人類の救ひは可能なのである。

風が威を逞ましくすれば、旅人は愈々その上衣を固持したが、太陽の温さが肌はつた時、その旅人は自然にその上衣を脱いだといふ童話のやうに、人々が着た罪の衣は、強き壓迫と強制とに由つて之を除かうとすれば、それは、愈々困難となるのであるが、愛と温さとは、如何なる頑強の心をも遂には溶かし終るのである。

『柔和なるもの』と譯されたる語は極めて内容豊富なものであつて『親しみ易い』とか『近づき易い』とかいふ意味があり、更に又『氣取らない』とか『寛容である』とか、そして又『忍耐深い執拗性』とか『甘味なる合理性』とかいつた意味をも含んでゐる。

之を要するに、日本語の『變寵』と『あまのじやく』との極端なる反對だと思へばいいのである。

英語にいふ眞實なる紳士（ゼントルマン）とは

(二)次に與へられたる方法は優生學的手段である。優良者と優良者との結婚を強調し、遺傳的方法によつて人類を優良化しやうといふのである。

しかし、優生學が如何に好望であるからとて、不良分子と不良分子との結婚を禁制する譯には行くまい。さうすれば、優良分子が益々優良となるに伴れて、不良分子は愈々その不良さを增大するであらう。從つてそこには、貧富、家系の階級闘爭の外に、血統的階級闘爭が釀成されることとなり、人類の不幸は更に增大するであらう。されば撲滅の手段も、優生的方法も、ともに所謂『狂犬を殺す』の類であつて、根本的なる方法ではない。

10、柔和なる者に與へられる勝利

イザヤに示された奉仕の方法は火を以て表徵されてゐた。內より膨らする火を以て現はされてゐた。まことに人類を救ふものは溫さであらねばならぬ。燒き盡す炎ではなくして、爐より取りたる熱灰であらねばならぬ。

る。

されば、罪より救はれるといふことは、人類が眞實に生き得るといふことを意味してゐる。

人類が活くる方途としては種々なるものが考へ得られるのであるが、その中に於て、誰もが第一に氣付くことは、自然界に對して優越することである。科學の進歩が人類にこのことを成さしめるであらう。

しかし、それよりも更に大切なことは、人類そのものの中にある劣等性を除去することである。人類社會の中から惡分子を取り去ることである。

人類の中から惡分子を去るにも亦二種の方法がある。

（一）　暴壓的手段を用ひて劣等分子を撲滅することである。

しかし、この手段は、所謂優良分子をして、その優良分子たる資格を失はしめることである。他を撲滅するに勝つた罪惡行爲は餘り見られないからである。かくして、不良分子の除去を目的としてなさるることが、却つて不良分子の醸成となるのである。

或はギリシヤ風なる商舗の多い街路に、盛んなる『モダーン』風を吹かせつゝあつたのであれば、神を思ひ、民を思ふ彼等弟子達は、まことに『悲しむ者』たらざるを得なかつたのであつた。

しかし、イエス來り給ひしことに由つて、彼の福音が勝利を得ることに由つて、嘗て俘囚の人々に與へられた『慰めよ』の言葉は彼等のものとして與へられるのである。彼等はやがて、彼等を悲しましめつゝある人々が、心よりの悔改めを爲し、新らしき人となる樣を見ることができる。

めでたいではないか。

イエスはかく仰せ給ふたのである。

9、人類の救ひとは人類を生かすこと

罪とは、人類生命の完成を阻害するものをいふ。殺人、姦淫などが罪だとされるのは、結局それが人類をしてその全き發展を遂ぐるを得ざらしむるものであるからであ

ために、最も甚だしい損害を受けたるものは、國中に於ける下層者であつた。そして、何處に於ても同じやうに、信仰篤き人々が、却つて社會の下積みとなつてゐたのであつた。

かうした下積みの人々は、この怖ろしい戰塵が、兎にも角にも收まつた時に於てすら、猶且その苦惱から脫することを得なかつたのであつた。

平和が來るとともに、上流者、富者達は己が貪慾を恣にし、下層の人々を壓迫するを常としたのである。

かやうにして、ユダヤ人の中にあつて、神に忠誠であり、德に忠實である人々は、國民として『悲しむ者』であるとともに、その國民の中に於ける特殊なる『悲しむ者』であつた。

イエスの弟子達は、さうした人々の血と家統とを受けついだ人々である。特に彼等の生地なるガリラヤは、ギリシヤ風の弊風滔々として襲ひ來り、ユダヤ人にして、富を有ち、若さを持てる人々は、相爭ひて祖先の途を離れ、或は遊戲場に、或は劇場に、

エピファネースの下に悲慘なる壓迫を加へられ、受難の歷史はここに反覆されたのであつた。しかも之に奮起して立つたマカビースの一族は遂にユダヤの獨立を完成したのである。しかし、次で來つたローマのために、その獨立さへも奪はれ、ここに異邦人イドメヤ人なるヘロデが、ローマの治下に、彼等の王として君臨することとなつた。

8、民の中なる悲しむもの

まことに彼等のやうに受難の中にその歷史を編んだ國民は、他にその類例を見出し得ないのである。

次第に轉換する大帝國の下に、昨日は源氏、今日は平家と、その治者を換え行くを餘儀なくされた外に、パレスチナの民は、絶えざる戰亂に惱まされたのであつた。

パレスチナは、南に大帝國なるエヂプトを控へ、北にメソポタミヤ地方に興起するアッシリヤ以下の大國を持つてゐたために、絶えずこの兩者の間に於ける兵燹の巷と化し、己れに關係なき戰のために、いくたびか蹂躙されたのであつた。そして、その

呼ばるる悲しい日が彼等の上に來つたのであつた。

これは彼等の歷史に於て最も悲痛なる一頁であつたが、その思想史に於ては却つて最も貴重なる時期であつた。彼等は『俘囚』が何の結果であるかをつぶさに學び知つたのである。ここに單なる國民的宗教であつた彼等の信仰は廣い世界觀の上に立つこととなり、神殿の中に於てのみ拜せらるべしと考へてゐた神が、實は靈なる神であつて、人の靈魂奥深く潛在する純情を以て拜すべきであることを悟つたのであつた。

そして、紀元前五三八年、ペルシヤ王クロスが、バビロンを滅ぼして世界の盟主となるや、その國策も一變し、ここに豫言者の聲として、

『なんぢらの神いひたまはく、なぐさめよ、なぐさめよ。懇にエルサレムに語り、之によばはり告よ、その服役の期すでに終り、その咎すでに赦されたり』との叫びが放たれ、やがて故國への歸還が始まつた。

そしてエルサレムは再興され、神殿は再建され、祭司の制度は次第に整ひ來つたのではあるが、やがてペルシヤに代つてギリシヤの治世來るに及び、暴王アンテオカス・

その國民史の發祥は、エヂプトの國に於ける苦難であつた。奴隷としての辱かしめ、堪え難いまでの誅求、それが漸くモーセの手に由つて救ひ出され、兎にも角にも國民らしい形をなしてアラビヤの曠野に彷徨すること四十年、やがてパレスチナの沃野を求めて侵入したのではあつたが、そこには先住の民にして、文化の度遙かに進めるカナン人あり、ペリシテ人あり、そこに長い苦難の歴史を經た。

そして、サウル王、ダビデ王、ソロモン王の治世によつて、辛うじて國家としての礎を定めたが、それも束の間、ソロモン王の死後に於て、國は南北に分裂して、國力昔日の如くならず。

やがてアッシリヤ大帝國の興起するあつて、北方王國イスラエルは紀元前七二二年を以て滅亡し、その民はアッシリヤ領内の各地に散らされた。

ついで、アッシリヤを倒したバビロンの下に、南方王國ユダも紀元前五八六年を以て同じく潰滅の悲運に際會し、首都エルサレムは廢墟となり、その宗教生活の中心たりし神殿は失はれ、民の優秀なるものは皆バビロンに捕はれ行つて、ここに『俘囚』と

そこには必ず痛刻なる『悲しみ』が經驗されるものである。『悲しみ』は伸びるものの痛みである。生長せざるものに痛みはない。死にたるものに痛みは感ぜられぬ。傷の痛むは、それを恢復せんとの力が働くからである。されば、人の世の罪も、眞實なる悲しみに因つて始めて解決されるのである。人の世の罪が、限り無き悲しみとして感ぜらるるところに、人の世が罪より救はるべき望があるのである。

神に由れる罪の救は、キリストこの世に來り給ふことによつて實現された。悲しむものが、その慰めを與へらるべき可能性が確實となつた。

さればイエスは

『幸福なるかな。悲しむ者、その人は慰められん』と恵の言を發し給ふたのである。

7、受難の民としてのユダヤ人

ユダヤ人は、その全歴史を通して、『悲しみの人』であつた。

狂犬を殺すためには、勇氣を要する。そして、勇氣と力量とさへあればいい、無暗に叩いても矢駄羅に打つても、何の差支へをも起さない。

しかし、狂犬病の絶滅は、勇氣と力量だけではいかぬ。忍耐深い研究室内の努力が要る。研究室内の調査は、無茶苦茶であつてはならぬ。事實に對する忠實なる直面が必要である。

罪の絶滅に對して、組織立ちたる政治と社會改造の運動を試みるは、恰も狂犬を殺すに等しい。これは勇氣と力量とを以て成就し得るものであり、また、そのことが罪の絶滅に多大の貢獻を爲すものであることはいふまでもない。

しかしながら、それは狂犬の撲殺と同じ程度に於て皮相である。

罪に直面して見よ。罪の根本を掘へて見よ。そこには神無くしては癒し得ない深い病根の存するを見るであらう。

この病根を凝視して、猶且微笑し得るものは無い。軍歌勇ましく進軍するのを以て足れりとするものはない。

さういつたやうな説を爲す人々がある。

しかし、事實は何處までも事實である。人は罪人であり、神無くして人はその罪より脱れることはできぬ。

『もし罪なしと云はば、是みづから欺けるにて眞理、我等の中になし（ヨハネ第一書一ノ九）』であつて、我等は我等自らを欺き得るのみ、眞理は何處までも眞理である。ただ、この罪を始末することに於て意見が二つに分れて來る。一は何處までも樂觀主義と勇氣とを以てこれが撲滅を謀らうとするのであり、他は更に深いところにその眼を向けるのである。

罪は之を狂犬に比することができる。その怖ろしさと、その傳播性とに於て頗る相似たるものがあるからである。

狂犬に對するには二つの方法がある。

一は狂犬を殺すことである。

二は狂犬病絶滅に盡すことである。

お前は罪人だ。この世は罪の世だなどと、餘計なことを曰ひ合つて、さらでも憂ひ多い人世を憂鬱にしなくともよい。艱み多いこの世にあつては、何より大切なるものは快活だ、微笑だ。生活難があるではないか、就職難があるではないか。國難があるではないか、家難があるではないか。病があるではないか、死があるではないか。それに加へて、罪人だなどと、さらでも苦しい人世を、より苦しいものにしなくともよい。

さうした女々しい詮議立てよりも、男らしく人生の荒波を乘り切ることが必要だ。

『若き日の驕りは、千夜の罪を消すものを』

とさる詩人も歌つてゐるではないか。

キリスト教の缺點は、餘りに人を罪人扱ひにするために、人生に於ける意氣と勇氣とを擠くことだ。

めに、神の召しに應ずべきを示された。

『我また神の聲をきく、曰く、われ誰を遣はさん、誰かわれらのために往くべきか、と。そのとき我いひけるはわれ此にあり、我をつかはしたまへ』

これがイザヤの體驗であつた。

そして、イエスが『幸福なるかな』と祝福し給ふ三種の人は、このイザヤの體驗を反映したる人々である。

(一)心の貧しき者——それは既に說いたやうに、神の前に己が無價値を自覺せる人々である。

(二)悲しむ者——それは周圍にある人々のこの世に於ける、餘りにも甚だしい罪と惡とに、心裂かるるばかりに感ずる人々である。

(三)柔和なる者——それは、以下說くところを以て明らかであるやうに、罪惡に充ちたるこの世に於て、眞實の方法に由つて、神への奉仕を爲す人々をいふのである。

彼自らの罪と無價値とを自覺し(二)その周圍にある人々の罪と墮落を痛感した。

『このとき、我いへり、禍ひなるかな、我ほろびなん、我は穢れたる唇の民の中にすみて、穢れたる唇の者なるに、我眼、萬軍の主にまします王を見まつればなり』と彼は告白してゐる。

しかし、イザヤが神との接見に由つて學んだのは、單なる罪の自覺ではなく、罪より解脫すべき途の發見であつた。

『セラピムの一人、火箸をもて、壇の上より取りたる熱灰を手にたづさへて我に飛びきたり、わが口に觸ていひけるは、視よ、この火なんぢの唇にふれたれば、既になんぢの惡は除かれ、なんぢの罪はきよめられたりと』

火は二つの作用を有つ。(一)は潔めることである。如何なる黴菌も火の前には滅びざるを得ない。(二)は活力を與へることである。火は動かすのである。

イザヤは己が罪の潔められるを知つた。そして、自ら立つて、世にある罪を除くた

約イザヤ書第六章を見よ)。

彼は幻の中に『聖』なる神を見た。それは全地に満ち給ふ力の神であり。自らの『聖』を持し給ふ厳かなる神である。

彼の前には六つの翼を有する天の使(セラピム)の幾つかが飛翔つてゐる。その一つ一つが

二つの翼を以て面を蔽つてゐる。敬虔の姿である。
二つの翼を以て足を蔽つてゐる。聖潔の姿である。
二つの翼を以て、飛び翔つてゐる。奉仕の姿である。

かくして、セラピムは聲を揃へて

聖なるかな、聖なるかな、萬軍の主
その榮光は全地にみつ

と歌ひ續けるのである。

かくまでに莊嚴な、かくまでも榮光に充ちた神の顯現に接したイザヤは、先づ(一)

るが如くにその魂の滿ち足れるもの、それが祝福の所有者である。

もつと委しくいへば『マカリオス』とは『慶賀さるべきことを前にせるもの』の意である。歐米、何れの言葉に於ても、シックリした譯語を見出し得ない。しかるに、幸福なるかな！　である。日本語の

おめでたう！

は正にその語である。英語が辛うじて、ハッピーと譯したものを、その又請賣りして、『幸福なるかな』と譯さなくてもいい。『おめでたう』である。この親しみに充ちた、生々した、そして美しい語を以て、イエスは『心の貧しき人々』を祝福されるのである。

5、イザヤに示された三つの經驗

豫言者の中の豫言者として、我等に貴い宗教上の眞理を教へて呉れたイザヤは、その豫言者としての召命を神から受けた最初から、深刻なる靈性の體驗者であつた。（舊

されば、イエス・キリストを中心とするこの眞實なる神の國は、『貧しき者』を以て成るのであるが、それは『心』の貧しき者である。その心の經驗として、神に賴る信仰と、人に對する親愛とを持てるものである。

されば、外面に於て貧者であるものも、それだけを以てしては、まだ天國の成員たるべき資格を持たない。富者といへども、心の貧しき者である限り、堂々たる天國の建設者である。

イエスはそのことを說かれた。

そして今、語り給ふイエスの前に蹲坐する人々は、この心の貧しき人々であり、イエスに從ふことによつて、天國を己がものとなし得る幸福な人々である。

幸福なるかな！

かく譯された言葉は『マカリオス』といふ一個の形容詞である。マカリオスの眞意義は、普通に解せられる、幸福といふよりは、寧ろ祝福といふに近い。生命を慾求する生命が、その無くてならぬものを滿し與へられたる狀態が祝福である。腹滿ち足れ

しかし、貧そのものが善でないのと同じやうに、富そのものは悪ではない。富の善用によつて、如何に人類の幸福が増進されるか。富の活用によつて、如何に神の國の進歩が促進されることであるか。

しかるに、神の國は貧しき人々のものであり『富める者の神の國に入るよりは、駱駝の、針の孔を通るかた反つて易し（マルコ傳十ノ二十六）』であるとすれば、富める者はその富を抛擲しない限り、神の國には縁無きものとなり終るのであらうか。

さうでないのである。

ユダヤ人が望んでゐた『神の國』は、イエスに由つて始めてその實現を見たのであるが、イエスに由つて建てられる神の國は、ユダヤ人一般が考へたやうな、武力と政治的手段に由つて持ち來らされるものではなく、人心の變化に由つて實現されるものであつたのである。

うな漁夫達は、如何ばかりその生活維持のために、神に頼らねばならぬことが多いことであるか。

種蒔くより刈り入るるまで、漁場を探すより、網を收めるまで、彼等は神の自然と協力せねばならないのである。そしてその必要は、神への信仰を日毎に強めつゝあるではないか。それは己れ自らの機智と努力とによつて、その夥だしい富を積みつゝある徒、そしてそれがために、己が事業に神を取り入るゝことを忘れ易い輩と、著しい對照を爲すものではないか。それは、神を神殿の中に祭り込んで、人生に於ける神の現實性と無關係なる祭司、字句の末に拘泥し、聖句の文字に殺されて、靈の活力に遠ざかりつゝある教法師達が、夢にも知らぬ神自らの支配ではないか。

それぱかりではない。貧しき人々の間に於ては、かの『世間體（せけんてい）』に囚はれ階級意識の甚だしい『富める者』どもが、思ひも及ばぬ相互扶助と兄弟愛があるではないか。

神の國は、神に對する信仰と、人に對する親愛とを基調として達成される。されば『貧しき者』こそ天國の所有者であるのではないか。

かに物語る黒さに灼けた人々である。

ユダヤ人が理想とした『神の國』――神自らが全地を支配し給ひ、ユダヤ人が、神の民としてその支配權の行使者となる――その輝かしい日は、何人の手に由つて持ち來されるのであらうか、都市に豪奢を極むる上流階級に由つてか、嚴そかなる神殿に、夥多の獻物を己が所得としつゝ、その聖き職權を誇る祭司の群に由つてか、但しは又、會堂の中に、舊約の律法を說くに詳しい學者、パリサイの人々に由つてか。

いや、さうではない。その尊くも慕はしい理想の國は『貧しき者』(ルカ傳六ノ二十を見よ)に由つて來るのである。

貧しいこと、それ自らは、神の聞であるのでない。それとともに、貧しいこと、それ自らには何の靈的價値が存するのでもなく、何等特殊な德性が附いてゐるのでもない。

しかしながら、イエス自ら熟知し給ふやうに、そして彼の語を聞きつゝある弟子達が、餘りにも馴れた經驗として知つてゐるやうに、彼等のやうな農夫達、彼等のや

さうした人々の中に活躍するのである。

3、貧しき人々に與へられた特別の力

イエスの時代に於て、猶全くは取り去られて居なかつた思想は『自業自得』の說である。貧しき人々は、己が過ちに由つて貧しいのである。それは罪の結果であつて、神より呪はれたものであるといふのであつた。

このことに關しては、代々の豫言者達が語を盡して誤謬を指摘したのであつたけれども、猶且全くは除去されず、當時に於ける最も精神的な宗教家として、自他共に免されてゐたパリサイの人々すら、貧しい農夫達を『地の人（アム・ハアレツ）』として輕蔑し、勤勞に由つてその日を糊する漁夫達が、その働きの必要から、裸體で暮す時間の多いのを見て、これを賤しいものだとした。

しかし、イエスの弟子として、今この山の上に、この祝福の語を受けつゝある人々は、イエスと同じい『地の人』の一人であり、或は又その腕が、漁夫たりし日を明ら

更に進んでは、

『罪人の中にて我は首なり（テモテ前書一ノ十六）』と叫んでゐる。

アリストテレースは『メガロプスキア』（偉大なる精神）を推稱した。されば、ある人々（例へばニーチエ）は謙抑の心を以て、小心翼々に類するものとして排斥する。しかも、アリストテレースの推稱した偉大なる精神は、パウロが有した、神に對する謙虚に由つて、始めて贏ち得られるものである。

『我は卑賤にをる道を知り、富にをる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者によりて、凡ての事をなし得るなり（ピリピ書四ノ十二、十三）』との凱歌を擧げ得たのは、彼パウロに外ならぬからである。

貧しき心、神に對する謙虚の心、かうした心の所有者にこそ、神の生命は注がれ得るのである。神の支配（天國とは神の支配といふことである。『天』とは神の名の代用として用ひられたるもの）はさうした人々を通して與へられるのである。神の生命は

へ給ふ恩寵の神に在せしが故に、之を信じ知りたるものは、神の前に自らを謙虚にせざるを得ない。そして彼を知ること愈々深くして、自らの貧しきを悟ること愈々強きを來すのである。

2、貧しき心とは滿たし得る力のことである

使徒パウロは實にこの種の人であつた。

彼が最初に達した道程は、

『我は……使徒と稱へらるるに足らぬ者にて、使徒のうち最小さき者なり（コリント前書十五ノ九）』といふのであつた。キリスト教の建設者とまでも曰はれてゐる大使徒たる彼にして、この言あつたのである。

しかも、イエス・キリストに於ける信仰經驗が更に一段の飛躍を試みるや、彼は

『我は凡ての聖徒（信者）のうちの最小き者よりも小さき者（エペソ書三ノ八）』と告白し、

まことに、さうであらう。枯木に雨露は入らないのである。彼は自らを以て滿足する富める人なるが故に、彼には神の必要がないのである。『生の宗教』の主張者、眞實なる『生』の途を知らずである。

異教の神々を信ずる人々は、神々の前に自らを謙虚にするといふが如きことを知らない。神々は彼等に取つては一種の『取引先』であり、人々が神々に對して爲す奉仕に應じて、神々からの應報があるに過ぎないからである。ただ神々は、時として人間が餘りに幸福であり、餘りに增長する場合、之を嫉妬し、災害を降すことに由つてその怒を表はすと信ぜられてゐたのであるが、それさへも、相當の賄賂として、祭祀と獻物とに努むれば、そこには妥協の餘地が存するものと考へられてゐた。

しかし、ユダヤ人の間に於ける神は、唯一無二なる天地の神、義と聖との神でありしが故に、之を拜するものは、自らの無價値と無力とを痛感せざるを得なかつたのであつた。

そして、イエスに由つて表はされたる神は、人を愛するがために、己が獨子をも與

求めて止まぬは『貧しきこと』である。されば『貧しきこと』は生命の必須條件である。

生命ある人の靈は神を求めて止まぬ。

『汝は我等を、汝自らのために創り給ひたれば、我等の心は、汝の懐に息ふまでは休みを得ず』（オーガステン懺悔錄）である。

滿たす餘裕なき心、收むる力なき心は神を求めぬ。

『西洋の基督教紳士に閉口するのは最初に必ず神が出て來ることである。宇宙間に一大勢力のあることを認めないかといふやうなことを言ひ出す……實際五月蠅いものだ。宇宙は大因果律に依つて支配されるもので、神も一大勢力もありはしない。アイドント・ビリーヴ、エネーシング、バット、セルフ（私は我の外何物も信せず）といつて神樣の御話は、これで打切りにした』

これは『生の宗教』なる一書を著はし、自ら日本に於ける思想上の指導者を以て任ずる、ある人の言である。

二、愛たき人々

——いはゆる「八つの幸福」について(一)——

幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり
幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。
幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。(マタイ傳五章二——五節)

一、生命とは滿たし得る力のことをいふ

生命とは、滿たし得る餘裕のことをいふ、收め得る能力のことをいふ。

兒童が『餓鬼』といはるゝまでに貪り喰ふは、彼等に活きる力と、伸び行く生命との存する證左であり、死に行く病人が、一匙の水さへも呑むに難しとするは、收め得る能力の盡き、生命の將に絶へなんとしてゐることを示す。

生ける草木は雨露を求めて止まぬ。しかし枯れたる花には、水を注ぐの必要がない。

イエスの途が、從ふものの數を以て決せられるならば、それは全的なる失敗であつた。しかし、イエスには『弟子』があつた。彼に『學ぶ者(弟子の原語マセタイ)』があつた。彼より智識を受くるものではなく、彼の生命と生涯とにならふ者があつたのである。かくして、失敗に見へしイエスの事業が、今日世界を征服しつゝあるのである。凡ての人に生命を與へつゝあるのである。

イエスの垂訓が『群集』を背景としつゝ、『山』に於て、『弟子達』を對象として語られたことは、我等の感興を唆るもの多きを覺える。

多くの人を救はんが爲めに、人の子等の爲めに、活くべき道を拓かんが爲めに、十字架上の功業を遂げ給ひしも又『山』に於てであつた。

されば、人の活くべき眞の途を、言を以て語り給ふたものが『山上の垂訓』であるは、まことにふさはしいことではないか。場所は山であつてもいい、或は無くともいい。ただその中心的使命は、かの變貌の山、かのカルバリの山と連なるべき、キリストに由る救の山にその基礎があるを以て足るのである。

4、イエスに學ぶ者

イエスは群集を愛し給ふた。

群集も又イエスを愛した。

イエスの愛は恒久的であつた。

しかし、群集のそれは一時的のものに過ぎなかつたのである。イエスに慕ひ寄つた同じ群集が、彼を十字架にまで逐ひやつたのである。

生命の永遠なるとともに永遠であつたのではあるが、しかし、それは、單なる外的手段に過ぎないものであつた。イエス自らの人格、イエス自らの生命が、彼の教説であつたのである。生きしのみならず活けるキリスト、それありて彼の教説は活き、それ無くして彼の教説は單なる思想體系である。

『イエス群集を見て、山にのぼり……』

何といふ意義深い言であるか。

イエスが教を爲し給ふた山が、何れの山であつたかを詮索するは無益である。マタイ傳の著者が、凡て山上に於て說かれたとしてゐるものを、ルカ傳の著者は、他の關係に由つて傳へてゐるのではないか。

それが一時に述べられたか、又は時を異にして述べられたのか、それは何うでもいい。ただ『山』が大切なのである。『山にのぼり』が意義深長なのである。

世を救ふべき救世主（メシヤ）としての明らかなる召命に、その姿さへ變り給ひしも『山』であつた。

2、イエスの教訓は、生命と人生とを對象とする

イエスの教へを、ある特殊なる人々のみを對象としたものと考へてはならぬ。彼の說き給ふたのは、頭腦の中にのみその存在を許さるる哲學的思辨ではなかつた。それは又、特殊なる儀禮に由つて、特殊なる條件を完成したる、ある特殊なる人々のみを對象とする、かの宗教的教說でもなかつた。それ自體のみに高き價値を有する學者的宏辭でもなかつた。

彼の目標は群集であり、群集の必要が、その教說の主題と動機とを提供したのであつた。

故に、イエスの教は何處までも實際的であり、生命的であり、生活的のものである。

3、教訓の後にあるイエスの人格

しかし、イエスの教說を單なる教說と見てはならぬ。生命的であつた彼の教說は、

であり、またその準備であつたのである。

彼が群集を愛し給ふたといふのは、彼が數を重んじ給ふたといふことでない。神殿に群がれる人々に對して爲されたるよりも、更に永遠的なる價値ある證教を、ただ一人の聽衆なる、サマリアの女に向つて爲し給ふた彼である。

しかし、『人々押し合ふ程に』彼に迫り來る時、我等の主イエスは最も得意であり、又『油の乘つた』態度であらせられたのである。

彼は會堂に於て教へ給ふたのに相違ない。しかし、それにも增して、人々の群がり集ふ市場に、彼は心惹かれ給ふたのであつた。人の生命のパンとして世に來り給ふた彼は、人々がその日毎の糧を求むるその市場に、彼等に無くてはならぬもの、そして彼等に取つての最上のものを與へやうとて、日毎にその姿を現はし給ふたのである。

彼には書齋がなかつた。彼には彼の爲めに特に設けられたる講壇がなかつた。街頭が彼の講壇であり、祈りの山が彼の書齋であつた。彼は純粹なる街頭の人であつたのである。

一、イエスの垂訓

―はしがき―

イエス群集を見て、山にのぼり、坐し給へば、弟子達御許にきたる。イエス口をひらき教へて言ひ給ふ（マタイ傳五章一節）

イエスこれらの言を語りをへ給へるとき、群集その教に驚きたり。それは學者らの如くならず、權威ある者のごとく教へ給へる故なり（同七章二十八、二十九節）

1、街頭人としてのイエス・キリスト

イエスは群集を愛し給ふた。

夕となれば、孤り山に遁れて、父なる神との深き交はりに入り給ふ彼であつた。しかし、その孤獨の祈さへも、やがて黎明とともに巷に馳驅し給はんがための息づき

三、まことの弟子……三〇六
1、言葉る時人は行動する……2、生命は行ひに表はれる……3、返らぬ生命に死ぬるものである
三、この基の上に……――イエスに由る生き方――……三一一
1、岩の上に立てた家と砂上の家……2、有り來りに從ふは砂上の家……3、神の與へ給ふ判斷が眞價値を定める……4、イエスの途こそ最も安全なる人生の基礎

に由つて體現される……

一八、正しき批判……二七〇

1批判の力は正しく用ひなくてはならぬ……2、人の心を知り抜くことは困難である……3、小さきものの中に偉大性を發見せよ

一九、聖なるもの……二七八

1、惡しきものを惡しきものとして見分る力……2、聖を聖とする心掛けの必要

二〇、生くる道……二八四

1、問題に直面せねば分らぬ人生……2、神を人として信ずることの必要……3、ホセアの見た宗教上の惡行……4、パリサイ人と近代人の誤……5、神の與へ給ふものは皆善と信ぜよ……6、人をその最上價に於て受取れ……7、生くる道は見かけ倒しでない

二一、まことの教師……二九九

1、種々異なる聲が我等を導く……、2、眞の教師を見出す方法

等と有心的關係を持つ神……6、神の父性と王權とは同じものである……7、イエスの宗教は物質の重要性を否定しない……8、クリスチヤンは己が魂の防護につとめる

一五、隱し化粧……二三六

1、木の成長に人の力が必要である……2、人の成長にも人と人との共同がいる……3、節制はやむを得ざる必要である……4、必要を過ぎてもなほ用ひらるるものもある……5、規則が無くなるにつれて規則以上のものを要してくる……6、宗教の目的は豐かな生命を與へることである

一六、人か物か……二四七

一七、愛は撰る……二五一

1、煩悶程人の精力を消耗させるものはない……2、生活問題に直面されたイエス……3、己れの爲にのみ計つて生活は安定せぬ……4、愛の働くところに四民の滿足はある……5、衣食の何たるかを忘るゝ努力の生活……6、求むるものの撰擇が必要である……7、自然が最も勝れたる美である……8、明日に對する不安は不健全である……9、神の國と神の義とはイエス

かくして對せよ……6、政府の命令が氣に食はぬ場合……7、パンチの漫畫が教へる眞理……8、拒まれた祝福は己にかへる……9、十字架が教へる眞の正義

一二、神格、心格、人格……——愛敵の精神に就て——……一九八

1、人格の有する二つの特質……2、人格無視があらゆる罪の原因……3、我は次事にその範圍を擴める……4、醇化したる愛國心は貴い……5、人格を中心として始めて正義の國は生れる

一三、愛は秘す……二一一

1、人はその本性として愛の心を持つ……2、グレンフェル氏が實見した一例……3、パリサイ人の教へた宗教の要素……4、慈善が特別のことに見へるのは悪い……5、報ひは最大至高のものを求めねばならぬ

一四、祈りの範……二二一

1、異邦人の神はサルタンであつた……2、パリサイ人の祈禱は人を相手としてゐた……3、眞の道へ出るためにたどる返り道……4、宗教の社會性と同胞性……5、イエスの神は我

3、殺人が惡であることの根本的な理由……4、故なき怒りは道德上及び宗教上の罪……
5、和解なきところに天國は存在しない

九、聖なる性……——性の醇化に就て——……一五二

1、性の衝動を有することは恥づべきでない……2、性慾抑制より來る害惡……3、ヨリ大なる惡とヨリ小なる惡……4、惡所に出入する人々の動機と理由……5、戀愛の特質とその缺點……6、結婚が有する意味と使命……7、謬りの原因は人格の問題

一〇、誓ふなかれ……——言葉の眞實性に就て——……一七三

1、宇宙人生の根本を左右することば……2、ことばの惡用に對するユダヤ人の誡律……
3、イエスの强調し給ひしことばの用ひ方……

一一、愛は與へる……一八五

1、正義といふことの眞實の意義……2、リンカーンの取つた態度……3、正義とは人と人との間に於ける圓滿である……4、古代人の考へた正義は仇討であつた……5、司法の正義には

1、神に到らしむる不滿の心……2、迫害者は如何にして生ずるか……3、限り無き進歩と永遠なる愛が神である……4、日々に新たなる心の更改……5、キリストの愛を理解することの困難……6、ユダヤ人の持つて居た神の國の思想……7、イエスの途が有する特異點……8、まことにめでたきキリストの徒

六、他のための德……一一一

1、パリサイ人の持つ二つの缺點……2、パリサイ人の流れを出て來れるクリスチヤン……3、イエスに從ふものは地の鹽である……4、イエスの教會は世の光である……

七、これを完うする者……律法と精神との問題……一二二

1、ユダヤ人は律法の民であつた……2、ユダヤ人の律法は神より出でたるものである……3、ユダヤ人の律法はモーセに出でた……4、モーセと豫言者とを完成し給ふイエス・キリスト

八、天國と地獄と……——殺人罪の眞意義——……一三八

1、天國と地獄も何れも實在してゐる……2、殺人罪の取扱ひ方には種々の變遷があつた……

三、人生を立體として……——いはゆる「八つの幸福」について(二)——……三七
1、まことの幸福は創り出すことに由つて得られる……2、最も大なる創造はよき人格を作ること……3、飢渇に對する生命としてのイエス・キリスト……4、「義」といふことの眞意義には變遷があつた……5、法制に對する義と人格に對する義……6、あはれみといふことの根本的意義……7、人生に於て成功する最高の途としてのあはれみ……8、生命の源は神、神に從ふは生命の道
四、神に見ゆる神の子達……——いはゆる「八つの幸福」について(三)——……五九
1、孤獨に對する恐れは何人にもある……2、孤獨の感は神に見ゆる第一歩……3、清き心とは赤子の如き心をいふ……4、熱烈なる愛の心に神の姿は映る……5、ユダヤ人は最も清きを貴ぶ民であつた……6、パリサイ人の勤行に用ひられた清め……7、心の清きものとしてのイエスの弟子達……8、天よりの火か、平和の手段か……9、平和は建設であり、神の道である……10、平和はユダヤ人の間に於ける合言葉であつた……11、平和の造成者は神の子達である……
五、日々に新たに……——迫害の心理に就て——……九〇

イエスの垂訓

目次

一、イエスの垂訓……——はしがき——……一

1、街頭人としてのイエス・キリスト……2、イエスの教説は、生命と人生とを對象とする
3、教説の後にあるイエスの人格……4、イエスに學ぶ者

二、慶たき人々……——いはゆる「八つの幸福」について（一）——……七

1、生命とは滿たし得る力のことを云ふ……2、貧しき心とは滿たし得る力のことである……
3、貧しき人々に與へられた特別の力……4、幸福なるかなとは「おめでたう」のこと……
5、イザヤに示された三つの經驗……6、眞理に直面するものは悲しむ……7、受難の民としてのユダヤ人……8、民の中なる悲しむもの……9、人類の救ひとは人類を生かすこと……
10、柔和なる者に與へられる勝利……11、地を嗣ぐものとしてのクリスチヤン

功であるや否やを我等は知らない。ただ我等の心願が正しき原理の上にあるとの確信のみが、我等をしてこれを世に公けにするの勇を持たしめたのである。

一九二九年二月

著者

序

總ての人を照す眞の光として、イエスは世に出で給ふた。故に、彼にある眞理は萬民のものであらねばならぬ。何人にも理解され何人の中にも共鳴を呼び起すものであらねばならぬ。

かくして得られたる理解と共鳴の結果として『敎會』に入る者の起り來るは當然であり又自然である。しかしながら、イエスの眞理を理解せんが爲めには、ある種の儀禮と、ある團體への歸屬とを先決條件とするといふ說に對しては心よりの抗議を我等は持ち出さんとするものである。

思想的外形と字句との上に何等特殊のものを用ひずして、しかもイエスにある眞理の深奥に徹すること、それが我等の心願である。この心願に根ざした始めの成果として、イエスの『山上說敎』に關するこの研究を、世に問ふこととした。この成果が成

村尾昇一著

イエスの垂訓

基督教思想叢書第二巻

東京 イデア書院

THE TEACHINGS OF JESUS
- Sermon On The Mount -

Presented to
The Missionary Library of
Wycliffe Colledge
Toronto
By The Author
(Rev. M.S. Murao, B.A. -'20)

The Leonard Library

Wycliffe College

Toronto

Shelf No. BT 380 M27

Register No. 1928

June 20 1952

基督教思想叢書

II